都城市文化財調査報告書 第50集

横市地区遺跡群

HIZIANA
肱穴遺跡(1)
IMABOU
今房遺跡
MAWATARI
馬渡遺跡(第1次)

―県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2000年3月

宮崎県都城市教育委員会

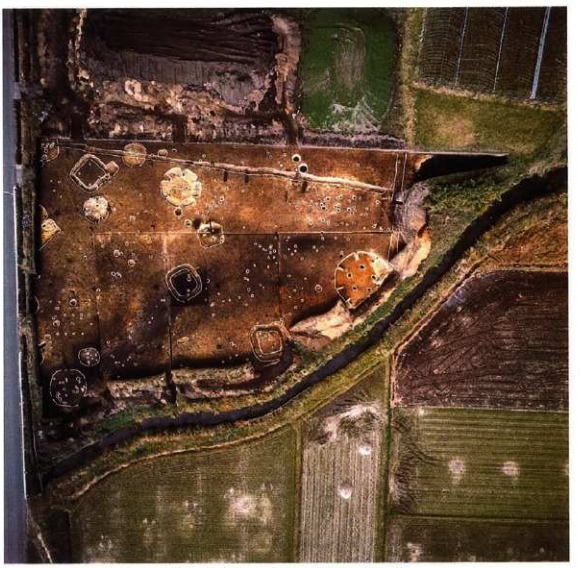
（カラー図版１）

肱穴遺跡遠景（南西上空より月野原台地の方向を望む）

肱穴遺跡全景（縄文時代～平安時代の遺構検出状況）

（カラー図版２）

今房遺跡遠景（南側上空より月野原台地の方向を望む）



今房遺跡　Ａ・Ｄ地区全景

（カラー図版３）

今房遺跡　Ｂ地区全景

今房遺跡　Ｃ地区全景

序　文

本書は、「県営担い手育成基盤整備事業横市地区」に伴って平成10・11年度に都城市教育委員会が調査を実施した横市地区遺跡群の発掘調査報告書です。

当市北西部を流れる横市川の両岸に所在している同遺跡群においては、平成８年度から発掘調査を実施しており、これまでに縄文時代の終りから近世まで連綿と営まれた生活の痕跡が数多く発見されています。とくに縄文時代の終り頃の資料は、都城盆地はもとより南九州地域における稲作文化を明らかにしていく上で大変貴重な事例として注目されています。

本書の刊行を通じ、こうした地域の文化財に対する理解と認識が深まっていくことを願うとともに、今回の成果が学術研究の発展に少しでも寄与できれば幸いです。

最後に、調査の実施に際し御理解と御協力をいただいた横市地区の皆様や北諸県農林振興局をはじめとする関係各機関の方々、調査への御指導・御教示を拝しました先生方、そして炎天下での発掘作業から報告書作成にいたるまで御協力いただいた多くの市民の皆様に対し、心より感謝申し上げます。

２０００年３月

都城市教育委員会
教育長　長 友 久 男

例　言

1．この報告書は、県営担い手育成基盤整備事業横市地区の実施に伴い、都城市教育委員会が平成10・11年度に発掘調査を行った横市地区遺跡群の発掘調査報告書である。なお、今房遺跡と馬渡遺跡(第1次調査)については調査概要を、肱穴遺跡については縄文時代～古代編を収録している。

2．各遺跡の発掘調査地点、面積は次のとおりである。

・肱穴遺跡　宮崎県都城市横市町122-1番ほか　　調査面積：15,000㎡
・今房遺跡　〃　〃　横市町5830番ほか　　調査面積：3,110㎡
・馬渡遺跡　〃　〃　蓑原町1562番ほか　　調査面積：4,500㎡

3．各遺跡の発掘調査期間は次のとおりである。

・肱穴遺跡　平成10年4月22日～平成10年12月15日
・今房遺跡　平成11年5月11日～平成11年12月3日
・馬渡遺跡　平成11年11月25日～平成12年3月31日

4．発掘調査における実測図の作成は、横山哲英、濱田教靖、大盛祐子、原田亜紀子が作業員の協力を得て行ったほか、矢部喜多夫、楽畑光博、米澤英昭(都城市文化課)、下田代清海氏(宮崎県埋蔵文化財センター)らの助力を得た。また、一部の遺構図作成は民間業者に委託した。

5．本書に掲載した出土遺物の実測は、横山、大盛、原田が整理作業員の協力を得て行い、トレースは横山、楽畑、原田が行った。

6．遺構及び遺物の写真撮影は主に横山が行い、一部は矢部の助力を得た。また、空中写真の撮影については民間業者に委託した。

7．自然化学分析については㈱古環境研究所に委託し、分析結果は肱穴遺跡(中・近世編)にまとめて掲載することとした。

8．本書で使用した基準方位は磁北であり、レベルは海抜絶対高である。

9．本書の執筆及び編集は横山が行った。

10．発掘調査及び報告書の作成に際しては、次の方々の御指導・御教示を受けた。

石川悦雄　上村俊雄　重永卓爾　柴田博子　谷口武範　柳沢一男　山本信夫　(五十音順)

11．本書に掲載した各遺跡に関する記録類(写真・図面等)及び出土遺物については、都城市立図書館内の埋蔵文化財整理収蔵室において保存・管理している。

12．本書で用いた略記号は次のとおりである。

ＨＺＡＮ－肱穴遺跡　ＩＭＢ－今房遺跡　ＭＷＴＲ－馬渡遺跡
ＳＡ－竪穴住居　ＳＢ－掘立柱建物　ＳＣ－土坑　ＳＤ－溝状遺構　ＳＥ－井戸　ＳＦ－道路状遺構
ＳＫ－木組状遺構　ＳＴ－周溝状遺構　ＳＵ－畝状遺構　ＳＷ－水田　ＳＸ－用途不明遺構

本 文 目 次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査の組織 …… 1
第Ⅱ章　位置と環境 …… 3
1．地理的環境 …… 3
2．歴史的環境 …… 4
第Ⅲ章　遺跡各説
［肱穴遺跡（1）］
1．調査の概要 …… 6
2．遺跡の基本層序 …… 8
3．遺構と遺物 …… 9
＜1＞縄文時代～古墳時代の遺構・遺物 …… 9
1）縄文時代晩期終末～弥生時代前期 …… 9
円形住居跡 …… 17
水田層 …… 24
柱穴群 …… 24
2）弥生時代後期・終末期～古墳時代初頭 …… 24
溝状遺構 …… 24
木組状遺構 …… 29
3）包含層内出土遺物 …… 29
①土器 …… 29
②木製品 …… 35
③石器 …… 35
＜2＞古代（平安時代）時代の遺構・遺物 …… 39
竪穴住居跡 …… 39
掘立柱建物跡 …… 60
その他の遺構 …… 67
水田跡 …… 69
包含層内出土遺物 …… 74
4．小結 …… 90
［今房遺跡］
1．調査の概要 …… 104
2．遺跡の層序 …… 104
3．遺構と遺物 …… 105
1）A地区 …… 105
2）B地区 …… 108
3）C地区 …… 109
4）D地区 …… 109

［馬渡遺跡（第１次）］
１．調査の概要 ---------- 110
２．遺跡の層序 ---------- 110
３．遺構と遺物 ---------- 111
１）Ａ地区 ---------- 111
２）Ｂ地区 ---------- 114

挿　図　目　次

付図　肱穴遺跡（縄文～古代）遺構分布図
第１図　遺跡位置図 ---------- 3
第２図　周辺遺跡分布図 ---------- 5
［肱穴遺跡（１）］
第３図　肱穴遺跡周辺地形図及び試掘トレンチ配置図 ---------- 6
第４図　肱穴遺跡調査区域図 ---------- 7
第５図　肱穴遺跡基本土層図 ---------- 8
第６図　肱穴遺跡第６トレンチ南壁土層断面図（西半部） ---------- 10～11
第７図　肱穴遺跡第６トレンチ南壁土層断面図（東半部） ---------- 12～13
第８図　肱穴遺跡第５トレンチ西壁土層断面図（南半部） ---------- 14～15
第９図　肱穴遺跡（縄文～古代）遺構分布図 ---------- 16
第10図　J-SA01（１号住居跡）実測図 ---------- 18
第11図　J-SA02（２号住居跡）実測図 ---------- 18
第12図　J-SA03（３号住居跡）実測図 ---------- 19
第13図　J-SA04（４号住居跡）実測図 ---------- 20
第14図　J-SA04（４号住居跡）内出土遺物実測図 ---------- 20
第15図　J-SA05（５号住居跡）実測図 ---------- 21
第16図　J-SA06（６号住居跡）実測図 ---------- 21
第17図　肱穴遺跡第７トレンチ西壁土層断面図 ---------- 22～23
第18図　Y-SD01～03（１～３号溝）・Y-SK01（１号木組状遺構）実測図 ---------- 26～27
第19図　Y-SK01（１号木組状遺構）実測図 ---------- 28
第20図　柱穴（縄文～弥生）内出土遺物実測図 ---------- 28
第21図　Y-SD01～03（１～３号溝）内出土遺物実測図① ---------- 28
第22図　Y-SD01～03（１～３号溝）内出土遺物実測図② ---------- 30
第23図　Y-SD01（１号溝）・Y-SK01（１号木組状遺構）内出土木製品実測図 ---------- 31
第24図　包含層内出土遺物（縄文～古墳）実測図① ---------- 32
第25図　包含層内出土遺物（縄文～古墳）実測図② ---------- 34
第26図　包含層内出土遺物（縄文～古墳）実測図③ ---------- 36
第27図　包含層内出土遺物（縄文～古墳）実測図④ ---------- 37
第28図　包含層内出土遺物（縄文～古墳）実測図⑤ ---------- 38
第29図　包含層内出土遺物（縄文～古墳）実測図⑥ ---------- 39

第30図　肱穴遺跡掲載遺物（縄文～古墳時代）分布図 ---- 40
第31図　A-SA01・12（1・12号竪穴住居跡）実測図 ---- 42～43
第32図　A-SN01（1号カマド状遺構）実測図 ---- 42～43
第33図　A-SN02（2号カマド状遺構）実測図 ---- 42～43
第34図　A-SA01（1号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 44
第35図　A-SA12（12号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 44
第36図　A-SA03・11・15（3・11・15号竪穴住居跡）実測図 ---- 46
第37図　A-SA03（3号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 47
第38図　A-SA05（5号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 47
第39図　A-SA04（4号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 47
第40図　A-SA11（11号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 47
第41図　A-SA15（15号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 47
第42図　A-SA04（4号竪穴住居跡）実測図 ---- 49
第43図　A-SA05（5号竪穴住居跡）実測図 ---- 49
第44図　A-SA02・06・07・09・10・14（2・6・7・9・10・14号竪穴住居跡）実測図 ---- 50～51
第45図　A-SA02（2号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 52
第46図　A-SA06（6号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 52
第47図　A-SA07（7号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 52
第48図　A-SA09（9号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 53
第49図　A-SA14（14号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 53
第50図　A-SA10（10号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 54
第51図　A-SA08・16（8・16号竪穴住居跡）実測図 ---- 55
第52図　A-SN03（3号カマド状遺構）実測図 ---- 55
第53図　A-SA08（8号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 57
第54図　A-SA16（16号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 57
第55図　A-SA13（13号竪穴住居跡）内出土遺物実測図 ---- 57
第56図　A-SA13（13号竪穴住居跡）実測図 ---- 58
第57図　A-SN04（4号カマド状遺構）実測図 ---- 59
第58図　A-SB01・02（1・2号掘立柱建物建物跡）実測図 ---- 61
第59図　A-SB03～06（3～6号掘立柱建物建物跡）実測図 ---- 62
第60図　A-SB07～09（7～9号掘立柱建物建物跡）実測図 ---- 63
第61図　A-SB01（1号掘立柱建物建物跡）柱穴内出土遺物実測図 ---- 65
第62図　A-SB02（2号掘立柱建物建物跡）柱穴内出土遺物実測図 ---- 65
第63図　A-SB06（6号掘立柱建物建物跡）柱穴内出土遺物実測図 ---- 65
第64図　A-SB07（7号掘立柱建物建物跡）柱穴内出土遺物実測図 ---- 65
第65図　古代柱穴内出土遺物実測図① ---- 65
第66図　古代柱穴内出土遺物実測図② ---- 66
第67図　A-SC06（6号土坑）内出土遺物実測図 ---- 66
第68図　A-SC07（7号土坑）内出土遺物実測図 ---- 66
第69図　A-SW01（1号古代水田跡）内出土遺物実測図 ---- 66

第70図　A-SW02（２号古代水田跡）内出土遺物実測図 ---------- 66
第71図　古代水田跡内出土遺物実測図 ---------- 66
第72図　中世水田跡内出土遺物実測図 ---------- 66
第73図　近世道路状遺構内出土遺物実測図 ---------- 66
第74図　近世水田跡内出土遺物実測図 ---------- 66
第75図　近世柱穴内出土遺物実測図 ---------- 66
第76図　近世溝状遺構内出土遺物実測図 ---------- 66
第77図　A-SC01～05（１～５号土坑）実測図 ---------- 68
第78図　A-SC06～09（６～９号土坑）実測図 ---------- 69
第79図　古代竪穴住居跡・水田跡周辺土層断面図 ---------- 70～71
第80図　A-SW01～04（１～４号古代水田跡）実測図 ---------- 72～73
第81図　包含層内出土遺物（古代）実測図① ---------- 75
第82図　包含層内出土遺物（古代）実測図② ---------- 76
第83図　包含層内出土遺物（古代）実測図③ ---------- 78
第84図　包含層内出土遺物（古代）実測図④ ---------- 79
第85図　包含層内出土遺物（古代）実測図⑤ ---------- 81
第86図　包含層内出土遺物（古代）実測図⑥ ---------- 84
第87図　包含層内出土遺物（古代）実測図⑦ ---------- 86
第88図　包含層内出土遺物（古代）実測図⑧ ---------- 87
第89図　包含層内出土遺物（古代）実測図⑨ ---------- 88
第90図　包含層内出土遺物（古代）実測図⑩ ---------- 90
［今房遺跡］
第１図　今房遺跡基本土層図 ---------- 104
第２図　今房遺跡調査区域図 ---------- 105
第３図　今房遺跡Ａ・Ｄ地区遺構分布図 ----- 106
第４図　今房遺跡Ｂ地区遺構分布図 --------- 107
第５図　今房遺跡Ｃ地区遺構分布図 --------- 107
［馬渡遺跡(第１次)］
第１図　馬渡遺跡(第１次)調査区域図 ------- 111
第２図　馬渡遺跡(第１次)Ａ地区遺構分布図 - 112
第３図　馬渡遺跡(第１次)Ｂ地区遺構分布図 - 113

表　目　次

表１　肱穴遺跡出土遺物観察表（１）------- 92
表２　肱穴遺跡出土遺物観察表（２）------- 93
表３　肱穴遺跡出土遺物観察表（３）------- 94
表４　肱穴遺跡出土遺物観察表（４）------- 95
表５　肱穴遺跡出土遺物観察表（５）------- 96
表６　肱穴遺跡出土遺物観察表（６）------- 97
表７　肱穴遺跡出土遺物観察表（７）---------- 98
表８　肱穴遺跡出土遺物観察表（８）---------- 99
表９　肱穴遺跡出土遺物観察表（９）---------- 100
表10　肱穴遺跡出土遺物観察表(10)---------- 101
表11　肱穴遺跡出土遺物観察表(11)---------- 102
表12　肱穴遺跡出土遺物観察表(12)---------- 103

図 版 目 次

カラー図版

肱穴遺跡遠景（南西上空より月野原台地の方向を望む）　肱穴遺跡全景（縄文時代～平安時代の遺構検出状況）

今房遺跡遠景（南側上空より月野原台地の方向を望む）　今房遺跡 A・D地区全景

今房遺跡 B地区全景　今房遺跡 C地区全景

［肱穴遺跡（1）］

図版 9　遺構検出状況（縄文～弥生）、遺構内遺物出土状況（縄文～弥生）、遺構完掘状況（縄文～弥生）------ 124

図版10　遺物出土状況（縄文）、トレンチ遠景、水田該当層（縄文～弥生）、遺構検出・完掘状況（弥生～古墳）-- 125

図版11　遺構検出・完掘状況（弥生～古墳）、遺構土層断面（弥生～古墳）、遺構内遺物出土状況（弥生～古墳）-- 126

図版12　植物遺体・木製品出土状況（縄文～弥生）、遺構検出状況（古代）、遺構完掘状況（古代）---------- 127

図版13　遺構検出状況（古代）、遺構完掘状況（古代）---------- 128

図版14　遺構検出状況（古代）、遺構完掘状況（古代）、柱穴内遺物・柱根出土状況（古代）---------- 129

図版15　肱穴遺跡出土遺物 1 ---------- 130

図版16　肱穴遺跡出土遺物 2 ---------- 131

図版17　肱穴遺跡出土遺物 3 ---------- 132

図版18　肱穴遺跡出土遺物 4 ---------- 133

図版19　肱穴遺跡出土遺物 5 ---------- 134

図版20　肱穴遺跡出土遺物 6 ---------- 135

図版21　肱穴遺跡出土遺物 7 ---------- 136

図版22　肱穴遺跡出土遺物 8 ---------- 137

図版23　肱穴遺跡出土遺物 9 ---------- 138

図版24　肱穴遺跡出土遺物10 ---------- 139

図版25　肱穴遺跡出土遺物11 ---------- 140

図版26　肱穴遺跡出土遺物12 ---------- 141

図版27　肱穴遺跡出土遺物13 ---------- 142

図版28　肱穴遺跡出土遺物14 ---------- 143

図版29　肱穴遺跡出土遺物15 ---------- 144

図版30　肱穴遺跡出土遺物16 ---------- 145

図版31　肱穴遺跡出土遺物17 ---------- 146

図版32　肱穴遺跡出土遺物18 ---------- 147

［今房遺跡］

図版 1　遺構完掘状況（A地区）、遺構内遺物出土状況（A地区）、住居内柱穴検出状況（A地区）---------- 116

図版 2　遺構完掘状況（A地区）、遺構内遺物出土状況（A地区）、中世遺構群検出状況（A地区）---------- 117

図版 3　遺構検出状況（B地区）、遺構完掘状況（B地区）---------- 118

図版 4　遺構検出状況（C地区）、遺構内遺物出土状況（C地区）、遺構完掘状況（C地区）---------- 119

図版 5　遺構検出状況（D地区）、遺構内遺物出土状況（D地区）、遺構完掘状況（D地区）---------- 120

図版 6　遺構検出状況（D地区）、遺構内遺物出土状況（D地区）、遺構完掘状況（D地区）---------- 121

［馬渡遺跡（第 1 次）］

図版 7　遺構群検出状況（A地区・B地区）、遺構内遺物出土状況（B地区）、砂礫層堆積状況（B地区）------- 122

図版 8　遺構検出状況（B地区）、遺構内遺物出土状況（B地区）、遺構完掘状況（B地区）---------- 123

第Ⅰ章　序　　説

1．調査に至る経緯

宮崎県都城市の北西部に位置する横市地区では、平成５年度に県営ほ場整備事業(平成９年度より県営担い手育成基盤整備事業に移行)の実施が採択された。翌平成６年度、宮崎県北諸県農林振興局から文化財の所在の有無について照会を受けた宮崎県文化課が横市川流域の詳細な分布調査を実施したところ、事業対象区域(約170ha)内で周知、未周知を合わせて10遺跡、約44haに及ぶ埋蔵文化財包蔵地(総称「横市地区遺跡群」)の分布が確認された。さらに、平成９年度施工予定の横市町表地区(横市川上流左岸)において県文化課が試掘調査を実施した結果、事業区域内に古墳時代から中世にかけての遺跡が所在することが明らかになったため、都城市教育委員会と北諸県農林振興局の間で協議を行い、平成８・９年度の縄喰遺跡発掘調査を皮切りに横市地区遺跡群の発掘調査に着手することとなった。

平成10年度は横市町出水地区において約13haのほ場整備が計画されたため、県文化課が平成９年６月に事業区域約６haを対象とする試掘調査を実施した。その結果、事業予定区域西側の舌状丘陵縁辺部で古代から中世にかけての土師器片が出土したほか、低地部分の文明降下軽石層下部からイネのプラントオパールが検出されたことから、当該期の集落及び水田が遺存していると推察された。そこで当市教育委員会と北諸県農林振興局の間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、現状保存が困難な約1.5haを対象に記録保存の措置を講ずることとなった。なお、今回の調査対象区域は未周知の埋蔵文化財包蔵地であったため、字名をもとに肱穴遺跡と命名し、新たに都城市遺跡台帳に登録した。同遺跡の調査は平成10年４月22日から着手し、同年12月15日に終了した。出土遺物や図面等の整理作業については、調査終了後引き続き都城市埋蔵文化財整理収蔵室において行った。

平成11年度は、約８haのほ場整備が実施される横市町今房地区(今房遺跡)と、平成11・12年度に約12haのほ場や用水施設の整備が行われる蓑原町の馬渡地区の一部(馬渡遺跡・第１次調査)について調査を実施している。両地区では県文化課が平成９年６月と平成10年11月に確認調査を実施しており、今房遺跡では弥生時代後期の土器や古代の土師器などとともに柱穴等が、馬渡遺跡では古代の土師器や中世の青磁、柱穴状の落ち込みなどが検出されている。調査期間中の工法変更による調査区域の拡大分も含め、平成11年度の最終的な調査面積は約7,610㎡(今房遺跡：約3,110㎡、馬渡遺跡第１次調査：約4,500㎡)である。現場での発掘作業は今房遺跡が平成11年５月11日から平成11年12月３日、馬渡遺跡が平成11年12月１日から平成12年３月29日にかけて行った。また、出土遺物や図面等の整理作業については発掘調査と並行して行い、調査終了後も引き続き都城市埋蔵文化財整理収蔵室において実施した。

2．調査の組織

横市地区遺跡群の発掘調査は、都城市が宮崎県の委託を受け、都城市教育委員会が主体となって実施した。発掘調査及び整理作業にかかる組織は下記のとおりである。

<平成10年度－肱穴遺跡－>

[調査総括]	教育長	隈元幸美
	教育部長	青木義春
	文化課課長	遠矢昭太
	文化課課長補佐	綿田秋嗣
	文化課文化財係長	中村久司

［調査庶務］　文化課文化財係主査　矢部喜多夫　　文化課臨時職員　漆島賢子
［調査担当］　文化課文化財係主事　横山哲英
　　文化課文化財係嘱託　濱田教靖（平成10年４月１日～９月30日）
［調査補助員］文化課文化財係嘱託　大盛祐子
［発掘作業員］古村則子・古村洋平・城村ミサ・高橋露子・久留保・横山照良・阿久根トシエ・奥スズ子
山下美佐子・竹中美代子・吉永美登志・横山ミチ子・野村ハツミ・柿木登記子・伊達トミ
猪ヶ倉カズ子・野海ノリ子・平田美智子・稲元ミツ子・今山キミ・後田アヤ・柿木カツ子
丸目美知子・白谷義治・児玉時春・山下健市・今村まさ子・堀登・吉永サダ・園元トシエ
山中輝雄・小山田ハツ子・山中マリ・上宮田ミチ・来住タケ子・谷山トミ子・内村ヨシ子
永田義晴・永田シゲ子・徳満ミツ・徳満和子・広村ミキ・皆吉洋子・内村好子・榎木ハナ
榎木ツネ・児玉ワイ・坊地トミ・立野良子・庄屋幸子・丸目ミチエ・武石重利・福重節子
木牟礼篤子・皆吉ハツミ・永田美千代・馬籠恵子・蔵薗スズ子・竹之内篤義・坂元トミ子
和田利雄・野口虎男・浜田寛・中原貞良・宮元孝子・岩切ユキ子・立山君子・蒲生ミツ子
南スミ子・藤田フヂ子・福元直子・野上格・有水トミ・東前利雄・蒲生サダ・野田ツミ子
来住サチ子・荒ヶ田安夫・野上トシ子・猪ヶ倉正子・今別府一夫・椎屋松子・松原ヨシコ
花吉ユキ子・鶴松雄・鶴芳明・東泰雄・曽原主吉・堀川カズ子・當房正雄・今別府シヅエ
横市義光・北迫忠作・水落サダ子・小村利雄・長友幸雄・長友健・中馬保親・大山伊智子
奥利治・山下兼文・寺田庸平・雁野晃一郎・武石アキ
［整理作業員］猪股幸千代・児玉信子・池崎美智子・吉留優子・丸崎千鶴子・久保美佐枝・水光弘子
奥登根子・池谷香代子・雁野あつ子

＜平成11年度－今房遺跡・馬渡遺跡（第１次）－＞

［調査総括］　教育長　限元幸美（～平成11年６月）
　　教育長　長友久男（平成11年７月～）
　　教育部長　轟木保紘
　　文化課課長　入木昭良
　　文化課課長補佐　盛満和男
　　文化課文化財係長　堀之内克夫
［調査庶務］　文化課文化財係主査　矢部喜多夫　　文化課臨時職員　小田尚子
［調査担当］　文化課文化財係主事　横山哲英
［調査補助員］文化課文化財係嘱託　原田亜紀子
［発掘作業員］古村則子・古村洋平・城村ミサ・高橋露子・久留保・横山照良・阿久根トシエ・奥スズ子
山下美佐子・竹中美代子・吉永美登志・横山ミチ子・野村ハツミ・平田美智子・今山キミ
後田アヤ・児玉時春・山下健市・今村まさ子・堀登・山中輝雄・小山田ハツ子・山中マリ
上宮田ミチ・藤田和子・永田義晴・徳満ミツ・徳満和子・広村ミキ・内村好子・榎木ハナ
谷山トミ子・榎木ツネ・坊地トミ・立野良子・庄屋幸子・武石重利・抜迫清美・馬籠恵子
皆吉ハツミ・武石アキ・今村ミツ子・蔵薗スズ子・坂元トミ子・木牟礼篤子・野田ツミ子
野口虎男・浜田寛・中原貞良・蒲生サダ・来住サチ子・野上トシ子・猪ヶ倉正子・奥利治
椎屋松子・大山伊智子・綿田慎也
［整理作業員］大盛祐子・児玉信子・池崎美智子・吉留優子・丸崎千鶴子・水光弘子・奥登根子
雁野あつ子

第Ⅱ章　位置と環境

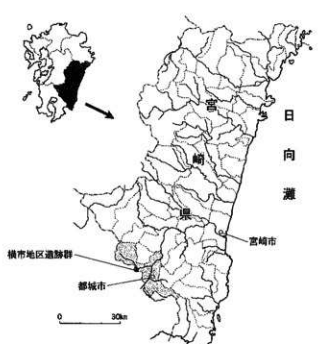
1．地理的環境

横市地区遺跡群の所在する都城市は、九州島の東南部、宮崎県の南西部に位置している。市域は東を柳岳、東岳を主峰とする鰐塚山地に、西を白鹿岳、瓶台山から霧島山系へと連なる山地に囲まれた、南北に細長い地溝状の盆地底のほぼ中央を占めている。当遺跡群の所在する横市地区は都城市街地の北西部に位置し、県境をはさんで鹿児島県曽於郡に隣接している。地区の中央には白鹿岳の裾野に端を発する大淀川水系の横市川が東流しており、流域の低地面（旧氾濫原面）をはさんで南北に成層シラス（二次シラス）台地である蓑原、月野原の両台地面が広がっている。

肱穴遺跡は、宮崎県都城市横市町122-1番ほか（字肱穴）に所在する。当遺跡は横市川左岸に位置しており、月野原台地の端部が南側の横市川へ向けて緩やかに傾斜する沖積世の低位段丘面上に立地している。遺跡の標高は海抜142 ～144mで、河川流域の氾濫原面との比高差は2～4ｍほどである。当該地の現況は水田で、旧地形に合わせるように水田面が調査対象区域の北西角から南東方向へと段差をもちながら扇状に形成されている。「出水」の地名が示す通り、古来より月野原台地からの伏流水が湧出する地であったと考えられ、今回の調査でも湿田を乾田に改良する目的で近・現代に行われた盛土工事の痕跡がみとめられた。

横市川の左岸に位置している今房遺跡は、月野原台地と横市川流域に広がる低地面の間に形成された沖積世の低位河岸段丘面端部に立地している。遺跡の標高は海抜約142mで、氾濫原面との比高差２～３ｍを計る。当該地一帯の現況は水田及び畑地である。

鹿児島県境に西接している馬渡遺跡は、肱穴遺跡から２kmほど上流の横市側右岸に位置している。当遺跡は蓑原台地北縁に形成された海抜約148mの河岸段丘上に立地しており、横市川流域の低地面へ向けて２～４ｍほどの比高差を保ちながら緩やかに傾斜している。遺跡の北面以外は旧河川の浸蝕によって溝状に削られた蓑原台地北端の斜面が迫っており、とくに東側には縄文時代から古代にかけての集落跡が検出された中尾山・馬渡遺跡が立地する舌状台地が接している。



第１図　遺跡位置図

2．歴史的環境

横市地区の歴史的環境については、周辺で確認・調査されている遺跡から、縄文時代早期まで溯ることができる。まず、肱穴遺跡の対岸、萎原台地北端の緩傾斜地に所在する田谷・尻枝遺跡では、散石状の礫群とともに縄文時代早期中葉頃の円筒形土器や磨石が出土しており、さらにその下部からは陥し穴１基が検出されている。また、同遺跡では縄文時代中期頃に霧島山系御池火口より噴出した御池降下軽石が堆積した陥し穴も確認されている。前期から中期についてはこれまでのところ明瞭な資料が確認されていないが、後期に入ると横市川南岸の中位河岸段丘上に立地する正坂原遺跡で出土した回線文・磨消縄文系の綾式土器や指宿式土器、貝殻文系の市来式土器、萎原台地北縁に所在する加治屋遺跡（第２次調査）の三万田式土器などの遺物が散見され、月野原台地南部の牧ノ原第２遺跡では当該期の竪穴住居址も発見されている。流域の遺跡においては、少量ずつながらもかなり普遍的に晩期の遺物がみとめられるが、とくに萎原台地北端の舌状部に立地している中尾山・馬渡遺跡の孔列文土器や、正坂原遺跡出土の黒川式土器、刻目突帯文土器などは肱穴遺跡との関連性も含めて興味深い。

当地区の弥生時代の遺跡については、瀬戸内系の回線文土器が出土した牧ノ原第２遺跡や同じ月野原台地の南端に所在する月野原第２遺跡、母智丘山頂部の母智丘原第１遺跡など、これまでのところ中期後半以降に集中している。後期から終末期にかけては、２次に亘る調査で後期末の竪穴住居址や周溝状遺構、後期後半～終末期の竪穴住居址が検出された加治屋遺跡や当該期の遺物が出土した池原遺跡、月野原台地北端に立地し同じ後期・終末期頃の遺構・遺物が出土した大久保第２遺跡などが所在しており、時代が下るにつれて集落が低位段丘面から台地上に移動していく過程を追うことができるとともに、眼下の低地面一帯が徐々に耕地化されていったことも推察される。

古墳時代では、平成８・９年度の県営ほ場整備事業に伴って調査が実施された鶴喰遺跡の後期の集落が特筆される。都城市域では初めてのカマドを伴う竪穴住居を含め68軒の住居址が検出されており、完形の馬鐸など豊富な遺物も注目されている。また、同時期とみられる竪穴住居址は月野原台地南部の母智丘原第２遺跡でも出土しているが、当地区一帯では弥生時代と同様に、古墳時代についても後期以前の遺跡が皆無であり、今後の事例増が待たれる。なお、大久保第２遺跡のほぼ対岸、東流する大淀川水系・庄内川左岸の河岸段丘上には、これまでに14～15基の墓が確認されている菓子野地下式横穴墓群が立地している。都城市内に分布している３つの地下式横穴墓群の１つで、複数の人骨とともに貝輪や鉄剣・鉄鏃などが出土している。

市の東部を西流する大淀川水系の神水川流域から横市川流域にかけての地域には、古代末～中世初頭頃の遺跡が点在しており、旧日向国から旧大隅国、旧薩摩国へと繋がる古代のルートがこの地域に存在していた可能性も想定されている。古代の横市川流域を代表する遺跡としては、中尾山・馬渡遺跡が挙げられる。遺構の面から公的施設や寺院等の可能性を示唆することはできないが、墨書土器や緑釉陶器、越州窯系青磁など多量に出土した遺物の組成をみる限り、一般集落とは異なる様相を呈しているといえよう。なお、当地区一帯では鶴喰遺跡や牧ノ原第２遺跡、母智丘第１遺跡などでも当該期の遺物が出土している。

中世については、集落跡やその生産基盤となる水田・畑跡、山城などが多く確認されている。横市川下流域の正坂原遺跡では、12世紀中・後半を中心に15世紀後半頃（桜島起源の文明軽石降下前）まで永続的に営まれた集落跡が検出されている。棟軸の違いから数段階の変遷過程が追える掘立柱建物群や木棺土壙墓など、当時の集落構造を復元的に捉えることができる遺構群や、文明軽石の降下で埋没した畝状遺構（畑跡）などが確認されている。一方、中世前半頃の居館址の可能性が指摘されている鶴喰遺跡からは、大量の土師器・舶載磁器類とともに、回廊状遺構や柱穴に礎石を伴う大型掘立柱建物等が検出されている。また、

同遺跡においては宮崎県内では初例となる火山災害(文明軽石の降下)を被った中世水田跡が発見され、被災後に耕地の復旧を試みた痕跡も確認されている。こうした水田跡の類例は、鶴喰遺跡の発掘以降周辺遺跡の調査が進むにつれ増加する傾向にあり、今後これまで不明であった生産基盤の様相についても明らかになっていくと思われる。鶴喰遺跡の北西部には、南北朝期の文献史料を初見とする新宮城跡が位置している。南九州地域に分布する、いわゆる「南九州館屋敷型」あるいは「群郭式城郭」と呼ばれる城郭に比べるとかなり小規模で、村落領主の拠点である館城と呼ばれる範疇に含まれる山城である。なお、横市地区に隣接する庄内地区には、市内を代表する「南九州館屋敷型」城郭の1つであり、遠堀に囲まれた総構の範囲が30haを越える安永城が所在している。

1．伊勢谷第1遺跡　2．丸山第1遺跡　3．安永城跡　4．菓子野地下式横穴墓群
5．母智丘原第1遺跡　6．母智丘原第2遺跡　7．牧ノ原第2遺跡　8．大久保第2遺跡
9．月野原第2遺跡　10．畑田遺跡　11．新宮城跡　12．鶴喰遺跡
13．肱穴遺跡　14．今房遺跡　15．馬渡遺跡　16．中尾山・馬渡遺跡
17．加治屋遺跡　18．田谷・尻枝遺跡　19．正坂原遺跡　20．池原遺跡
21．西原第2遺跡　21．ニタ元遺跡

第2図　周辺遺跡分布図

HIZI　ANA

肱穴遺跡(1)

(縄文時代～古代編)

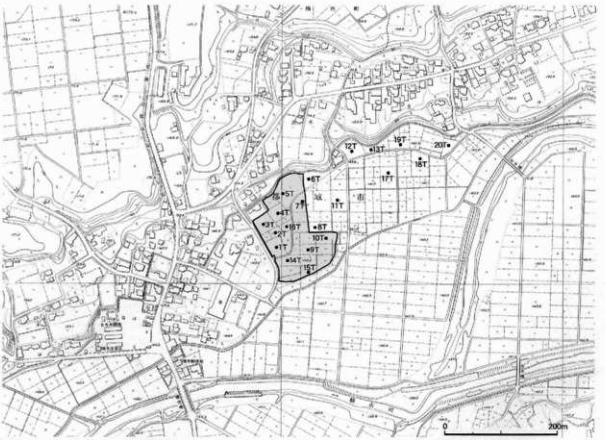
遺跡略号：HZAN
所在地：宮崎県都城市横市町字肱穴

1．調査の概要

肱穴遺跡の発掘調査は、ほ場整備に伴う面工事によって削平される範囲及び排水路・農道の敷設部分である約15,000㎡を対象に実施した。発掘は10m×10mを１単位とするグリッド法を用いて行い、調査対象区域には公共座標軸系のＳ・Ｎ座標線に一致したメッシュを設定した。グリッド番号については、南北方向を算用数字で、東西方向をアルファベットで表記し、その組み合わせで各グリッドを呼称している。なお、調査の便宜上、現況の水田面の高低差にあわせて調査区を３面に区分し、さらに第１面をＡ～Ｄ区、第２面をＡ・Ｂ区に細分した。

調査は、ほ場整備後に復する現水田耕作土の剥ぎ取りを事業者側が行った後、重機を用いて中世水田跡の出土が予想された第Ⅲ層(桜島文明降下軽石層)上面まで掘り下げるところから着手した。しかし、中世水田の覆土である第Ⅲ層が旧地形の起伏や近世以降の耕作に伴う攪乱によってかなり乱れており、加えて掘り下げの過程で試掘調査では確認されていない近世の遺構・遺物が多量に出土したため、第Ⅱｂ層以下について急遽手作業で発掘を進めることになった。その結果、第１・２面を中心とする区域の第Ⅱｂ層中位面で近世～近代の遺物を伴う溝状遺構・掘立柱建物跡・水田跡等を検出することができたほか、第Ⅲ層及び第Ⅳａ層上面で中世の畝状遺構・水田跡を確認することができた。また、調査の過程で、東西・南北方向に設定した土層観察用基本トレンチ内から古代の遺物が出土したため、中世遺構群の調査後、重機と人力を併用して下位の第Ⅳｅ層まで掘り下げたところ、第１面Ａ・Ｃ区北側の第Ⅳｅ層・第Ⅴｂ層上面において古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を、さらに第１面Ｄ区及びＣ区の南側で縄文時代晩期終末～弥生時代前期頃の住居跡や弥生時代後期・終末期～古墳時代初頭頃の溝状遺構などを確認することができた。

現場における作業は、平成10年４月22日から12月15日まで行い、その後遺物の整理と報告書の作成を行った。なお、平成10年12月５日には市民を対象とする現地説明会を実施している。



第３図　肱穴遺跡周辺地形図及び試掘トレンチ配置図

第４図　肱穴遺跡調査区域図

2．遺跡の基本層序

肱穴遺跡の層序は、調査地点ごとにかなり異なった様相を呈している。調査区全域で普遍的に認められるのは、表土（現耕作土）、第Ⅲ層（15世紀後半頃に噴出した桜島起源の文明降下軽石層）、第Ⅳｃ層（約4,200年前に霧島御池火口より噴出した御池降下軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層）の３層であることから、当遺跡の基本土層として、表土から霧島御池降下軽石層までを大きくⅠ～Ⅴ層に分層した後、表土と調査の指標となる２枚のテフラ層（第Ⅲ層：桜島文明軽石層と第Ⅴｂ層：霧島御池軽石層）に挟まれ、旧地形の起伏（調査区南西部から北東方向へ抜ける谷地形）などの影響を受けて堆積状況が地点ごとに変化している第Ⅱ・Ⅳ層について、さらに29層に細分した。なお、各層の説明及び分層の仕方については、自然化学分析の結果を受けて古環境研究所が示した内容や概要報告書の記述と若干の差異が認められるが、本編中ではここに示した基本土層図の表現を優先している。

土層の堆積状況が地点ごとに異なっているため、各時期の遺構検出面も地区ごとに変化している。おおむね近世～近代は第Ⅱｂ～Ⅱｄ層（第１面）、第Ⅱｅ層（第２面）、中世は第Ⅲ・Ⅳａ層（第１面）、第Ⅱｄ・Ⅲ・Ⅳｂ層（第２面）、第Ⅲ層（第３面）、古代は第Ⅳｃ・Ⅴｂ層（第１面）、弥生後期・終末期は第Ⅳｃ・ｆ・ｋ層（第１面）、縄文晩期～弥生前期は第Ⅳｍ・Ⅴｂ層の各上面が遺構検出面となっている。また、各時期の遺物包含層は、近世～近代：第Ⅱａ～Ⅱｃ層、中世：第Ⅳａ・Ⅳｂ層、古代：第Ⅳｃ～Ⅳｅ層、弥生後期・終末期：第Ⅳｄ・Ⅳｊ・Ⅳｋ層、縄文晩期～弥生前期：第Ⅳｅ・Ⅳｆ・Ⅳｋ～Ⅳｎ層の各層である。

第５図　肱穴遺跡基本土層図

3．遺構と遺物

今回の調査で確認した遺構は、概ね５時期に大別することができる。

まず、縄文時代晩期終末～弥生時代前期頃の遺構としては、擦り切り孔を有する石包丁や打製土掘具、刻目突帯文土器などが出土した円形住居跡と、当該期に比定される水田層が挙げられる。弥生時代後期・終末期～古墳時代初頭頃の遺構には、免田式土器などを伴い水田の用排水路の機能が想定される溝状遺構と、この溝に直交する形で検出された木組状遺構がある。とくに木組状遺構にはほぼ完形に復元できる短頸壺が伴っていることから、井堰や木橋などその機能が注目される。調査区第１面北側一帯では、古代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡(庇付建物を含む)が混在して出土している。これらの年代については、共伴する土師器や須恵器から８世紀後半～９世紀前半頃を中心に、８世紀～10世紀の年代幅を想定している。また、第１面北半部を中心に広く分布している柱穴群についても、こうした遺構とほぼ同時期であると考えている。中世の遺構は、調査区第１面北東部で検出した砂礫層に覆われた水田跡(古代末から中世初頭頃)や、文明軽石降下前後の畑跡とみられる畝状遺構、文明軽石層に覆われた水田跡(中世後半)など、生産遺跡としての性格が強い。とくに第３面北東部で検出した文明軽石層直下の水田跡では大小の区画畦畔が確認されており、地形の傾斜にあわせた当該期水田の広がりを把握することができる。近世後半になると、遺跡の中で最も高い第１面を中心に水田を廃して再び集落が形成される。区画規制を意図したような溝状遺構に囲まれた区域内には、棟軸方向が類似した掘立柱建物や井戸などが点在しており、18世紀～19世紀の陶磁器類や木製品、墨書の認められる軽石製五輪塔などが出土している。

本書では、とくに縄文時代から古代にかけての時期の遺構・遺物についてのみ報告し、中世～近世の資料については別編として刊行することとした。以下、時代ごとに順を追いながら詳細について説明する。

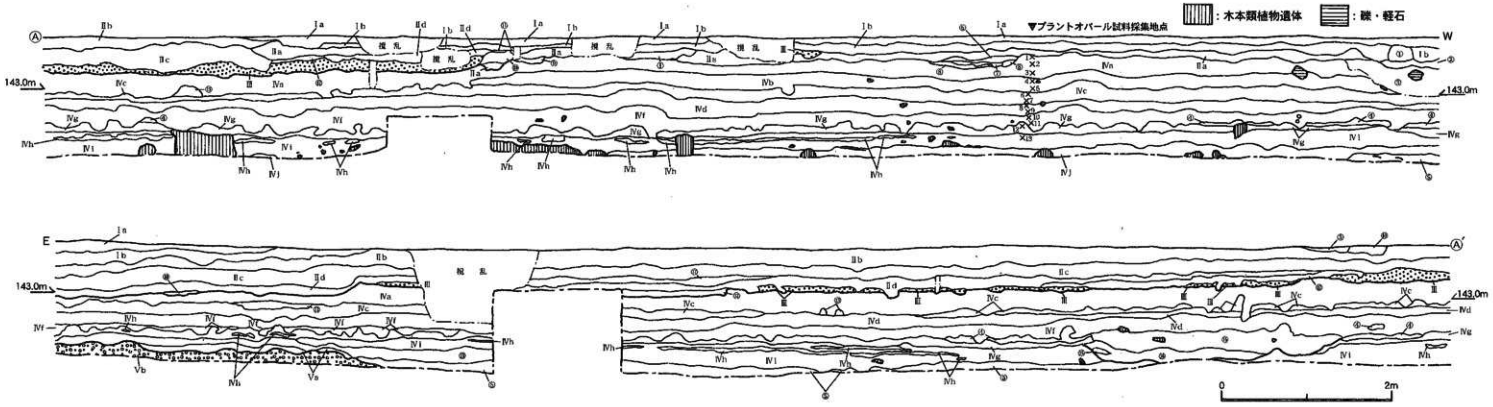
＜１＞縄文時代～古墳時代の遺構・遺物

前述したように、当遺跡では縄文時代晩期終末～弥生時代前期頃と弥生時代後期・終末期～古墳時代初頭頃の遺構を確認しているが、遺物は縄文時代後期から古墳時代後期まで普遍的にみとめられる。そこで、ここでは遺構が検出された時期ごとに詳細を述べた上で、遺構に伴わない遺物について３)包含層内出土遺物で一括記述することとした。

１)縄文時代晩期終末～弥生時代前期　第10～17・24図

第Ｖｂ層(霧島御池軽石層)上面で確認すると、弥生時代前期頃までの当遺跡の旧地形は、月野原台地の端部から緩やかに傾斜しながら南東方向へ張り出してくる低位河岸段丘面(調査区第１面北半部～西半部)と、その外縁に旧河川から供給された火山灰等が堆積し、周囲の旧氾濫原面よりもやや小高くなった自然堤防面(調査区第１面南半部～東半部)とに分けられる。さらに段丘面と自然堤防面の間は台地際の湧水や河川の移動などによって開析され谷状に窪んでおり、一見すると馬の背状の地形を呈している。この開析谷部分では植物遺体(木質)が多量に出土したことに加え、花粉分析の結果などから、当時はカシ類などの繁茂した湿地林が広がる環境であったことが明らかになっている。

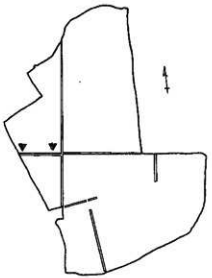
縄文時代晩期終末～弥生時代前期頃の遺構については、この開析谷東側に形成された弓状の自然堤防面南半部一帯で円形住居跡(Ｊ－ＳＡ01～06)及び柱穴群を検出しているほか、自然堤防面から旧氾濫原方向に設定した土層観察用トレンチ(以下、第７トレンチと呼称)の土層断面で当該期の水田該当層を確認している。遺物については調査区全域で散見されるが、遺構が検出されたＩ－12区～Ｆ－15区周辺に集中する傾向が認められる。各遺構・遺物の概要は、次のとおりである。



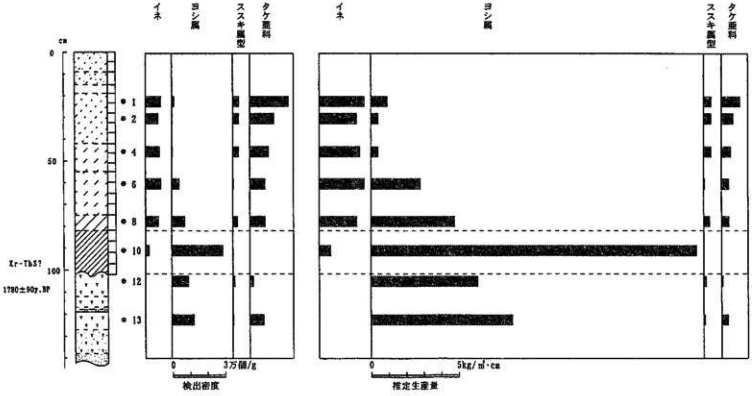
Ⅰa　白色軽石粒・黄橙色小礫を含む灰褐色砂質土層
　b　赤化したⅠa
Ⅱa　白色軽石粒・小礫をまばらに含む褐灰色砂質土層
　b　白色軽石粒をまんべんなく含む灰黒色砂質土層
　c　白色粗粒火山灰ブロックを含むⅡb
　d　白色軽石粒を多量に含む褐灰色砂質シルト層
Ⅲ　白色軽石粒層(文明降下軽石層：Sz-3)

Ⅳa　白色軽石粒をまばらに、黄白色軽石粒をわずかに含む褐灰色シルト層
　b　白色軽石粒をわずかに含む褐灰色弱粘質シルト層(Kr-Ths含む)
　c　黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層(Kr~Ths含む)
　d　黄白色軽石粒をわずかに含むオリーブ黒色弱粘質シルト層
　f　オリーブ黒色弱粘質シルト層
　g　木本類の植物遺体を多量に含む暗褐色泥炭層
　h　白色凝灰質シルト層
　i　木本類の植物遺体と褐色泥炭の混土層
　j　白色軽石粒を多量に含むⅣi
　k　灰褐色砂質シルト層
Ⅴa　黒色砂質土を含む黄白色軽石粒層(御池降下軽石層の漸移層)
　b　黄白色軽石粒層(御池降下軽石層：Kr-M)
　①　白色軽石粒・黄白色軽石粒をまばらに含む灰褐色シルト層
　②　白色軽石粒を多量に、黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色砂質シルト層

③　白色軽石粒・黄白色軽石粒を含む灰オリーブ色砂質シルト層
④　白色軽石粒と木本類の植物遺体を多量に含む茶褐色弱粘質シルト層
⑤　黄白色軽石粒・木本類の植物遺体をまばらに含む黒色砂質シルト層
⑥　白色軽石粒・黄白色軽石粒をまんべんなく含む灰褐色砂質シルト層
⑦　白色無斑火山灰(二次堆積のAT)と黄白色粘質土の混土層
⑧　砂粒を多量に含む⑥
⑨　白色軽石粒を多量に含む灰色シルト層
⑩　赤化したⅡd層
⑪　白色軽石粒(文明降下軽石の二次堆積)層
⑫　白色粗粒火山灰ブロックを含む⑪
⑬　Ⅳa層とⅣc層の混土層
⑭　白色軽石粒をわずかに含む灰黒色シルト層
⑮　Ⅳi層・木本類の植物遺体を多量に含む黄白色軽石粒層
⑯　黄白色軽石粒を多量に含むⅣi層
⑰　灰白色粘質土ブロックを含むⅡb層
⑱　Ⅱd層とⅣa層の混土層
⑲　黄白色軽石粒の細粒を多く含むⅤa層

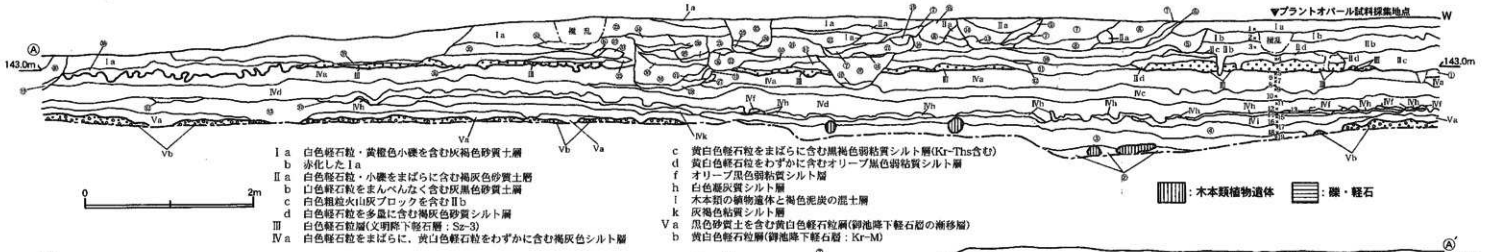


<土層断面図位置>



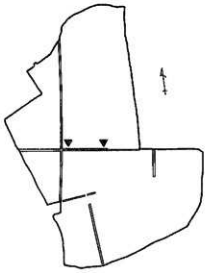
<プラントオパール分析結果>

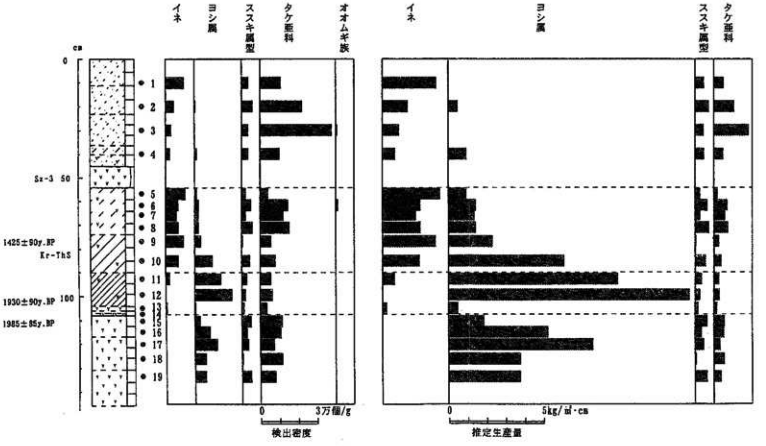
第６図　肱穴遺跡第６トレンチ南壁土層断面図(西半部)



Ⅰa　白色軽石粒・黄橙色小礫を含む灰褐色砂質土層
b　赤化したⅠa
Ⅱa　白色軽石粒・小礫をまばらに含む褐灰色砂質土層
b　白色軽石粒をまんべんなく含む灰黒色砂質土層
c　白色粗粒火山灰ブロックを含むⅡb
d　白色軽石粒を多量に含む褐灰色砂質シルト層
Ⅲ　白色軽石粒層(姶良丹沢下軽石層：Sz-3)
Ⅳa　白色軽石粒をまばらに、黄白色軽石粒をわずかに含む褐灰色シルト層
c　黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層(Kr-Ths含む)
d　黄白色軽石粒をわずかに含むオリーブ黒色弱粘質シルト層
f　オリーブ黒色弱粘質シルト層
h　白色凝灰質シルト層
i　木本類の植物遺体と褐色泥炭の混土層
k　灰褐色粘質シルト層
Va　黒色砂質土を含む黄白色軽石粒層(鍋池降下軽石層の漸移層)
b　黄白色軽石粒層(鍋池降下軽石層：Kr-M)

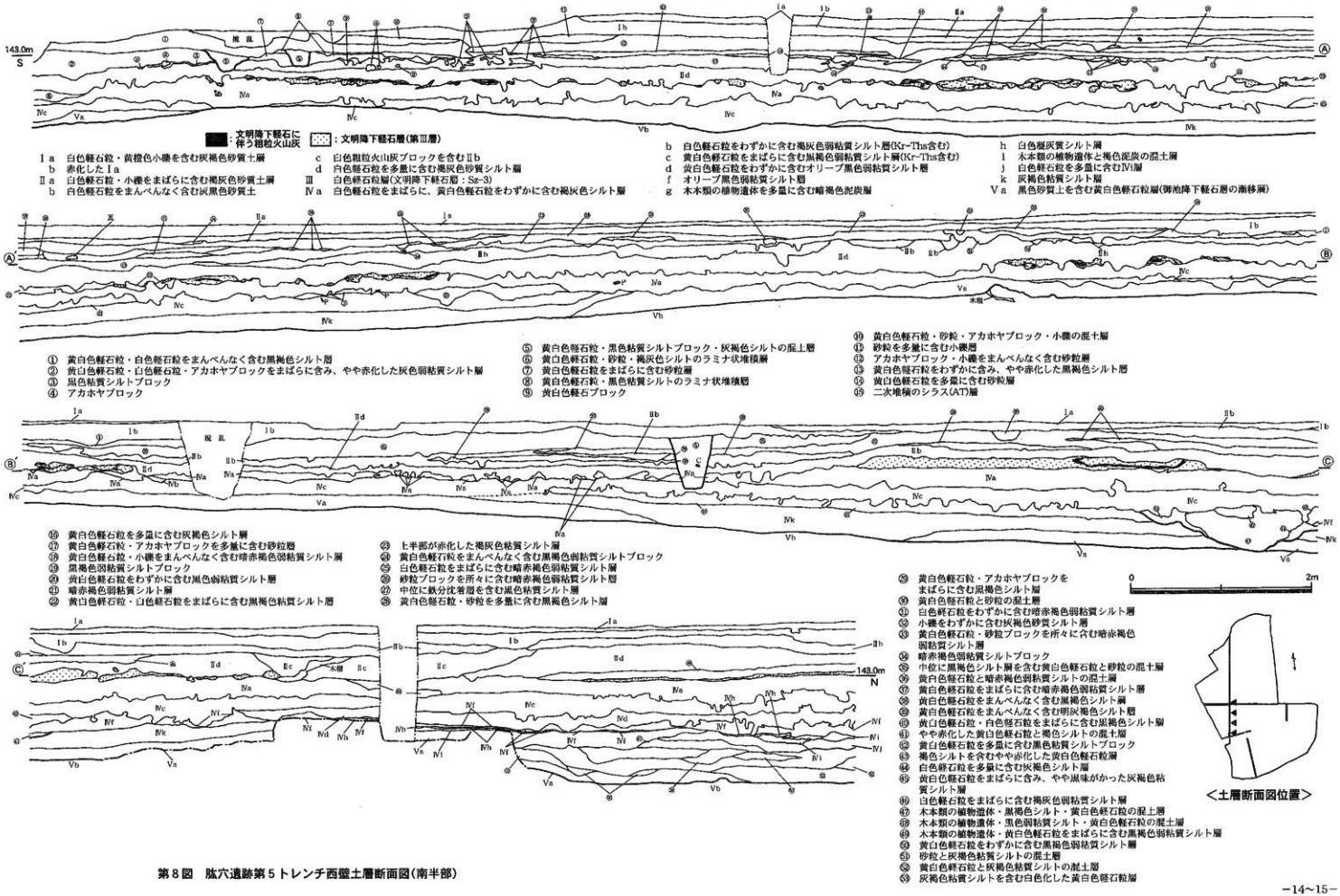
① 白色軽石粒を多量に含む灰褐色シルト層
② 砂粒を多量に、木本類の植物遺体をまばらに含む茶褐色弱粘質シルト層
③ 木本類の植物遺体をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層
④ 木本類の植物遺体をまばらに含む茶褐色弱粘質シルト層
⑤ 白色軽石粒・黄白色軽石粒をわずかに含む黒褐色シルト層
⑥ 黒褐色シルト層
⑦ 赤化した灰褐色シルト層
⑧ 白色軽石粒をわずかに含む灰褐色シルト層
⑨ 黄橙色小礫をまばらに含む暗灰褐色シルト層
⑩ 白色軽石粒・黄白色軽石粒をわずかに含む黒褐色弱粘質シルト層
⑪ 白色軽石粒を多量に含む黒褐色シルト層
⑫ 黒褐色弱粘質シルト層
⑬ 黄橙色小礫をまばらに含む明灰褐色シルト層
⑭ 黄橙色小礫をわずかに含む灰褐色砂質シルト層
⑮ 黄橙色小礫をわずかに含む灰オリーブ色砂質シルト層
⑯ 灰オリーブ色砂質シルト層
⑰ 白色軽石粒をわずかに含み、赤化した灰褐色シルト層
⑱ 灰褐色シルト層
⑲ 暗灰褐色弱粘質シルト層
⑳ 灰褐色シルト層黒褐色シルト層
㉑ 白色軽石粒をまんべんなく含む暗灰褐色シルト層
㉒ 白色軽石粒・炭化粒を含む暗灰褐色シルト層
㉓ 灰褐色砂質シルト層
㉔ 白色軽石粒を含む灰褐色シルト層
㉕ 黒褐色砂質シルト層
㉖ 白色軽石粒をわずかに含む黒褐色弱粘質シルト層
㉗ 白色軽石粒と灰褐色シルトの混土層
㉘ 灰褐色弱粘質シルト層
㉙ 白色軽石粒・黄橙色小礫をごくわずかに含む灰褐色砂質土層
㉚ 白色軽石粒をまばらに含む赤化した灰褐色砂質シルト層
㉛ 白色軽石粒をまばらに含む黒褐色砂質シルト層
㉜ 下部に黄橙色小礫を含む灰褐色シルト層
㉝ 白色軽石粒をわずかに含む暗灰褐色シルト層
㉞ 白色軽石粒をまんべんなく含む暗灰褐色砂質シルト層
㉟ 砂礫層
㊱ 砂礫を含む暗灰褐色シルト層
㊲ Ⅳh層を含む灰褐色粘質土層
㊳ 白色軽石粒をまんべんなく含む黒褐色シルト層
㊴ 黄橙色小礫・白色軽石粒・黄橙色小礫をまんべんなく含む暗灰褐色シルト層
㊵ 黄橙色小礫・白色軽石粒・黄橙色小礫をまんべんなく含む灰褐色シルト層
㊶ 白色軽石粒・黄白色軽石粒をわずかに含む暗灰褐色シルト層
㊷ アカホヤブロック・炭化粒を含むⅣd層
㊸ 黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層
㊹ 黄橙色小礫をわずかに含む黒褐色シルト層
㊺ 黄白色軽石粒を多量に含む黒色弱粘質シルト層
㊻ 黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色シルト層
㊼ 黄白色軽石ブロック・黒色弱粘質シルト・灰褐色シルトの混土層
㊽ 砂粒ブロックを含む灰褐色シルト層
㊾ 白色軽石粒・黄白色軽石粒をわずかに含む灰黒色シルト層
㊿ 黄白色軽石粒をわずかに含む灰黒色シルト層
(51) 黄白色軽石粒をまばらに含む灰褐色砂質シルト層
(52) 白色軽石粒・黄白色軽石粒を多量に含む明灰褐色シルト層
(53) 黄白色軽石ブロック・白色軽石ブロック・灰黒色シルトの混土層
(54) 砂粒と黄白色軽石粒の混土層
(55) 砂粒と白色軽石粒の混土層
(56) 砂粒・白色軽石粒・灰黒色シルトの混土層
(57) 砂粒ブロックを含むⅣf層
(58) 砂粒・黄白色軽石粒・灰オリーブシルトの混土層
(59) 砂粒層と黄白色軽石粒層のラミナ状堆積
(60) 木本類の植物遺体・黄白色軽石粒をまばらに含む暗灰褐色弱粘質シルト層
(61) ㊴と㊾の混土層
(62) 砂粒を含む黄白色軽石粒層
(63) ㊾と砂粒混灰褐色シルトの混土層





＜プラントオパール分析結果＞

第７図　肱穴遺跡第６トレンチ南壁土層断面図(東半部)



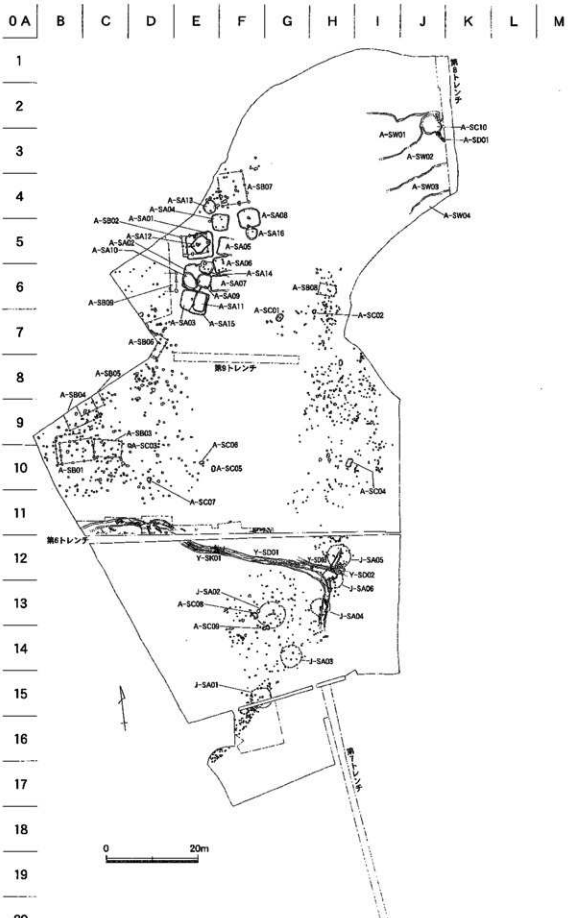
■：文明降下軽石に伴う粗粒火山灰　▨：文明降下軽石層(第Ⅲ層)

Ⅰa 白色軽石粒・黄橙色小礫を含む灰褐色砂質土層
b 赤化したⅠa
Ⅱa 白色軽石粒・小礫をまばらに含む褐灰色砂質土層
b 白色軽石粒をまんべんなく含む灰黒色砂質土
c 白色粗粒火山灰ブロックを含むⅡb
d 白色軽石粒を多量に含む褐灰色砂質シルト層
Ⅲ 白色軽石粒層(文明降下軽石層：Sz-3)
Ⅳa 白色軽石粒をまばらに、黄白色軽石粒をわずかに含む褐灰色シルト層
b 白色軽石粒をわずかに含む褐灰色弱粘質シルト層(Kr-Ths含む)
c 黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層(Kr-Ths含む)
d 黄白色軽石粒をわずかに含むオリーブ黒色弱粘質シルト層
f オリーブ黒色弱粘質シルト層
g 木本類の植物遺体を多量に含む暗褐色泥炭層
h 白色凝灰質シルト層
l 木本類の植物遺体と褐色泥炭の混土層
j 白色軽石粒を多量に含むⅣj層
k 灰褐色粘質シルト層
Ⅴa 黒色砂質土を含む黄白色軽石粒層(御池降下軽石層の漸移層)

① 黄白色軽石粒・白色軽石粒をまんべんなく含む黒褐色シルト層
② 黄白色軽石粒・白色軽石粒・アカホヤブロックをまばらに含み、やや赤化した灰色弱粘質シルト層
③ 黒色粘質シルトブロック
④ アカホヤブロック
⑤ 黄白色軽石粒・黒色粘質シルトブロック・灰褐色シルトの混土層
⑥ 黄白色軽石粒・砂粒・褐灰色シルトのラミナ状堆積層
⑦ 黄白色軽石粒をまばらに含む砂粒層
⑧ 黄白色軽石粒・黒色粘質シルトのラミナ状堆積層
⑨ 黄白色軽石ブロック
⑩ 黄白色軽石粒・砂粒・アカホヤブロック・小礫の混土層
⑪ 砂粒を多量に含む小礫層
⑫ アカホヤブロック・小礫をまんべんなく含む砂粒層
⑬ 黄白色軽石粒をわずかに含み、やや赤化した黒褐色シルト層
⑭ 黄白色軽石粒を多量に含む砂粒層
⑮ 二次堆積のシラス(AT)層

⑯ 黄白色軽石粒を多量に含む灰褐色シルト層
⑰ 黄白色軽石粒・アカホヤブロックを多量に含む砂粒層
⑱ 黄白色軽石粒・小礫をまんべんなく含む暗赤褐色弱粘質シルト層
⑲ 黒褐色弱粘質シルトブロック
⑳ 黄白色軽石粒をわずかに含む黒色弱粘質シルト層
㉑ 暗赤褐色弱粘質シルト層
㉒ 黄白色軽石粒・白色軽石粒をまばらに含む黒褐色粘質シルト層
㉓ 上半部が赤化した褐灰色粘質シルト層
㉔ 黄白色軽石粒をまんべんなく含む黒褐色弱粘質シルトブロック
㉕ 白色軽石粒をまばらに含む暗赤褐色弱粘質シルト層
㉖ 砂粒ブロックを所々に含む暗赤褐色弱粘質シルト層
㉗ 中位に鉄分沈着層を含む黒色粘質シルト層
㉘ 黄白色軽石粒・砂粒を多量に含む黒褐色シルト層
㉙ 黄白色軽石粒・アカホヤブロックをまばらに含む黒褐色シルト層
㉚ 黄白色軽石粒と砂粒の混土層
㉛ 白色軽石粒をわずかに含む暗赤褐色弱粘質シルト層
㉜ 小礫をわずかに含む灰褐色砂質シルト層
㉝ 黄白色軽石粒・砂粒ブロックを所々に含む暗赤褐色弱粘質シルト層
㉞ 暗赤褐色弱粘質シルトブロック
㉟ 中位に黒褐色シルト層を含む黄白色軽石粒と砂粒の混土層
㊱ 黄白色軽石粒と暗赤褐色弱粘質シルトの混土層
㊲ 黄白色軽石粒をまばらに含む暗赤褐色弱粘質シルト層
㊳ 黄白色軽石粒をまんべんなく含む黒褐色シルト層
㊴ 黄白色軽石粒をまんべんなく含む明灰褐色シルト層
㊵ 黄白色軽石粒・白色軽石粒をまばらに含む黒褐色シルト層
㊶ やや赤化した黄白色軽石粒と褐色シルトの混土層
㊷ 黄白色軽石粒を多量に含む黒色粘質シルトブロック
㊸ 褐色シルトを含むやや赤化した黄白色軽石粒層
㊹ 白色軽石粒を多量に含む灰褐色シルト層
㊺ 黄白色軽石粒をまばらに含み、やや黒味がかった灰褐色粘質シルト層
㊻ 白色軽石粒をまばらに含む褐灰色弱粘質シルト層
㊼ 木本類の植物遺体・黒褐色シルト・黄白色軽石粒の混土層
㊽ 木本類の植物遺体・黒色弱粘質シルト・黄白色軽石粒の混土層
㊾ 木本類の植物遺体・黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層
㊿ 黄白色軽石粒をわずかに含む黒褐色弱粘質シルト層
(51) 砂粒と灰褐色粘質シルトの混土層
(52) 黄白色軽石粒と灰褐色粘質シルトの混土層
(53) 灰褐色粘質シルトを含む白色化した黄白色軽石粒層

第8図　脇穴遺跡第5トレンチ西壁土層断面図(南半部)



第９図　脇穴遺跡(縄文～古代)遺構分布図

［円形住居跡］ 第10～16図

今回の調査では縄文時代晩期終末～弥生時代前期に比定される遺構として、直径４～５ｍの円形プランで中央に２個の主柱穴を配し、周壁ライン上に８～10個の柱穴が並ぶ住居跡を検出している。これらは本来の遺構掘り込み面が後世の土木工事や耕作による削平・攪乱を受けているため、検出した柱穴の深度も浅く、竪穴、平地の別も不明である。ただし、一部で住居内部がわずかに円形状に窪んだ遺構も認められることから、竪穴住居であった可能性も示唆できる。

このタイプの住居に伴う柱穴の埋土は、縄文時代晩期終末～弥生時代前期頃の土器を包含する第Ⅳｋ層のみであり、今回は同層が最も良好に残存していた自然堤防面南半部一帯で６軒の住居跡を確認している。これらは一部で時期差が想定されるものの、ほとんどが同時期であると考えられ、地形に沿って６～８ｍ間隔で住居が点在していた様子がうかがえる。また、住居跡に伴う柱穴の埋土中及び住居群東側の傾斜面一帯からは、局所的に当該期の土器片（大半が図化不能）、擦り切り孔を有する石包丁、打製土掘具等がまとまって出土していることから、これらの住居群が南側の旧氾濫原一帯で初期水稲農耕を営んでいた人々の集落跡であった可能性が高いと考えている。

Ｊ－ＳＡ０１（１号住居跡） 第10図

当該期住居群の中で最も南側、自然堤防面が旧氾濫原面に向けて傾斜しはじめる位置で検出した住居跡で、直径約4.25ｍを計る。主柱穴の中心間は約0.5ｍ、主柱穴と周壁上の柱穴との間隔は約1.75～2.0ｍである。周壁上には10個以上の柱穴が配されていたと考えられるが、南東部は傾斜面にあたるため、確認できなかった。柱穴の深度は、主柱穴・周壁上のいずれも約0.1ｍで、かなり浅い。

Ｊ－ＳＡ０２（２号住居跡） 第11図

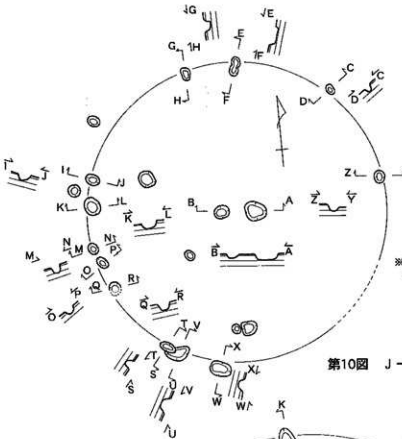
今回検出した中で唯一自然堤防面の中央付近に位置する住居で、プランも最大の住居跡である。直径は約5.75～6.0ｍ、主柱穴の中心間は約1.0ｍ、主柱穴と周壁上の柱穴との間隔は約2.0ｍを計る。周壁上には、８～10個の柱穴を配していたと想定しているが、古代の土坑による攪乱などにより、ほぼ2.0ｍ間隔で点在している５個の柱穴の検出にとどまっている。柱穴の深度は、約0.1～0.25ｍでかなりばらつきがみとめられる。なお、住居範囲内の上部層（第Ⅳｃ層）から弥生時代中期頃の土器片が出土しているが、後世の混入と考えられる。

Ｊ－ＳＡ０３（３号住居跡） 第12図

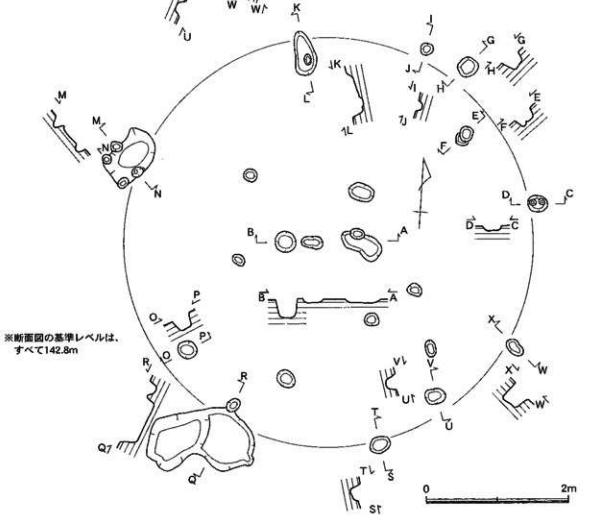
旧氾濫原面への傾斜部付近で検出した住居跡で、直径約5.0ｍを計る。主柱穴の中心間は約1.5ｍとかなり広く、主柱穴と周壁上の柱穴との間隔は約1.5～2.3ｍである。周壁上には約1.75～2.0ｍおきに８個の柱穴が点在しており、柱穴の深さは約0.2ｍ前後でまとまっている。

Ｊ－ＳＡ０４（４号住居跡） 第13・14図

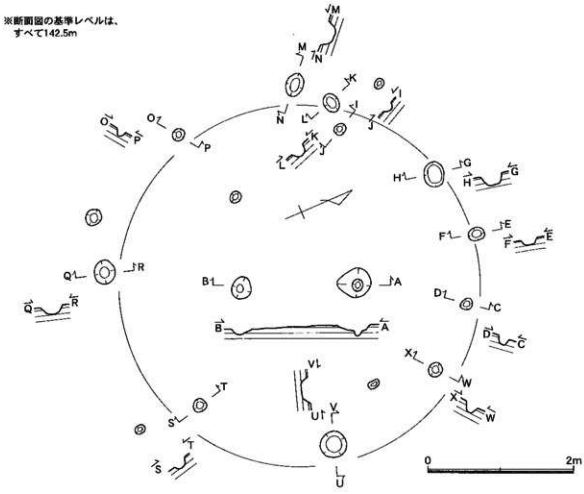
今回の調査で、当該期住居群確認のきっかけとなった遺構で、他の住居と同様に旧氾濫原面への傾斜部に近い自然堤防面東端で検出した。直径は約4.25ｍを計り、主柱穴の中心間は約0.75ｍ、主柱穴と周壁上の柱穴との間隔は約1.5～2.0ｍである。主柱穴を含む東半部が弥生時代後期～古墳時代初頭頃に掘削された溝状遺構による攪乱を受けているため、主柱穴の深度は約0.12ｍと浅いが、周壁上の柱穴の深さは約0.25～0.38ｍでかなり安定している。また、この遺構では、（図化には不可能であったものの、）部分的に住居内部がごく浅く（落葉２～３㎝程度）円形状に窪んでいたことが確認されており、今回検出した住居跡が竪穴住居であった可能性を示唆する事象として注目される。



第10図　J－SA01(1号住居跡)実測図



第11図　J－SA02(2号住居跡)実測図



第12図　Ｊ－ＳＡ03（３号住居跡）実測図

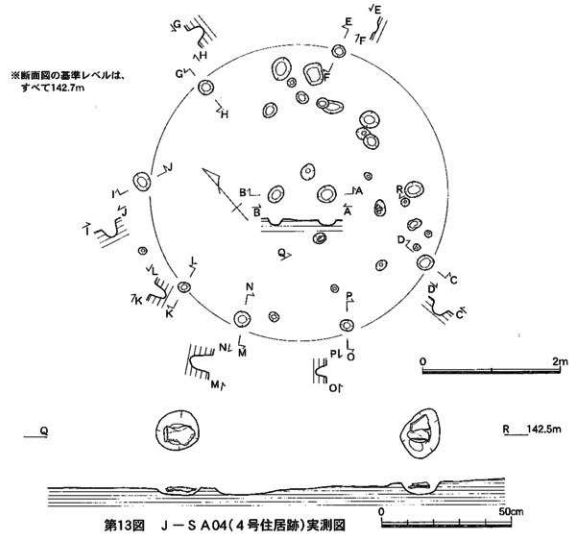
遺物については、主柱穴の際で検出した２つの柱穴内において、ほぼ完形の打製土製具（１）、土器（３）と折り重なって出土した完形の擦り切り石包丁（２）が確認されている。この３点はいずれも柱穴の基底部から浮いた状態で出土していることから、遺構が埋没する過程で混入した可能性も否定できないが、撹乱による削平で本来の遺構深度が損なわれていること、当該期の石器組成の中でも代表的な２種の石器が、ほぼ完形の状態で隣接する柱穴の中から出土していることなどを勘案すると、デポ（埋納）の可能性も含め、その出土状況には意図的なものが感じられる。なお、他の柱穴からは当該期土器の小片２点（４、５）もセットで出土している。

Ｊ－ＳＡ０５（５号住居跡）　第15図

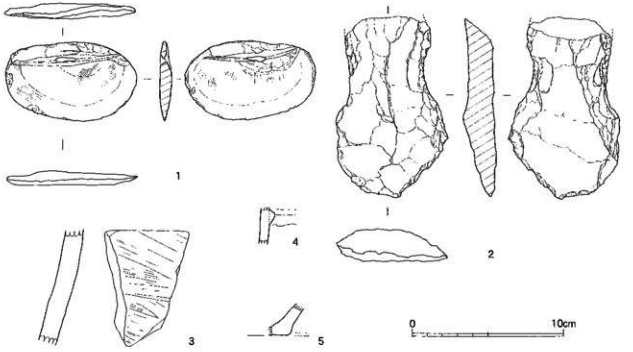
今回検出した住居群の中で最も北側に位置し、６号住居跡と隣接している。旧泥濫原面への傾斜部付近で検出したため、東側の柱穴は確認できなかった。直径は約5.0m、主柱穴の中心間は約0.9mを計る。主柱穴と周壁上の柱穴との間隔は約1.75～2.3mである。周壁上では約2.0mおきに６個の柱穴を確認しており、柱穴の深さは約0.1～0.3mである。遺物は、住居の範囲内から晩期の土器(57)が出土している。

Ｊ－ＳＡ０６（６号住居跡）　第16図

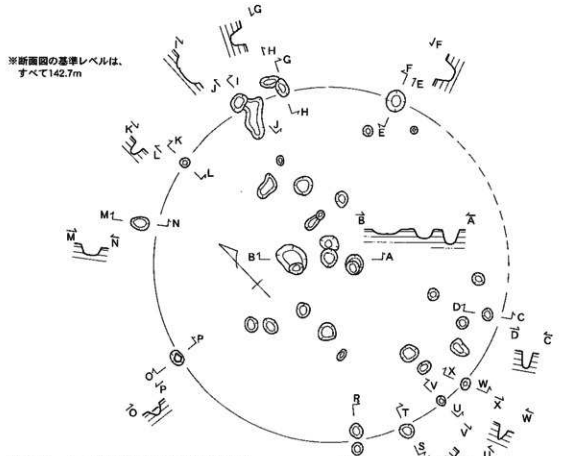
６号住居跡と隣接し、Ｙ－ＳＤ01・02（１・２号溝）に切られた直径約4.5mの住居跡である。主柱穴部分は、溝による撹乱のため不明瞭であるが、主柱穴と周壁上の柱穴との間隔は約1.75～2.0mである。周壁上では約1.0～1.3mおきに10個の柱穴を確認しており、柱穴の深さは約0.05～0.2mである。



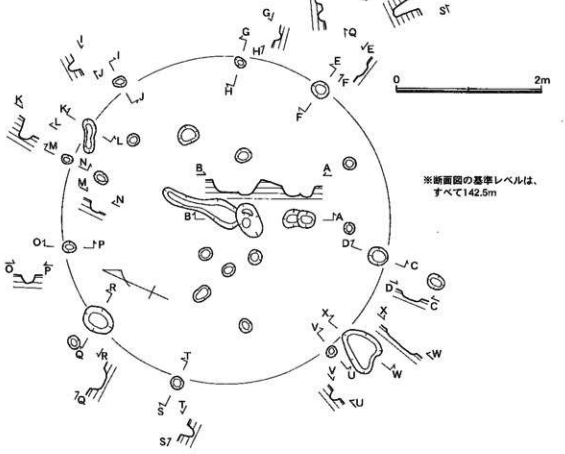
第13図　J－SA04(4号住居跡)実測図



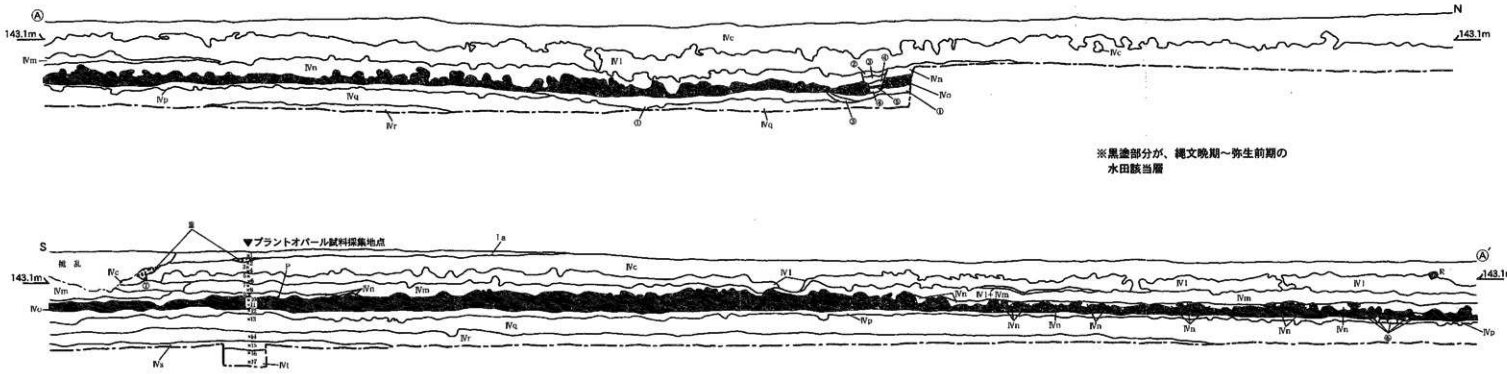
第14図　J－SA04(4号住居跡)内出土遺物実測図



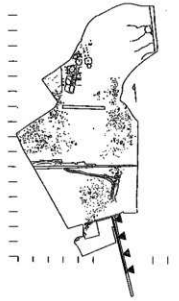
第15図　J－S A05(5号住居跡)実測図



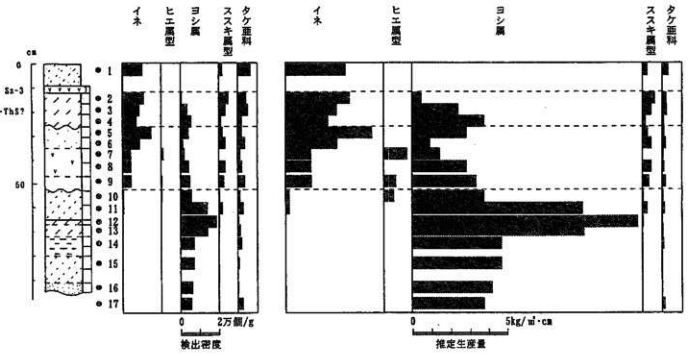
第16図　J－S A06(6号住居跡)実測図



※黒塗部分が、縄文晩期～弥生前期の
水田跡当層



<土層断面図位置>



<プラントオパール分析結果>

Ⅰa　白色軽石粒・黄橙色小礫を含む灰褐色砂質土層
Ⅲ　白色軽石粒層(文明降下軽石層：Sz-3)
Ⅳc　黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色斑粘質シルト層(Kr-Ths含む)
Ⅰ　黄白色軽石粒をまばらに含む暗褐灰色弱粘質シルト層
m　黄白色軽石粒・有機質をまんべんなく含む黒褐色弱粘質シルト層
n　黄白色軽石粒をまばらに含む暗灰褐色シルト層
o　やや灰色がかった褐色粘質土層
p　黒灰色粘質土層
q　オリーブ黒色粘質土ブロックを含む白色凝灰質シルト層
r　炭化粒・オリーブ黒色粘質土を含む灰白色粘質土層
s　灰白色粘質土層
t　灰白色砂質土層
①　オリーブ黒色粘質土層
②　黄白色軽石粒をまばらに含む黒色弱粘質シルト層
③　灰白色火山灰層(二次シラス)
④　やや灰色がかった黒褐色粘質土層
⑤　黒色粘質土ブロックを含む灰白色粘質土層
⑥　砂粒を含む黒褐色弱粘質シルトブロック
⑦　ⅣcとⅣlの混土層

第17図　肱穴遺跡第７トレンチ西壁土層断面図

［水田層］　第17・24図

自然堤防面南半部一帯で縄文時代晩期終末～弥生時代前期の遺物や住居跡が検出されたため、当該期の水田の遺存が予想される旧氾濫原面方向に第７トレンチを設定し、断面調査及び自然科学分析を実施した。その結果、プラントオパール分析により、第Ⅳｑ層以下では大勢を占めていたヨシ属が第Ⅳｏ層を境に減少に転じるのと同時に、第Ⅳｏ層には約700個／ｇとやや少量ながらもイネのプラントオパールが残存していることが明らかになった。また、第Ⅳｑ層以下の層はほぼ水平堆積しているのに対し、第Ⅳｐ層より上部の層には耕作に伴うとみられる激しい土層の凹凸がみとめられた。さらに、断面の第Ⅳｎ層と第Ⅳｏ層の境目から縄文時代晩期頃の土器片(54)が、また周辺の第Ⅳｍ・ｎ層中でも弥生時代前期頃の土器が出土したことから、これらの下位に形成された第Ⅳｏ層について、縄文時代晩期終末～弥生時代前期頃の水田該当層と推定するに至った。なお、今回は明瞭な畦畔、用排水路は検出できなかったが、トレンチ北端に砂層を含む落ち込みが確認されており、簡易な水路が存在していた可能性もある。

今回の調査においては、当初当該期の遺構が遺存している可能性を予想していなかったため、断面調査に終始し、水田の面的把握には至らなかった。しかし、周辺地域を含め、こうした旧氾濫原に面した低位面において同種の遺構が発見される可能性は高く、今後の調査の成果に期待したいと思う。

［柱穴群］　第20図

円形住居跡に伴う柱穴と同様に第Ⅳｋ層を埋土にもつが、住居跡として確認できなかった柱穴を約200個検出している。これらのうち、図化不能な胴部片などを含めて当該期遺物が出土した柱穴は十数個を数える。６は Ｊ－ＳＡ05の範囲内にある柱穴から出土した甕の胴部片で、全面磨滅している。７は自然堤防面東側の傾斜部付近で検出した柱穴内からの出土遺物で、口縁部の刻目突帯は指頭刻みである。８は Ｊ－ＳＡ02と Ｊ－ＳＡ04の間で確認した柱穴から出土した土器で、鉢形を呈すと考えられる。

2)弥生時代後期・終末期～古墳時代初頭

当該期の遺構を検出した第Ⅳｃ・ｆ層下部ないし第Ⅳｋ層上面で観察すると、当時の地形は、縄文時代晩期～弥生時代前期頃の住居跡が所在していた自然堤防面と後背の段丘面との間に形成されていた開析谷がすでに埋没し、遺跡の東・南側の旧氾濫原方向に向けて緩やかに傾斜した平坦面であったことが推察される。また、植生も花粉分析の結果により、湿地林を形成していたカシ類を主とする照葉樹林から人為的干渉を受けた二次林の性格を有するシイ類へ変移し、さらにはイネ科やカヤツリグサ科などが繁茂する草原へと変遷していることから、この時期すでに一帯で水田経営が行われていた可能性が推測される。

この時期の遺構としては、前期集落の立地していた旧自然堤防面を横切って東西方向に延びる溝状遺構(Ｙ－ＳＤ01)、この溝と旧自然堤防面東端付近で切りあう２条の溝(Ｙ－ＳＤ02・03)、さらに旧開析谷への落ち際付近でＹ－ＳＤ01とほぼ直交する形で検出された木組状遺構(Ｙ－ＳＫ01)がある。遺物についてはこれらの遺構埋土内を中心に、調査区のほぼ全域で検出されている。以下、各遺構・遺物の詳細について説明を行う。

［溝状遺構］

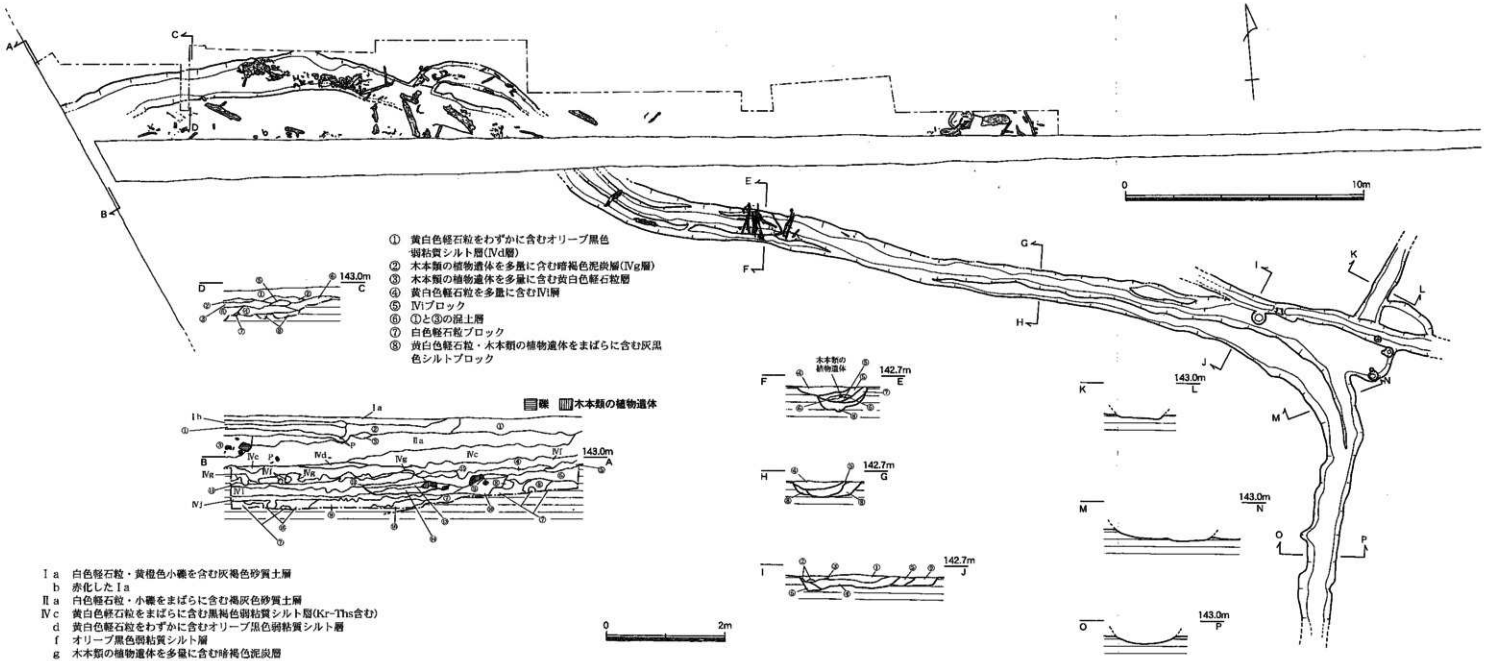
今回の調査で検出した溝状遺構は３条で、Ｈ－12～14区付近は第Ⅴｂ層上面、その他は第Ⅳｃ・ｆ層下部ないしⅣｋ層上面が検出面である。第Ⅴｂ層上面で検出した部分は、本来の形状が後世の攪乱を受けているため基底部付近しか確認できず、いずれの溝も端部付近についてはすでに消失していた。

Y－SD01（1号溝） 第18・21～23図

旧自然堤防面の地形に沿うように調査区南側から北進し、II－13区付近で屈曲して西進する溝状遺構である。検出した総延長は約65m、幅約2.0～1.2m、深さは最も遺存状態の良いところで約0.5mを計る。E－12区付近から西はやや蛇行しているが、東側は屈曲部も含めほぼ直走していることから、方形に巡っている可能性もある。この溝では少なくとも3度掘り直した痕跡が認められ、断面形はいずれも緩いU字形を呈している。D－11区付近で2条に分岐しており、やや弧を描いた北側の溝が最初に掘られたもので、その埋没後に掘り直されたのが南側の溝である。第1段階の溝の軌跡を追うと、屈曲して再び南進するような気配もみえるが、第6トレンチの断面でその掘形を確認することはできなかった。なお、土層断面を観察していくと赤化した御池降下軽石が多量に堆積した箇所が部分的に認められることから、洪水などによって一時的に多量の土砂が流入して埋没した溝を掘り直し、再利用していた可能性が指摘できる。この溝の機能については、流水作用によると考えられる砂層の堆積や、消失した南端から屈曲部へ、そして屈曲部から調査区外へと延びる西端方向へ緩やかに傾斜している構造などに基づき、水路的な役割を想定している。さらに、第5トレンチの断面などでこの溝に接するように遺存している耕作土状の土層が確認できることを考慮すると、当該期水田に伴う用排水溝である可能性を示唆することができよう。

この溝では、主に中・下層（第1・2段階の溝埋土）から土器・石器が出土しており、その時期幅は弥生時代前期から古墳時代初頭まで及ぶ。前期から中期にかけての土器としては、口縁部と胴部上位に工具刻みの刻目突帯を有する甕（9・10）や頸部と肩部の間に2条の突帯や沈線が巡る壺（19・21）、内外器面とも丁寧なミガキが認められる鉢（12）、口唇部がやや角ばった壺（22）などが下層を中心に出土しているが、これらに共伴して連弧文の施された免田式の壺（23）や坏部が大きく外反した高坏（17・18）など、後期ないし後期後半頃以降の土器も出土していることから、後期以前の遺物についてはY－SD01が掘り込まれた第Ⅳk層（縄文時代晩期～弥生時代前期の包含層）から供給され、第1段階の溝が埋没する際に混入したと考えている。中層（第2段階の溝埋土）以上で出土した遺物は、基本的に後期後半から古墳時代初頭頃の範囲に収まるもので、口縁部が外反し口唇部が凹むタイプの鉢（13・16）、丸底の短頸壺（26・27）などがある。とくに13については、同一個体と見られる底部（14）がY－SD02中から出土していることから、第2段階のY－SD01とY－SD02は並存関係に近い状態であったと考えられる。また、口縁部を除きほぼ完形近く復元できた26は、Y－SK01に伴うようにまとまった形で出土しており、意図的に廃棄されたものと推測している。なお、石器には大型の打製土堀具（29）や打製石鏃（31）などがあるが、これらも前期集落に伴う可能性が高い。

1号溝の埋土中からは、前期頃まで開析谷付近に繁茂していたと考えられるカシ類の木根など多量の植物遺体が出土しているが、その中には加工痕のみとめられる木製品も含まれている。34・35は先端部が鋭利な工具によって加工された木杭状のもので、ほぼ中央に抉りの痕跡が残る34などは、木杭に加工する過程で廃棄された可能性がある。また、36・37は柾目取りの未完割材とみられ、表面は丁寧に面取されている。これらはいずれも水田の基盤整備に使用されていた可能性があり、用排水溝的なY－SD01の機能も含め、当該地一帯で弥生後期から古墳時代初頭頃の段階において、ある程度広範囲にわたる水田経営が行われていたことを示唆する資料として注目される。また、今回は明らかに農具と判別できる木製品は確認されなかったが、こうした当該期の木杭・未完割材等の出土は当地域においても初例であり、今後こうした開析谷などの低湿地面においては、木製品が発見されることを前提した調査が必要になると思われる。

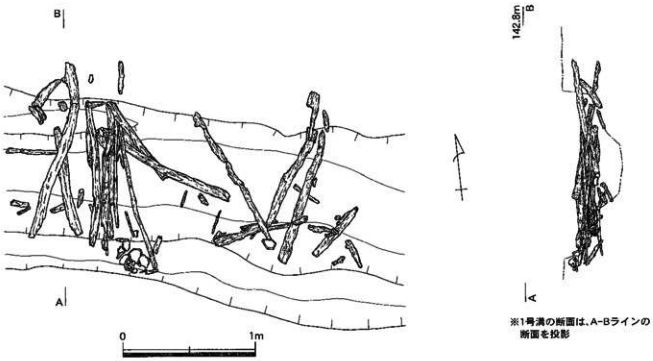


Ⅰa 白色軽石粒・黄橙色小礫を含む灰褐色砂質土層
b 赤化したⅠa
Ⅱa 白色軽石粒・小礫をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層(Kr-Ths含む)
Ⅳc 黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層(Kr-Ths含む)
d 黄白色軽石粒をわずかに含むオリーブ黒色弱粘質シルト層
f オリーブ黒色弱粘質シルト層
g 木本類の植物遺体を多量に含む暗褐色泥炭層
i 木本類の植物遺体と褐色泥炭の混土層
j 白色軽石粒を多量に含むⅣi

① 白色軽石粒・黄白色軽石粒・黄橙色小礫をまんべんなく含む暗灰褐色シルト層
② アカホヤブロックを含みやや赤化した①
③ 灰オリーブ色砂質土層
④ 黄白色軽石粒・木本類の植物遺体をまばらに含む褐色シルト層
⑤ 黄白色軽石粒をまばらに含みやや褐色がかった黒色シルト層
⑥ 黄色軽石粒をわずかに含む黒色シルト層
⑦ 黄色軽石粒をわずかに含む砂粒層
⑧ 黄白色軽石粒をまばらに含みやや灰色がかった黒色シルト層
⑨ 木本類の植物遺体をまばらに含む⑧
⑩ ⑧と⑦の混土層
⑪ 黄色軽石粒をわずかに含むⅣg層
⑫ 白色化した黄白色軽石粒層(御池降下軽石の二次堆積層)
⑬ 木本類の植物遺体をわずかに含む⑫
⑭ 砂粒を多量に含む⑬
⑮ Ⅳfと⑫の混土層
⑯ ⑨とⅣjの混土層

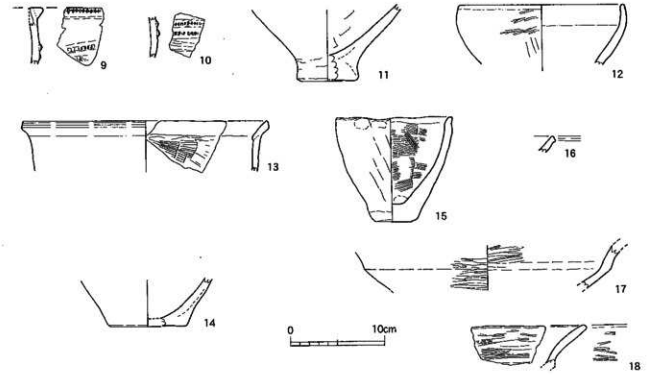
① 黄白色軽石粒をわずかに含むオリーブ黒色弱粘質シルト層(Ⅳd層)
② 灰褐色弱粘質シルトブロック
③ 木本類の植物遺体を多量に含む暗褐色泥炭土ブロック
④ 褐色シルトを含むやや赤化した黄白色軽石粒層
⑤ 褐色シルト・木本類の植物遺体を含む白色化した黄白色軽石粒層
⑥ Ⅳiブロック
⑦ 黄白色軽石粒を多量に含むⅣi層
⑧ 白色化した黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層
⑨ やや赤化した黄白色軽石粒と褐色シルトの混土層

第18図　Y－S D01～03(1～3号溝)・Y－S K01(1号木組状遺構)実測図



第19図　Y－SK01(1号木組状遺構)実測図

第20図　柱穴(縄文～弥生)内出土遺物実測図



第21図　Y－SD01～03(1～3号溝)内出土遺物実測図①

Y－SD02（2号溝） 第18・21・22図

Y－SD01に東側屈曲部付近で切られている溝で、検出できたのは延長約10m、幅約0.7～0.8m、検出面（第Vb層）からの深さは約0.3mである。東西方向に走行しているが、両端とも途中で消失している。遺物としては、13と同一個体の鉢(14)、Y－SD03等から出土した破片とあわせてほぼ完形復元できた口縁に指頭痕の残る小型の鉢(15)、打製石鏃の未製品(30)などがある。

Y－SD03（3号溝） 第18・21・22図

Y－SD01・02に切られた溝で、延長約3.5m、幅約0.9m、検出面（第Vb層）からの深さは約0.1mである。北東から南西方向に走行しているが、両端とも途中で消失しているため、詳細は不明である。埋土中から、15の破片が数点出土していることから、第2段階のY－SD01やY－SD02とはさほど時期差がないと考えている。

［木組状遺構］ 第19・23図

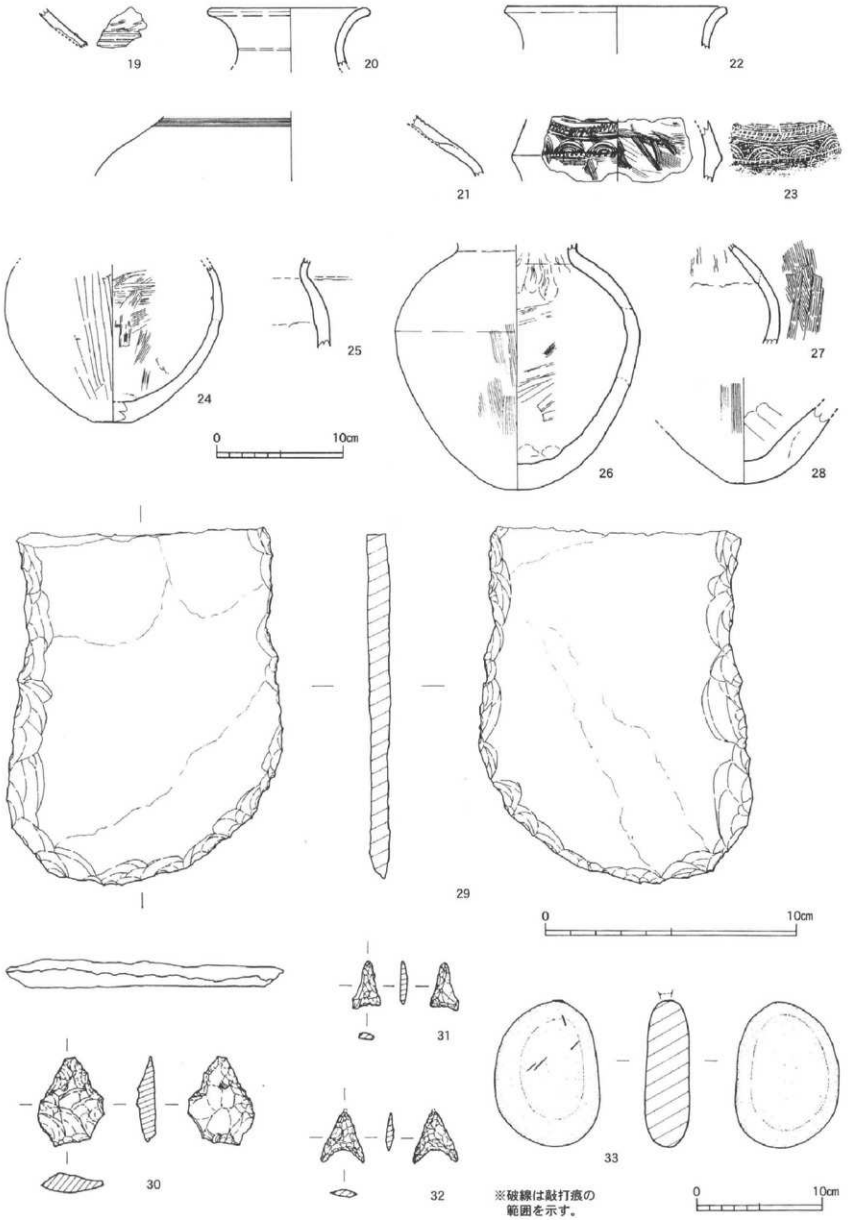
自然堤防面から開析谷への傾斜部付近でY－SD01にほぼ直交する形で出土したのがこの木組状遺構である。約2.5m×1.5mの範囲内に、先端部を削ったり、中ほどに抉りを施した長さ1.0～1.5mほどの木杭状のものや、火熱を受けて黒変した丸材などが20本程度まとまって出土している。断面で観察すると、これらの大部分がY－SD01の最終段階の掘り込み面を下端に、その上部約0.2mまでの間に集中して出土していることから、この最終段階の溝に伴う遺構であると考えられる。なお、多少ばらけてはいるが、多くがY－SD01と直交する状態で遺存していることから、当該期水田の用排水溝と推測しているY－SD01に設けられた井堰や木橋などの機能を想定しているが、断定できる物証が乏しいため判然としない。ただし、これらの木材とともに口縁を打ち欠いた上で埋置したような状態の短頸壺(26)が出土してしていることから、いわゆる水口祭祀のような儀式的行為の対象となる遺構であった可能性は示唆できよう。この木組状遺構を構成する木材のうち今回は特徴的な3点のみを図化・掲載しているが、前述したY－SD01内出土の34・35も本来はこの遺構に伴っていたと考えている。38は明瞭な加工痕はないが、全体的に黒変した丸材である。火熱を受けている範囲はほぼ表面だけで、防腐を目的にいぶしたような印象を受ける。39は抉り状の加工痕が複数みとめられるが、35でみられる半裁を目的とした加工痕とは異なり、木を組み合わせる際のほぞ的な意味合いがうかがえる。49は4面とも面取りされた角材である。加工痕の残るものを除くと表皮剥ぎ取りのみの丸材が多い中では、稀有な存在である。

3）包含層内出土遺物 第24～29図

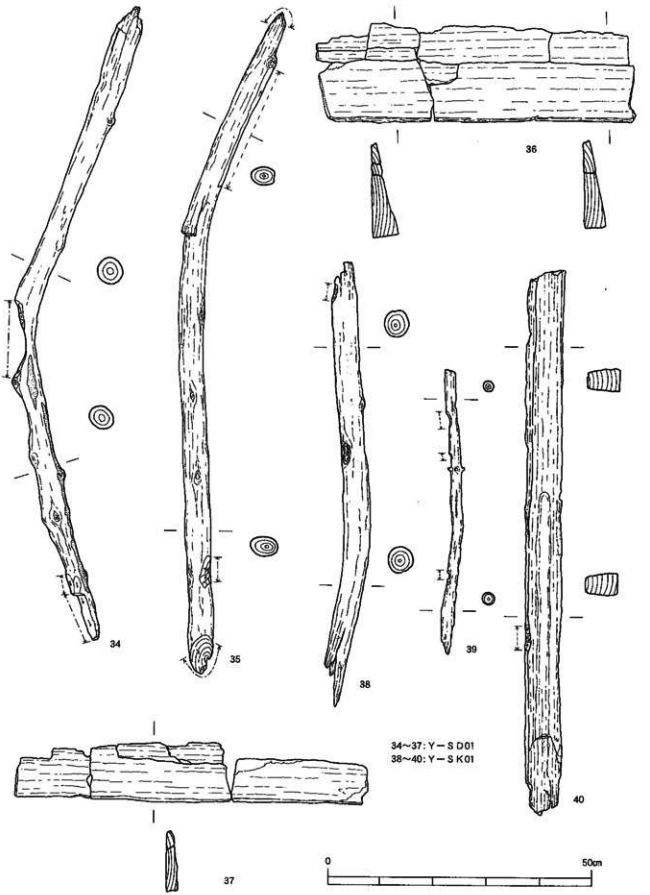
ここでは包含層内から出土した当該期の遺物について説明を行うが、土器については概ね各時代ごとにまとめて記述を行い、木製品と石器については明確な時期の区別を行わずに解説を加えた。

①土 器 第24～26図

縄文時代後期に比定される土器は、主に自然堤防面後背の段丘面北側一帯で出土している。41は胴部を巡る数条の沈線の間に斜位の刻みが施された後期中頃のいわゆる西平式の深鉢である。42は内外器面とも横位のミガキがみとめられ、頸部にはにぶい凹線が巡っている。三万田式土器に並行する中岳式の深鉢と考えられる。今回の調査では、これら後期の土器に伴う遺構は確認していないが、自然科学分析で明らかになったようにこの遺跡一帯が当時照葉樹林の広がる植生であったことを考えると、従来は生活エリアとして想定していなかったこうした河川流域の低位面においてもこの時期の生活址が遺存している可能性は

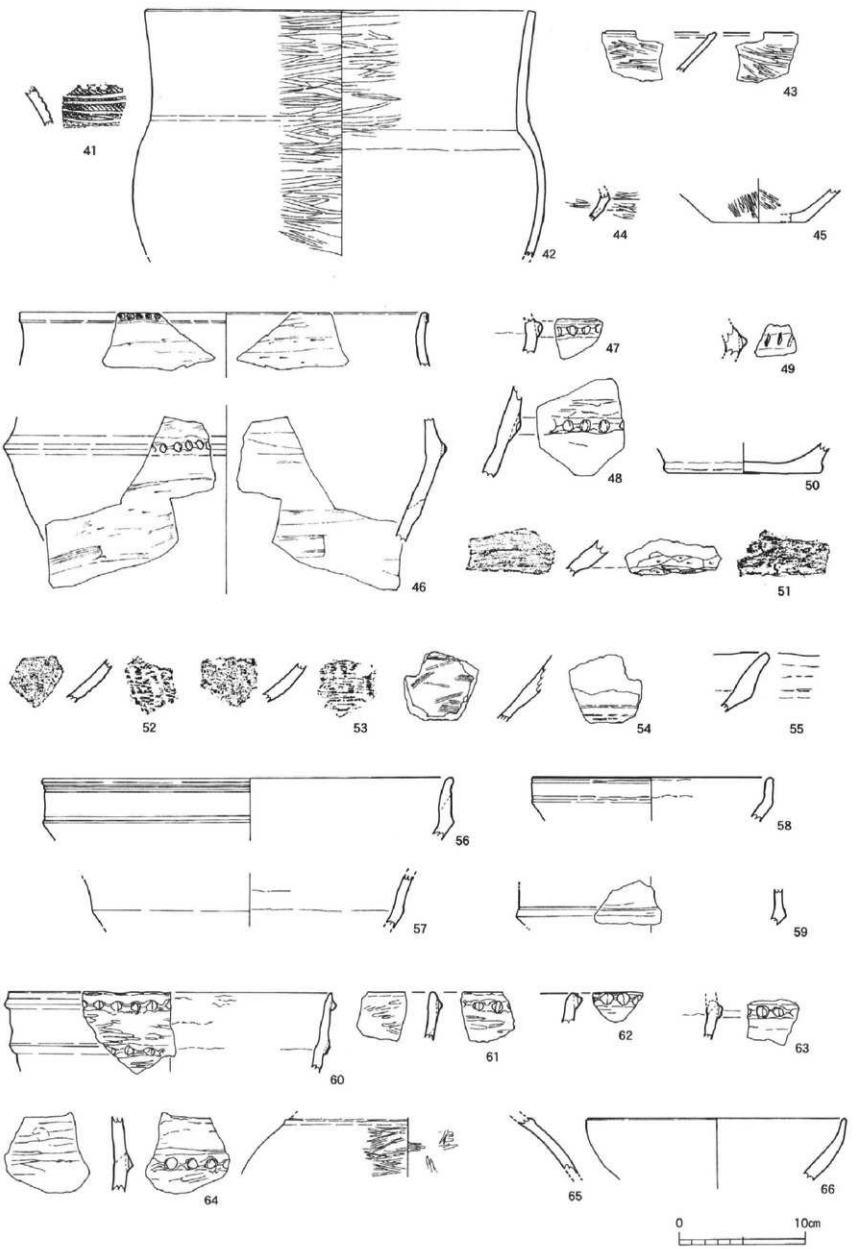


第22図　Y－S D01～03(1～3号溝)内出土遺物実測図②



※破線は観利な工具痕、一点破線は鈍い工具痕の範囲を示す。

第23図　Y－S D01（1号溝）・Y－S K01（1号木組状遺構）内出土木製品実測図



第24図　包含層内出土遺物(縄文～古墳)実測図①

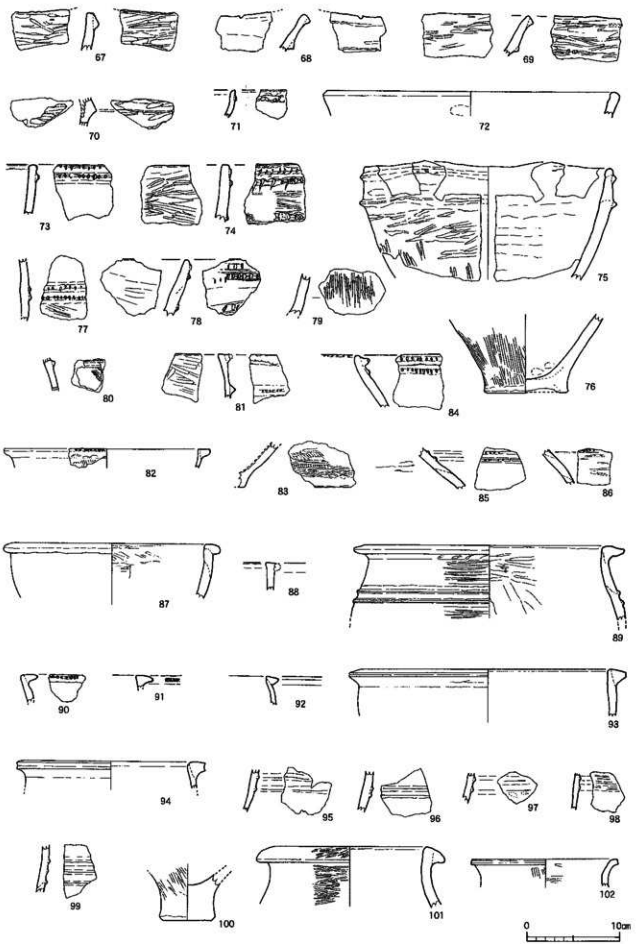
高く、今後の調査の進展に伴ってそうした痕跡が明らかになることを期待したい。

縄文時代晩期前半頃についても明確な遺構は検出していないが、自然堤防面後背の段丘面一帯で遺物の分布がみとめられる。遺物の数もさほど多くはないが、丁寧なミガキが施された黒色磨研系の松添式に該当すると思われる浅鉢(43～45)などが挙げられる。

住居跡や水田該当層を検出した縄文時代晩期終末～弥生時代前期頃の遺物は、遺構以外からの出土が多く、その主となる包含層は第Ⅳ d・k 層である。46～50はいわゆる突帯文土器様式に該当すると考えられる甕である。器面調整はナデが主流であるが、46だけはケズリ状のナデ調整がみとめられる。小片が大半を占めるが、46～49はいずれも口縁部と胴部に一条ずつの突帯を有する二条突帯になると思われる。突帯部の刻目は、46の口縁部が竹管刺突、胴部が工具刻み、47・48が指頭刻み、49がヘラ状工具による刻みと、バリエーションに富む。胴部の断面形態はいずれも「く」の字形を呈すと思われる。51～59は前述の甕に伴うとみられる鉢及び浅鉢である。器面調整は甕と同様にナデが中心であるが、54は工具ナデ、51は丁寧なケズリである。また、52・53には編布圧痕がみとめられ、55は波状口縁の可能性がある。56～59は同じナデ調整でも胴部から屈曲する断面形を呈しており、口縁下位や胴部の屈曲位に沈線が巡っている土器もみられる。都城市黒土遺跡出土の土器と比較すると、黒土遺跡では51～55の器形・特徴を有する土器はナデ・ケズリ調整を主とする粗製上器、56～59と類似した器形はミガキや丁寧なナデが施された精製土器に分類されているが、当遺跡出土の土器については、粗製・精製の区別はできなかった。なお、これらの多くは外器面にススの付着がみとめられた。

60～86は概ね弥生時代前期に比定される土器群である。60～64は丁寧なナデや横位のミガキが施された甕である。いずれも口縁部と胴部に刻目突帯が巡ると思われ、口縁突帯は口唇端部よりやや下がった位置に貼り付けられている。なお、刻目は指頭刻みのみである。65～72はこの種の甕に共伴すると思われる壷・鉢類である。65は肩部に削り出し状の突帯が巡る壷である。鉢形土器と思われる66は、内外器面ともナデ調整で、外器面にはススが付着している。67は内外器面に丁寧なミガキがみとめられる鉢で、他の土器に比べて硬質である。68・69はともに山形口縁を呈した台付鉢と思われる。いずれも口縁部と頸部に突帯文が巡っているが、69の頸部突帯にのみ退化した刻目がみとめられる。71も口唇端部よりややﾄがった位置に刻目突帯が巡る鉢であるが、刻目は69同様かなり退化している。70は丁寧なミガキの施された鉢、72はナデ調整の深鉢状の器形を呈する土器であり、いずれもこの土器群に先行する可能性があるものの判然としない。73～75・77～81は60～64と同様に丁寧なナデやミガキ調整がみとめられる甕である。突帯部の刻目に着目すると、75・80には刻目がなく、他はいずれも工具刻みである。さらに、その特徴によって鋭利な工具による深い刻目(73・77)と、浅く細かいもの(74・78・81)に分かれる。なお、81は丁寧なミガキが施されたかなり薄手の土器で、他の遺物とは一線を画している。唯一の底部である76はハケ目調整であり、これらに若干後出する可能性がある。82・83はこれらに共伴する鉢、84～86は壷である。82は口唇部に浅く細かい刻目を施した貼付突帯がみとめられ、突帯下位には指頭痕が残る。同種の鉢の底部である83は斜位のハケ目のち横位のミガキ調整である。無頸壷と思われる84は、口縁部に二条の刻目突帯が巡るほか、口唇部にも刻目がみとめられる。刻目はいずれも細かく浅い工具刻みである。85も細かく浅い刻目が施された二条の突帯が頸部を巡る壷である。86は頸部に押引文と竹管による刺突文がみとめられる。87・88は口縁部の断面形がにぶい甕で、87には下面付け根に接合の際の指頭痕が残る。前期末～中期初頭頃を想定している。

弥生時代中期に比定される土器群としては、89～102がある。甕は、口縁部の断面形が三角形を呈し、突帯部に細かい工具刻目を有するものを含むグループ(89～92)と、口縁部突帯の先端を強くヨコナデすることで「M」字状の口縁断面形を作り出すグループ(93～100)に分かれる。口縁の断面形態や調整方法な



第25図　包含層内出土遺物(縄文～古墳)実測図②

どから、先行するのは前者の土器群と考えている。なお、「M」字状の口縁断面を呈す甕は、黒土遺跡をはじめ周辺の遺跡でも出土が報告されており、中期中葉頃に位置づけられている。壺は、ミガキ調整で口縁断面が三角形状の101が前者の甕と、口縁が外反し、口唇部にヨコナデによる凹線状のくぼみがみとめられる102が後者とセットになると思われる。これらの遺物に伴う遺構も確認していないが、プラントオパール分析によって、溝状遺構が検出されている後期・終末期～古墳時代初頭頃の前段階で一次廃絶するものの、中期の早い時点で旧開析谷付近においてイネが栽培されていたことが明らかになっている。

103～117は溝状遺構や木組状遺構が確認された後期～古墳時代前期頃の土器である。103は口縁が「く」の字形に外反し、胴部上位に刻目を有する突帯が巡る甕で、中期後半～後期初頭頃に位置づけられる中溝式に該当する。104は中期末まで遡る可能性のある平底の底部、105は底部端から緩く内湾しながら立ち上がり、上げ底状になる後期の甕の底部である。106～108は鉢形の土器と考えられる。口縁は大きく外反しており、106の口唇部には緩い凹線状のくぼみがみとめられる。底部(108)はやや上げ底状を呈す。109・114は後期末～古墳時代初頭頃に比定される壺の底部で、114がやや後出すると思われる。110～113・116・117は高坏の脚部である。なお、今回の調査では高坏の坏部はほとんど出土していない。110～113は、坏部からわずかに内湾しながらもほぼストレートにラッパ状を呈した裾部へとつながるタイプで、脚部と裾部の境目四方に円形の透かしを有するもの(110)も含む。116・117は比較的脚部自体が短く、エンタシス状にふくらみながら裾部へと至る形状を示す。なお、117にはわずかに赤色顔料の付着がみとめられる。前者を後期末～古墳時代初頭頃、後者を前期頃に比定している。115は蓋で、非常に脆弱な土器である。

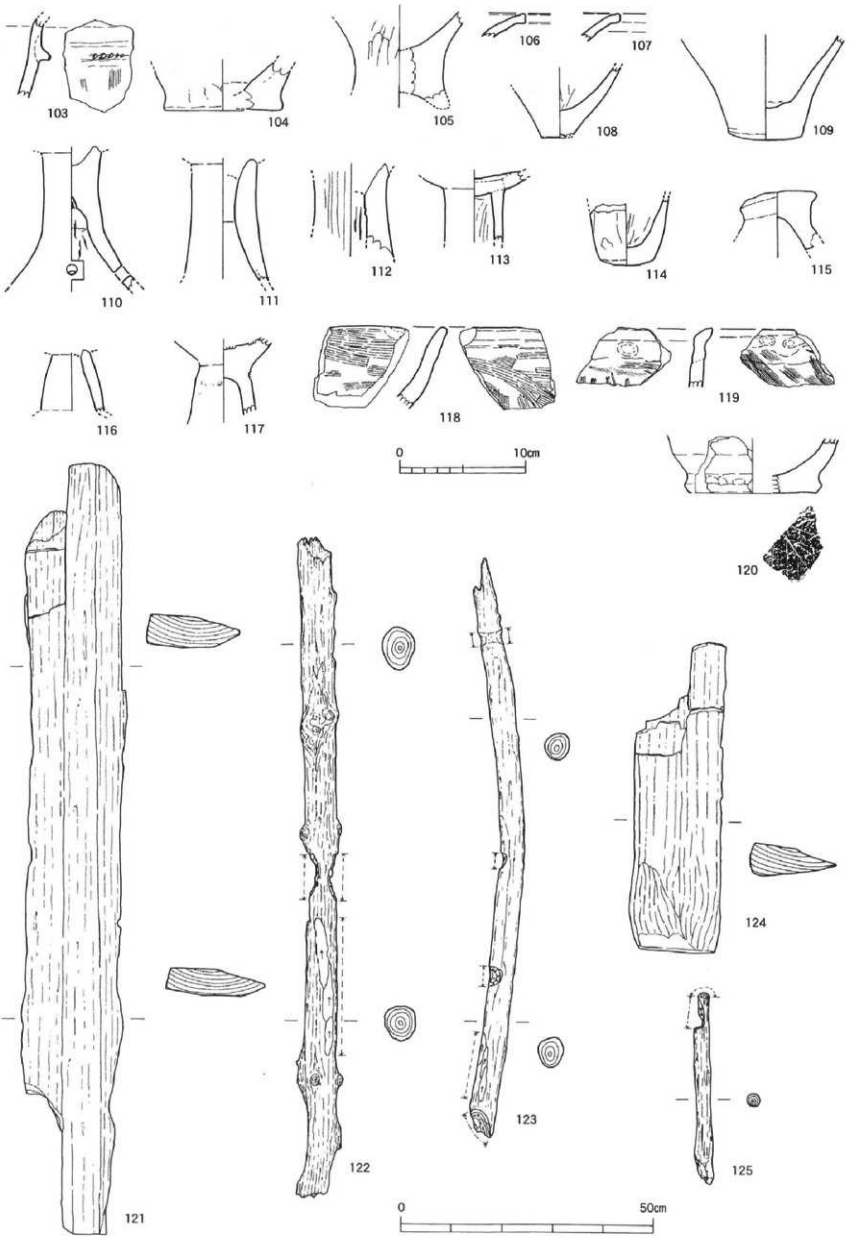
118～120は古墳時代の甕及び深鉢状の土器と考えているが、明確な時期は判然としない。118・119は工具ナデを基調とする調整で、口縁部の内外器面に指頭痕がみとめられる。120は端部に明瞭な稜線を有し、底部には木葉痕が確認できる。

②木製品　第26図

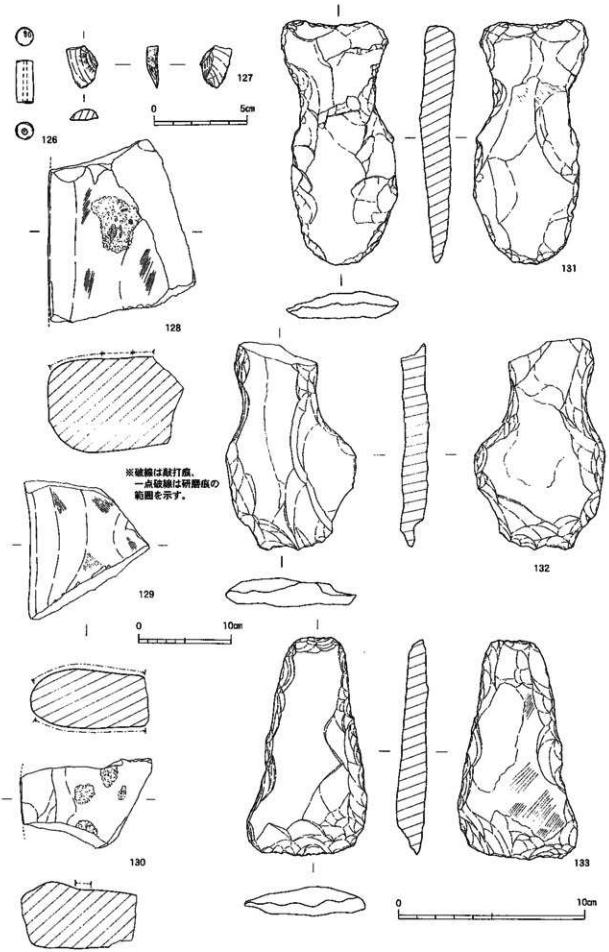
今回の調査では多量の植物遺体が出土しているが、木根や枝状のものが大半を占めており、図化できる製品・未製品の類は限られていた。ここに掲載した遺物のうち、122以外はすべて第Ⅳｊ層からの出土遺物で、出土地点は自然堤防面から旧氾濫原への傾斜部付近(122・125)と開析谷部分(121・123・124)にわかれる。121・124は柾目取りの未完割材と思われ、いずれも楔形に面取りされている。122は中央付近に抉りがみとめられる丸材で、木杭の製作を目的に半裁する途中で廃棄された可能性がある。123には一方の先端を工具によって加工された痕跡がみとめられ、125は表面をいぶしたように黒変している。なお、121・123・124はＹ－ＳＤ01及びＹ－ＳＫ01との関連性が指摘できる。

③石　器　第27～29図

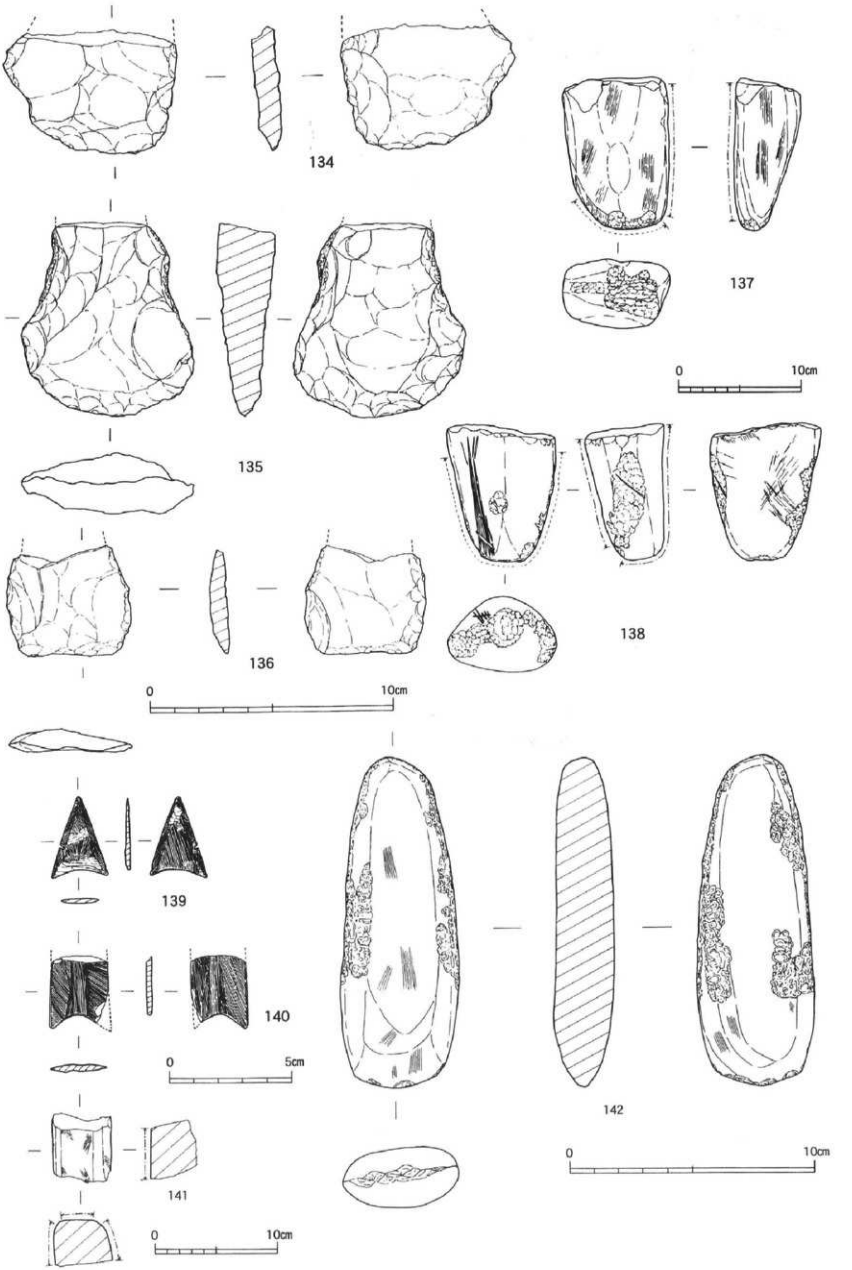
126は長さ2.3cm、直径約1.0cm、孔径0.3～0.15cmの管玉である。一方向から穿孔されており、反対側の孔部は中央をそれて外縁部に偏っている。時期等は不明であるが、石製の管玉としては当地域の初例である。材質は緑色凝灰岩とみられる。127は二側縁加工の小型の剥片石器と思われる。黒曜石製。128～130は石皿ないし台石の破片とみられ、敲打痕や擦痕のほか、火熱を受けて赤変した痕跡やススの付着もみとめられる。石材は主に硬質砂岩である。131～136は、平面形態がしゃもじ状のもの(131・132・134・135)と、方形ないし長台形状を呈すもの(131・136)に分かれるが、その機能を念頭において打製土堀具としている石器である。いずれの石器も側縁部に敲打の痕跡がみとめられるが、しゃもじ状をなすものはより丁寧な敲打を施して柄部を作り出している。また、先端部には総じて使用による磨滅の痕跡がみとめられる



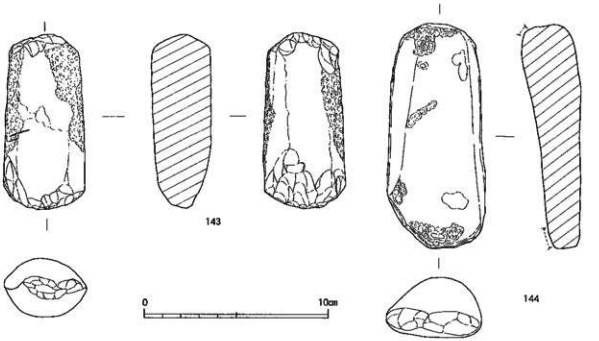
第26図　包含層内出土遺物(縄文～古墳)実測図③



第27図　包含層内出土遺物(縄文～古墳)実測図④



第28図　包含層内出土遺物(縄文～古墳)実測図⑤



第29図　包含層内出土遺物(縄文～古墳)実測図⑥

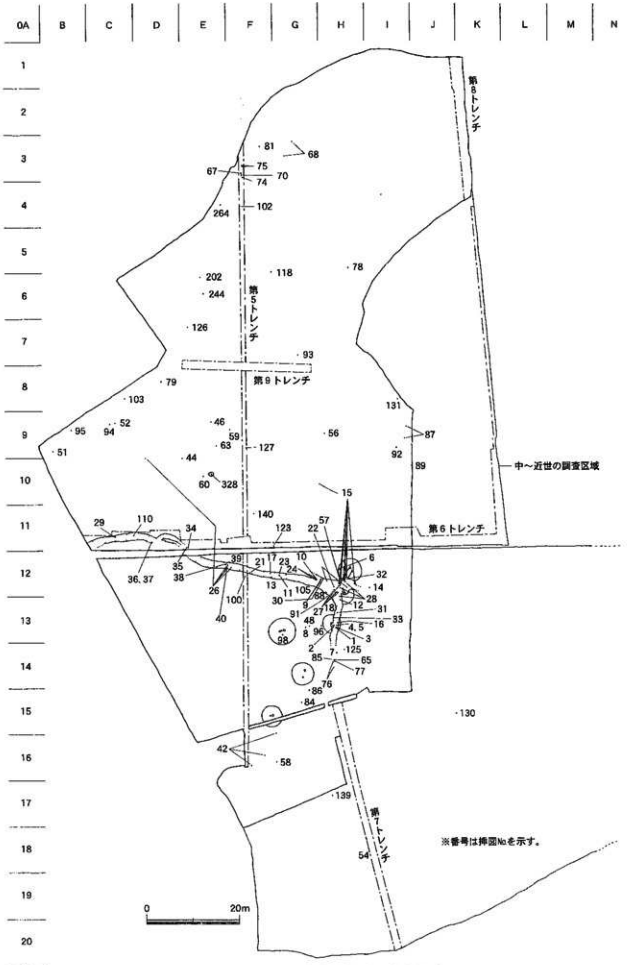
ほか、131では装着痕とみられる光沢を帯びた磨耗痕も確認できた。なお、これらの石材は、頁岩、ホルンフェルス、輝石安山岩など多岐にわたる。137・138は硬質砂岩製の敲石である。137は先端部に敲打痕、表・裏面と側縁に研磨によると思われる擦痕がみとめられる。138は先端部と側縁に敲打痕がみとめられるほか、工具痕とみられる条痕が表・裏面と側縁に残っている。139・140は頁岩製の磨製石鏃である。ともに基部が内湾するタイプで、140は表裏面に先端部から基部にかけて磨き出された幅5～6㎜程度の凹みがみとめられる。141は砂岩製の砥石で、欠損しているが少なくとも三面に使用による擦痕がみられる。142～144は磨製石斧とその未製品である。142は両刃石斧で、刃部に擦痕と使用による刃こぼれの痕跡が残るほか、側縁には敲打調整痕がみとめられる。143・144はともに未製品と考えているが、144については石斧以外の可能性もある。

＜2＞古代(平安時代)の遺構・遺物

古代(平安時代)の遺構としては、調査区第1面北側のE・F－4区～F－6区一帯から密集して出土した竪穴住居跡や、同住居群と混在しながら調査区西側へ広がる掘立柱建物群のほか、第1面全域に広く分布している柱穴や土坑、そして第1面北東部で検出した砂礫層に覆われた水田跡などがある。これらの年代については、集落遺構が8世紀後半～9世紀前半頃を中心とする8世紀～10世紀までの年代幅を想定しており、水田跡については共伴する遺物から集落に後出する古代末～中世初頭頃と推定している。以下、各遺構ごとに内容を説明していく。

[竪穴住居跡]

今回の調査では、土坑の可能性も残る小型住居を含め、古代の竪穴住居跡を16軒検出している。大半が長方形ないし方形プランであるが、隅丸方形のものも含まれる。また、燃焼部袖の残骸とみられる粘土塊や炭化物を含む焼土、火熱を受けて赤化した軽石製品などが検出されていることから、明瞭に残存しているものはなかったが、カマドを有する住居跡が含まれている可能性がある。なお、この時期の竪穴住居跡



第30図　脇穴遺跡掲載遺物(縄文～古墳)分布図

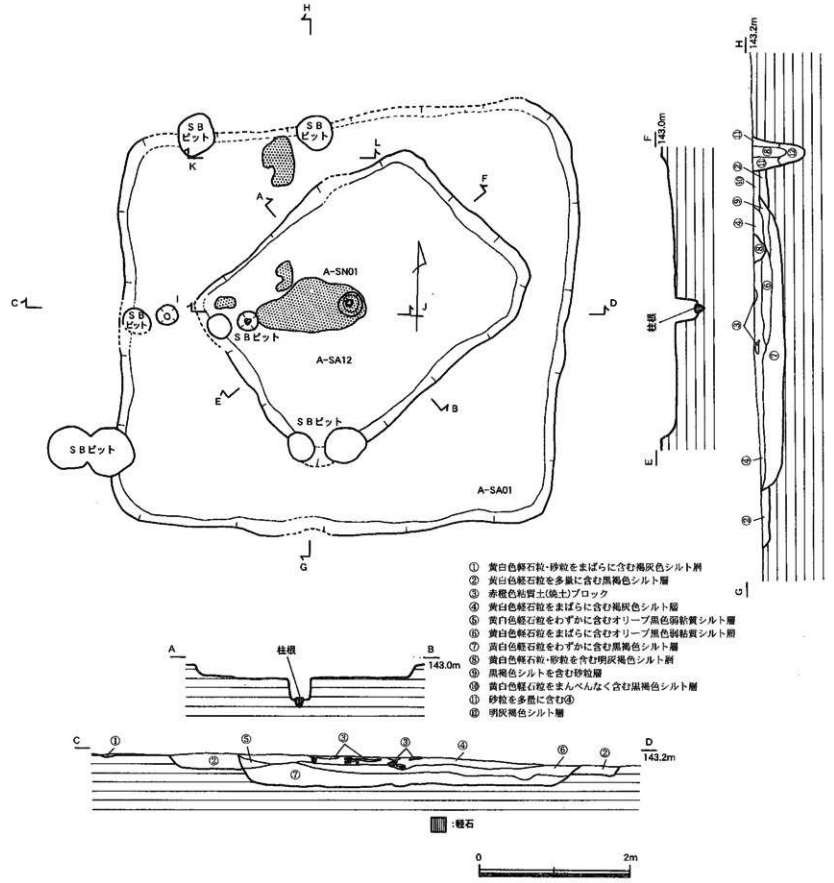
についても、調査着手時にその遺存を想定していなかったことに加え、黒色土層面上でほとんど色調差のない黒褐色系埋土の住居を検出せざるをえない状況だったため、プランの確認や床面・主柱穴の検出は困難を極めた。また、遺構間の切り合いもかなり激しく、床面付近の一括遺物などをもとにその前後関係を推察したものもある。各住居跡の詳細は次のとおりであるが、切り合い関係等のかね合いがあるため、説明は遺構番号順ではなく挿図順に行っている。

A－SA01（1号竪穴住居跡）　第31・33・34図

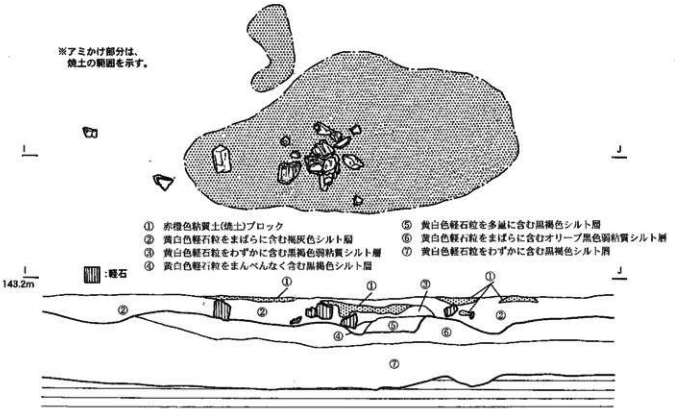
長軸約6.0m、短軸約5.6mの方形プランの住居跡で、A－SA12とA－SB02に切られている。当初は検出面からの深さが約0.2mとかなり浅いため、A－SA12の一部（花弁状住居のベッド状遺構的な役割）となる可能性も考えられたが、断面の土層観察によって切り合い関係が確認できたので、別遺構と認定した。なお、明らかな主柱穴は検出できなかったが、プラン北側においてカマド燃焼部の袖らしい形状で遺存した火熱を受けた粘土塊（A－SN02：2号カマド状遺構）を確認しており、カマドを伴っていた可能性が指摘できる。この住居に伴う遺物（145～164）は主に中・下層から出土しており、プランのほぼ全域に分布している。遺物の内訳は、土師質土器、須恵器、布痕土器のほか、磨石が1点出土している。土師質土器には甕（145・146）、坏身（147～153）、坏蓋（154）がある。145は外面口縁部に指頭痕の残る小形甕で、鉢の可能性もある。坏身はいずれも底部ヘラ切り離しであるが、口径と底径の差が小さく体部は内湾しながら立ち上がり、器高も低いタイプ（147・148）、口径と底径の差はそのままで器高だけが高くなり、体部の立ち上がりがややストレートになるタイプ（150・151）、底径が小さくなる反面、器高は高くなり、体部がラッパ状に開くタイプ（152・153）にわかれる。坏蓋は、扁平なボタン状に退化したつまみを有し、ケズリの痕跡もない。須恵器には坏身（155）、皿（156）、坏蓋（157）、壺蓋（158）がある。155は体部下端にケズリやヘラ状工具による条痕が残る。また、外器面には敲き藁の跡がスス状に付着している。156にもヨコケズリの痕跡がみとめられる。158はロクロ痕が明瞭であるが、つまみ周辺のみナデ消しが施されている。また、外器面には灰状の自然釉がかかる。今回検出した遺構及び包含層中からは、固形塩生産用のいわゆる焼塩土器である布痕土器が多量に出土している。これらは基本的に逆円錐形を呈する型押し成形ものが大半を占めており、南九州地域の特徴である器壁の厚い土器が主流である。159～163もこうした布痕土器で、内器面には型に留められていた布の痕跡、外器面には調整の際の指頭痕が明瞭に残っている。159はかなり小型の土器であるが、他は口径15～18cm前後を計るとみられる。口縁部の形態には多少バリエーションがあり、口唇部をヘラ状工具等で切って口縁断面を三角形状にするもの（161）や、口縁部も体部と同じ厚みで口唇部に明瞭な稜がみとめられないもの（160）などがある。布痕にもかなり個体差があるが、概ね布目の粗細で大別できる。なお、161は波状口縁の可能性がある。164は硬質砂岩製の磨石で、前時代の遺物が混入したものと考えている。

A－SA12（12号竪穴住居跡）　第31・32・35図

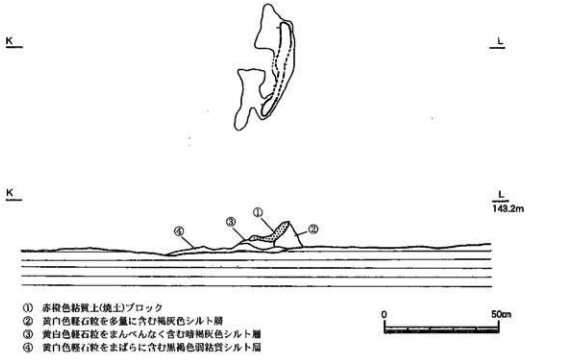
A－SB02に切られた方形プランの住居跡で、長軸約3.8m、短軸約3.0m、検出面から床面までの深さは約0.4mを計る。当初A－SB02に伴うと考えていた柱根の遺存した柱穴を含め、柱穴は2個しか確認できなかった。この住居跡においても中・下層から土師質土器、須恵器、布痕土器のほか、須恵質の紡錘車や軽石製品などが出土している。土師質土器には塊（165）、坏身（166）、坏蓋（167）がある。165は斜位のハケ目調整ののちナデ消しがみとめられる。166の底部には切り離し後の工具調整痕が残っている。167は口縁端部が断面三角形の肥厚部となり、内器面の屈曲部には稜線が残るが、ケズリの痕跡はみとめられない。須恵器の高台付塊（169）は体部直下よりやや内側に角張った高台が付き、畳付にはナデによる凹みがみと



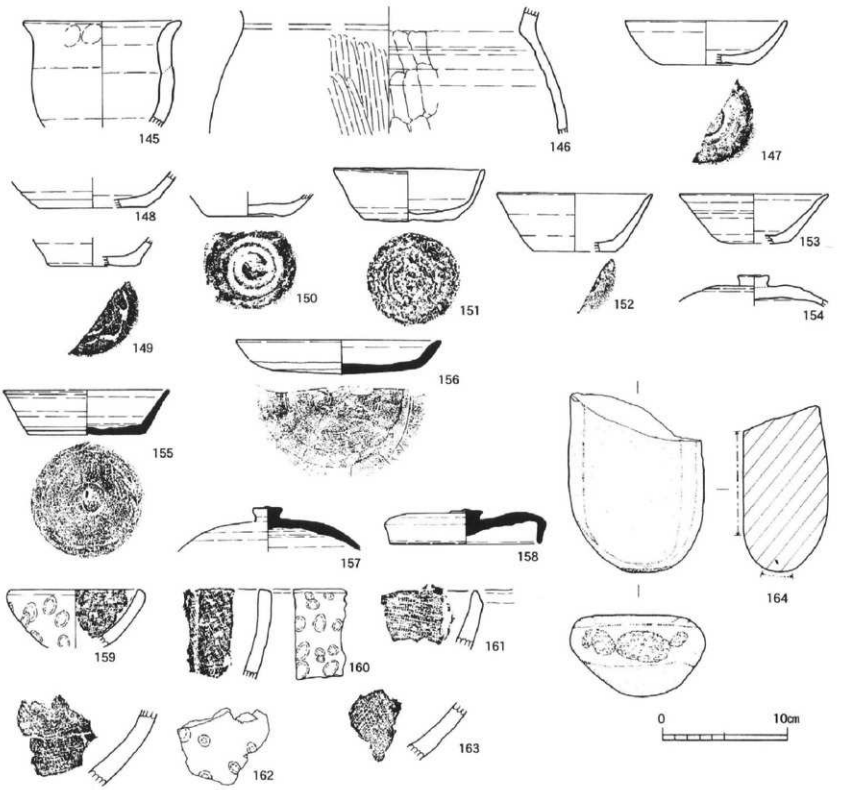
第31図　A－S A01・12(1・12号竪穴住居跡)実測図



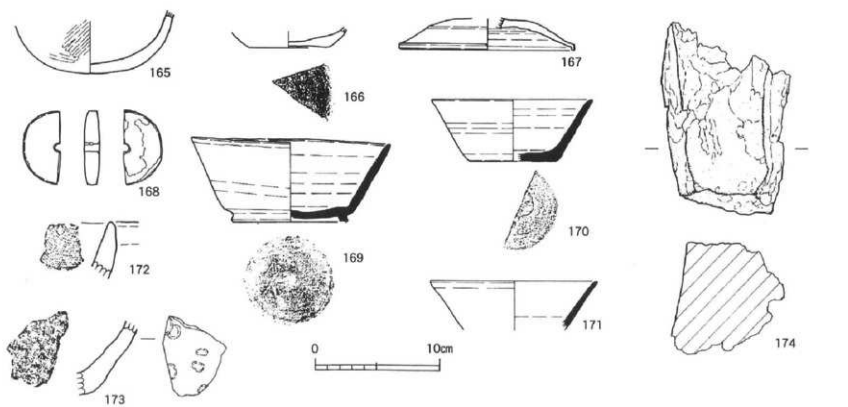
第32図　A－S N01(1号カマド状遺構)実測図



第33図　A－S N02(2号カマド状遺構)実測図



第34図　A－SA01(1号竪穴住居跡)内出土遺物実測図



第35図　A－SA12(12号竪穴住居跡)内出土遺物実測図

められる。高台内では切り離し後の丁寧なナデ調整が確認でき、三条の工具痕（ヘラ記号？）も残る。坏(170・171)は体部がストレートに外反するタイプで、170の底部は切り離し後に工具調整されている。168は須恵質の紡錘車とみられ、直径約6㎝、孔径約6㎜で、厚みは最大1.4㎝を計る。よく出土する二次転用品ではなく、当初から紡錘車を目的に作られたものである。布痕土器は、1㎜四方の細かい布目がみとめられる173と口縁断面がにぶい三角形を呈し、布目がやや粗い172が出土している。174は面取りの施された軽石製品で、表面が火熱によって赤変しているほか、緑青状の膠着物もみとめられる。

なお、埋土の最上層部において、火熱を受けて赤化した軽石とともに焼土の広がりを確認している。この遺構に伴うものではないため、住居跡が埋没したあとに何らかの遺構が構築されていたと思われるが、詳細については把握できなかった。軽石群の中にはカマドの支柱と思われる軽石製品もみとめられることから、A－SN01（1号カマド状遺構）として図を付記しておく。

A－SA03（3号竪穴住居跡） 第36・37図

A－SA11・15を切る方形プランの住居跡で、長軸約4.4m、短軸約2.8m、検出面からの深さは約0.3mを計る。なお、柱穴はプラン中央東側で1個だけ確認している。この遺構に伴う遺物としては、土師質土器の甕、黒色土器の高台付塊、布痕土器がある。甕は小甕(175)以外はすべて中甕である。口縁部の形状から極端に外反するもの(176・177)と緩やかに外反するもの(178～180)に分けられるが、器面調整が基本的に同じであることからかなり近い時期の中でのバリエーション差ととらえた。黒色土器は、やや長めの高台が付き、切り離し後に高台内を丁寧にナデ消しているもの(181・182)と小ぶりな三角形の高台が付き、高台際を強くなでた跡が凹線状に残るもの(183・184)に分かれる。前者は高台付塊と考えられるが、後者は他の器形を呈す可能性もある。なお、181は表面を燻した痕跡がなかったが、その技法から黒色土器の範疇に加えた。また、184は端部に研磨の痕跡がみとめられることから、二次転用品の可能性がある。

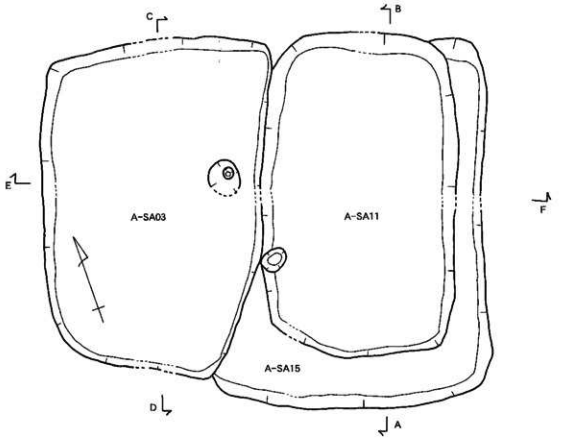
この遺構の最上層では砂粒や黄白色軽石粒を含む層がみとめられるが、今回検出した他の住居跡においてもこうした層の堆積が確認されている。また、時期差はあるものの竪穴住居群東側で検出した古代末～中世初頭頃の水田跡においても、砂礫や御池降下軽石、二次堆積のシラス（AT）などの混土層に水田面がパックされた状況がみとめられる。これらの事象については、推測の域を出ないものの、遺跡北側に広がる月野原台地の傾斜部から供給された砂粒や火山灰などが、土石流などの災害によって頻繁にこの一帯に影響を与えていたことを示唆しているのかもしれない。

A－SA11（11号竪穴住居跡） 第36・40図

A－SA15より後出し、A－SA03に切られた住居跡である。平面プランは長方形を呈し、長軸約4.2m、短軸約2.6m、床面までの深さは約0.26mを計る。A－SA03同様褐色系の埋土であるため前後関係の判断に苦慮したが、床面付近の切り合い関係からSA03に先行すると考えた。この住居跡でも柱穴は南西部の壁際で検出した1個のみである。遺物は土師質上器の甕(193・194)、坏(195～197)、高台付坏(198)と黒色土器の高台付坏(199)のみで、須恵器の出土はなかった。194は口縁部が外反する甕で、内器面の口縁と体部の境目には稜線が入る。195は内湾しながら立ち上がり、口縁のみがやや外反する。体部中央に工具切込みによる沈線が二条巡るほか、下端にはヨコケズリの痕跡がみとめられる。198は体部直下にやや先端の尖った高台が付く坏と考えている。199は内器面に丁寧なミガキがみとめられる高台付坏である。

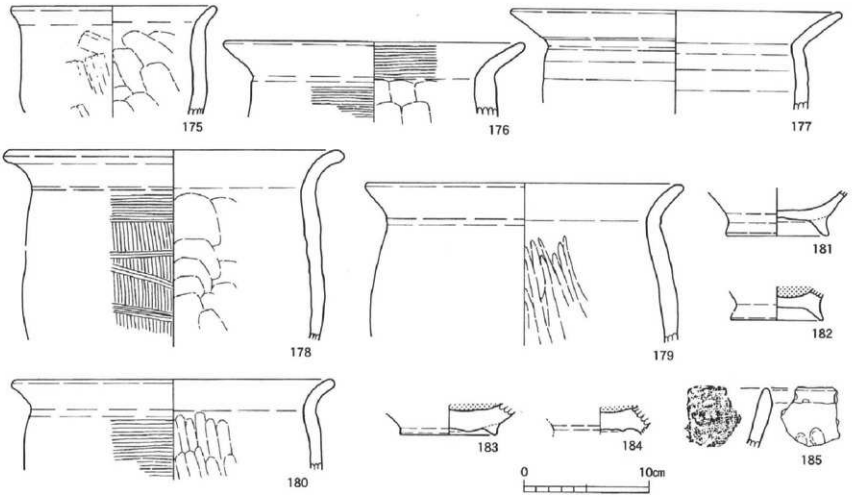
A－SA15（15号竪穴住居跡） 第36・41図

A－SA03・11に切られた住居跡で、長方形プランであったと推測される。残存部での長軸は約4.8m、短軸約3.6mを計り、検出面から床面までは約0.4mほどである。この住居跡については、プラン東側の立ち上がり部分と床面付近の状況しか確認できなかったが、A－SA03で指摘したような赤化した黄白色軽

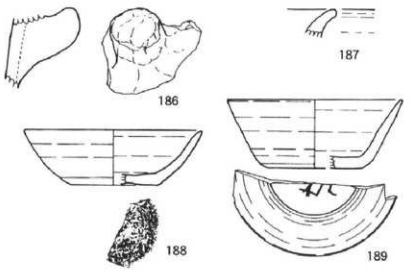


① 黄白色軽石粒・砂粒をまばらに含む黒褐色シルト層
② 黄白色軽石粒をわずかに含む黒褐色弱粘質シルト層
③ やや赤化した黒色弱粘質シルト層
④ 黄白色軽石粒をまばらに含む褐灰色シルト層
⑤ 黄白色軽石粒をわずかに含む褐灰色シルト層
⑥ 赤化した黄白色軽石粒・砂粒をまんべんなく含む褐灰色シルト層
⑦ 黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層

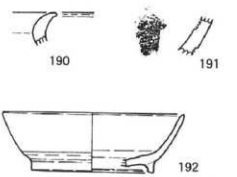
第36図　A－SA03・11・15(3・11・15号竪穴住居跡)実測図



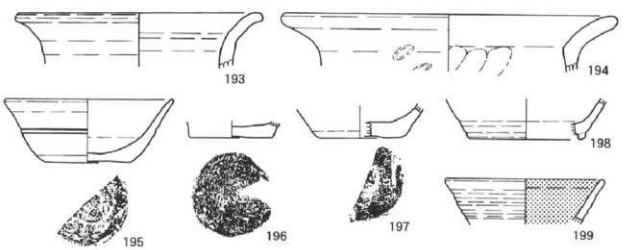
第37図　A－SA03(3号竪穴住居跡)内出土遺物実測図



第39図　A－SA04(4号竪穴住居跡)内出土遺物実測図



第38図　A－SA05(5号竪穴住居跡)内出土遺物実測図



第40図　A－SA11(11号竪穴住居跡)内出土遺物実測図

第41図　A－SA15
(15号竪穴住居跡)内
出土遺物実測図

石粒や砂粒を多く含む層が主たる埋土となっている。出土遺物は少なく、図化可能であったのは土師質土器の甕(200・201)2点のみであった。

A－SA04（4号竪穴住居跡） 第39・42図

調査区北側の台地傾斜面付近で検出した住居跡である。長軸約3.8m、短軸約3.6mで、平面プランはほぼ方形を呈している。検出面から床面までの深さは約0.2mと浅く、砂礫層や砂粒を多く含む層が埋土の大半を占めている。柱穴は南側の壁際と北側で各々2個ずつ確認しているが、主柱穴としてはやや説得力に欠ける。遺物は土師質土器の甕と坏身が出土している。186は甕の把手で牛角状を呈す。坏には、器高が低くやや内湾しながら立ち上がる188と、器高が高くほぼストレートに立ち上がる189がある。いずれも体部下端にはケズリの痕跡が残る。なお、189の底部には線刻がみとめられるが、判読不能である。

A－SA05（5号竪穴住居跡） 第38・43図

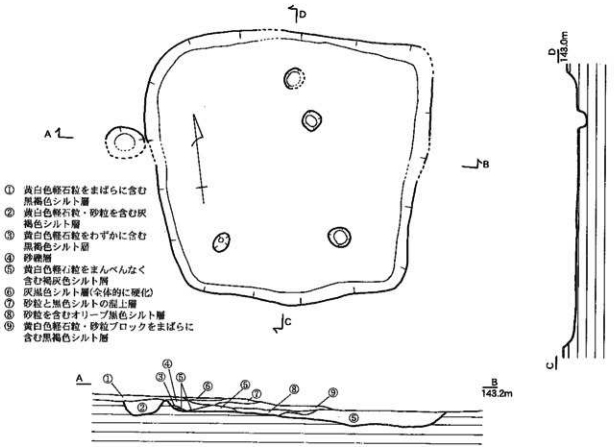
A－SA05～07は、南北方向の土層観察用トレンチを設定した際にその存在に気づかず、誤ってプラン東側を掘り下げてしまっている。SA05は方形ないし長方形プランであったと推測され、残存部は一辺約4.0mを計る。床面までの深さは約0.2～0.25mほどである。この住居跡においても柱穴は検出できなかった。出土遺物も少なく、ここでは土師質土器の甕(190)、高台付坏(192)、布痕土器(191)を各1点ずつ掲載している。192は器高が低く、やや内湾した体部をもつ高台付坏で、体部直下よりやや内側に高台が付く。高台内は切り離し後に丁寧にナデ調整が施されている。また、体部下端には高台を貼り付ける前にヨコケズリした痕跡が残る。

A－SA02（2号竪穴住居跡） 第44・45図

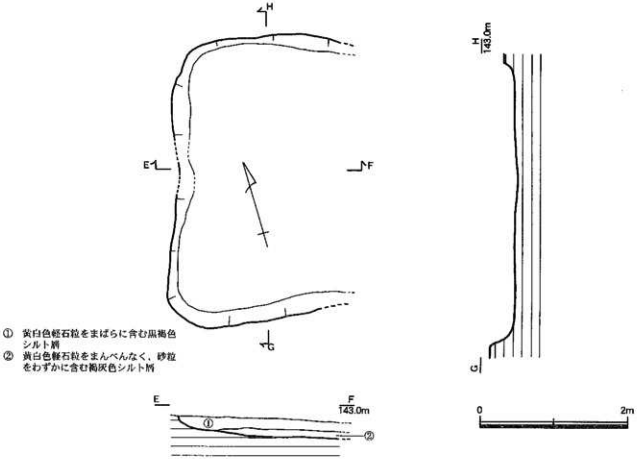
A－SA09・10・14に切られた長方形プランの住居跡で、長軸約5.8m、短軸約4.8m、検出面から床面までの深さは約0.2m程度である。切り合いが激しいことに加え、同一住居内で1mもおかずに床面を形成する地層が変化する状況であったため、柱穴の有無はもとより床面の認定自体にもやや疑問が残っている。この住居跡においても、中・下層を中心に土師質土器と須恵器を確認しているほか、弥生土器も1点混入している。202は体部に二条の突帯が巡り、口縁突帯の先端は強いヨコナデによって「M」字状の口縁断面形を呈す弥生時代中期頃の甕である。203は丁寧なハケ目のみとめられる小型の土師質甕、204は明瞭なロクロ調整痕の残る坏身、205はかえり部分の内面に稜を有する坏蓋である。須恵器には底部が小ぶりで体部がストレートに立ち上がる坏身(206)のほか、坏蓋が3点(207～209)出土している。206は体部下半に墨書がみとめられ、柴田博子氏より「真万」と判読する可能性が指摘されている。207はつまみがつかない蓋で、器形は天井部から口縁部にかけてやや外湾し、口縁部の手前でわずかに屈曲する。つまみの残る2点のうち、208は頭頂部がやや退化した乳頭状、209は扁平な擬宝珠状を呈す。208の体部は緩やかに内湾しながら口縁肥厚部に至るが、207とは逆に内器面に屈曲部がみとめられる。209はつまみ周辺が強いナデによってくぼみ、口縁部の手前で屈曲する形状になると考えられる。ともに自然釉がみとめられ、208は灰状、209は光沢のある自然釉である。210は口縁が細くつまみ出されたような形を呈し、やや内湾する布痕土器である。こうした土器の中には、法量を規格化するため型木に目安となる沈線を彫っていた可能性が指摘されており、こうした沈線がポジティブ化したものとしてこの断面形を説明することは不可能であろうか。

A－SA06（6号竪穴住居跡） 第44・46図

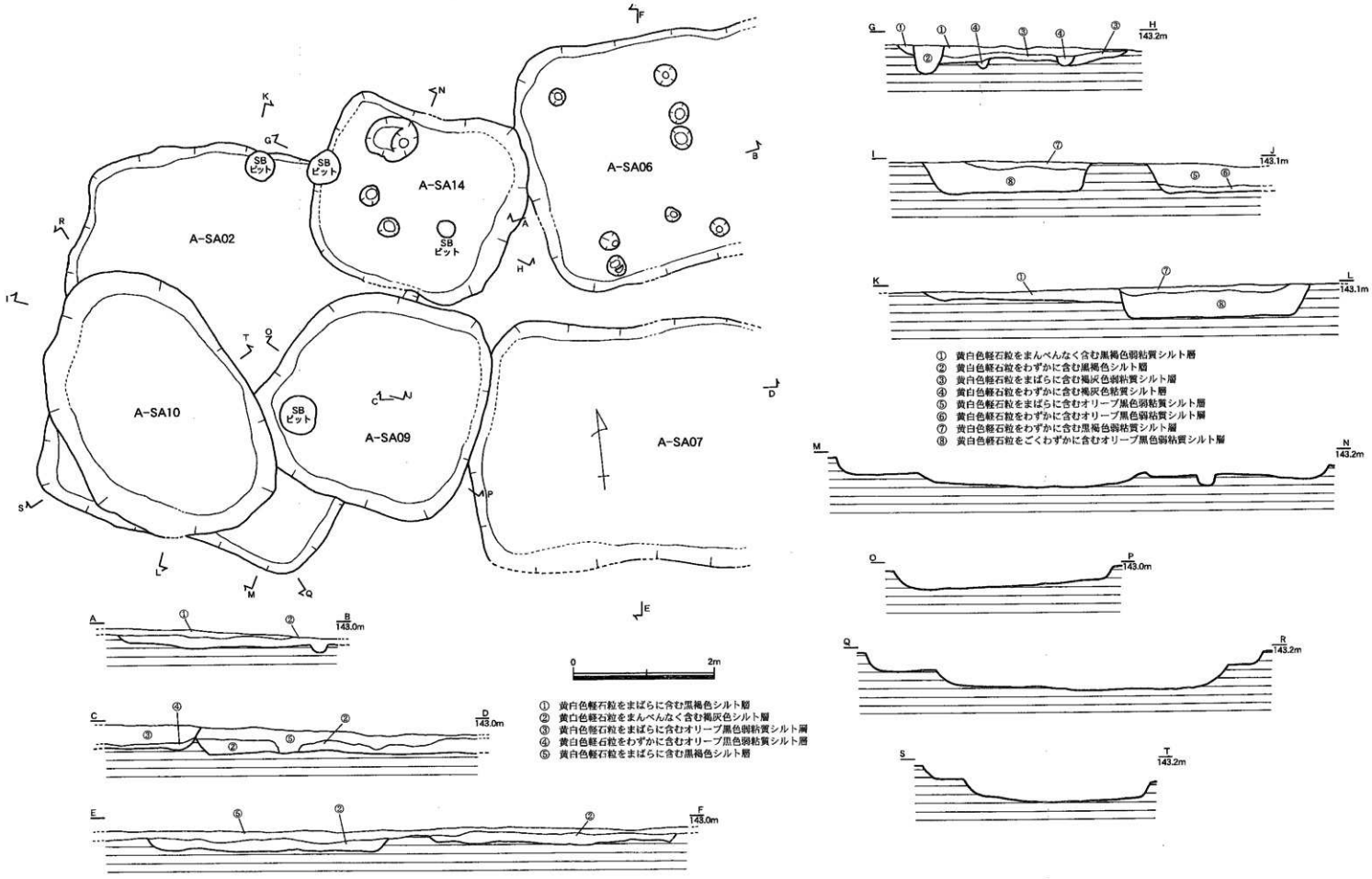
A－SA14に切られた住居跡で長方形プランを呈していたと思われるが、東半部はトレンチによって欠損している。残存部の一辺は約3.6m、検出面からの深さは約0.2mを計る。南北各々の壁際で対になった柱穴を検出している。遺物は床面から土師質土器の坏(211)、下層より土師質の皿(213)や坏(212)、須恵



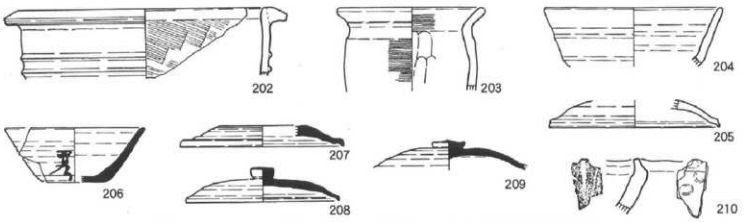
第42図　A－SA04(4号竪穴住居跡)実測図



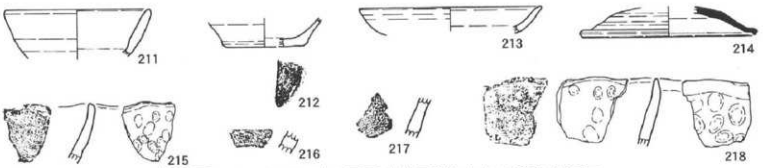
第43図　A－SA05(5号竪穴住居跡)実測図



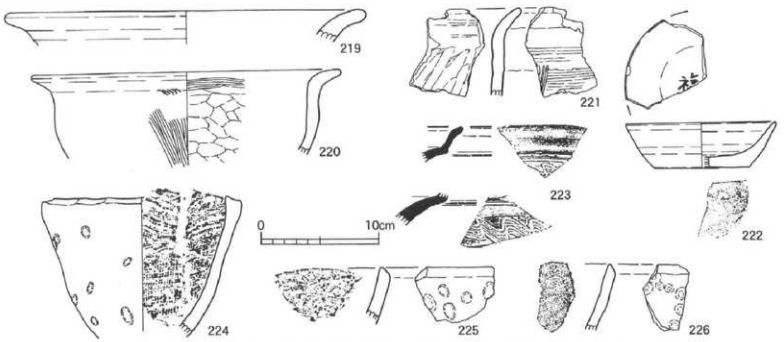
第44図　A－S A02･06･07･09･10･14(2・6・7・9・10・14号竪穴住居跡)実測図



第45図　A－SA02(2号竪穴住居跡)内出土遺物実測図



第46図　A－SA06(6号竪穴住居跡)内出土遺物実測図

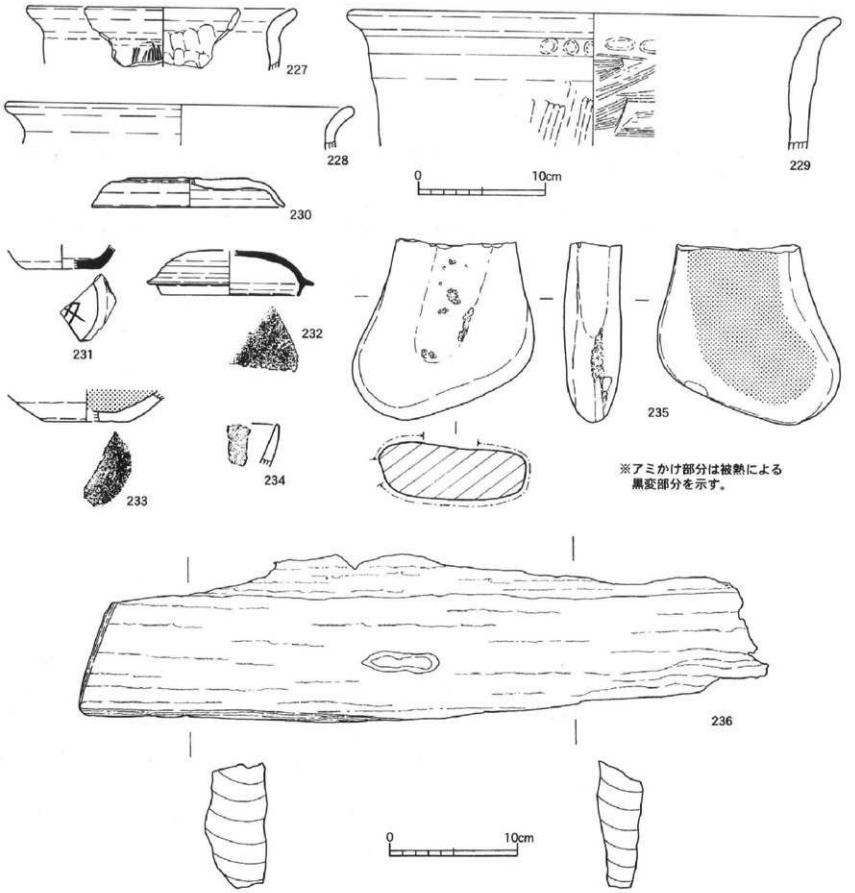


第47図　A－SA07(7号竪穴住居跡)内出土遺物実測図

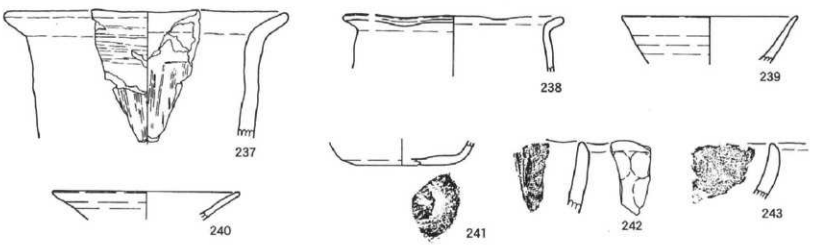
器の坏蓋(214)などが出土したほか、布痕土器(215～218)を複数確認している。213は手持ちケズリの可能性がある皿である。214は口縁断面がにぶい三角形を呈し、外器面は口縁部手前で強く屈曲する。215と218は波状口縁で、218の内器面には布目がみとめられない。216はかなり硬質な土器で、胎土は須恵器に類似する。

A－SA07（7号竪穴住居跡）　第44・47図

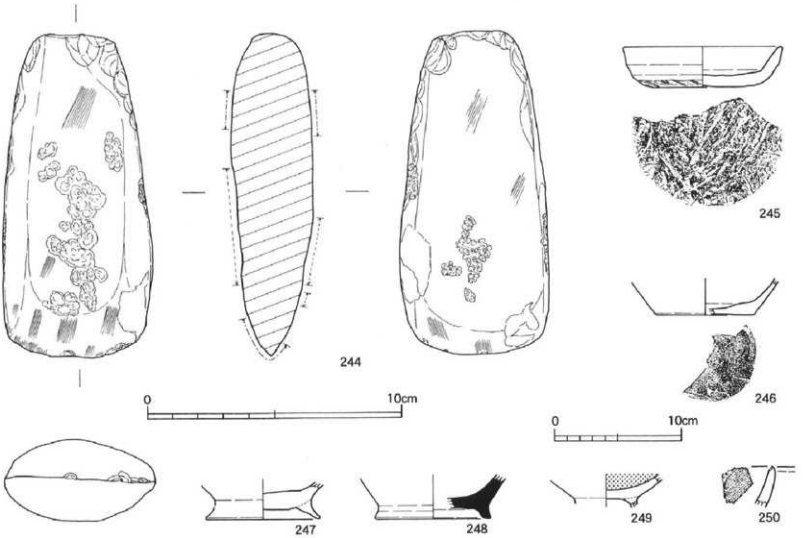
A－SA09に切られた住居跡である。プラン東端が不明であるが長方形の住居跡と考えられ、短軸約3.6m、床面までの深さ約0.2mを計る。埋土の状況からA－SA06と近い時期の住居跡と考えている。この住居跡でも柱穴は南西部の壁際で検出した1個のみである。遺物は床面ないし下層から、土師質土器の甕(219・221)、鉢(220)、坏身(222)、須恵器の甕(223)、布痕土器(224～226)が出土している。222は口径と底径の差が小さく器高も低い坏身で、底部は切り離し後に工具ナデが施されている。内面見込には線刻された「福」の字がみとめられる。223は複合口縁となる大甕で、外器面には櫛描波状文がみとめられる。布痕土器のうち、224にはヘラ状工具による切り取りの痕跡が明瞭に残っており、これによって口唇部断面



第48図　A－S A09(９号竪穴住居跡)内出土遺物実測図



第49図　A－S A14(14号竪穴住居跡)内出土遺物実測図



第50図　A－SA10(10号竪穴住居跡)内出土遺物実測図

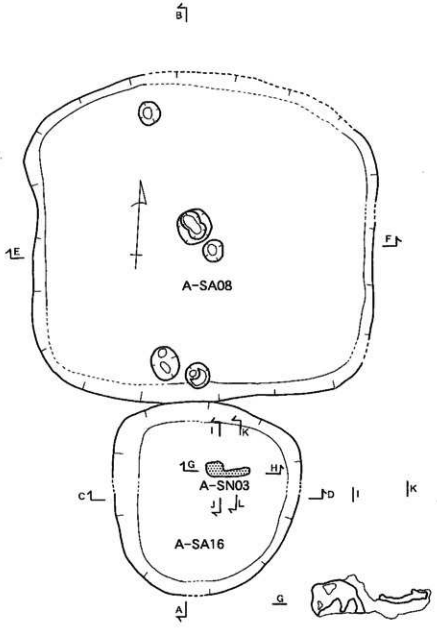
はM字状を呈している。目の粗い布が用いられており、成形の際に引っ張られて布目が伸びたような痕跡がみとめられる。225・226の口縁断面はややにぶい三角形を呈す。

A－SA09（9号竪穴住居跡）　第44・48図

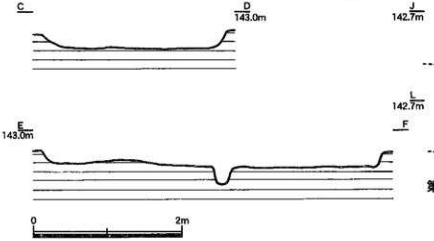
A－SA02・07に後出し、A－SA10に先行する住居跡で、隅丸方形状のプランを呈す。一辺は約3.0mで、検出面から床面までは約0.3mほどである。住居跡としては小型で土坑の可能性も残されるが、出土遺物はかなり豊富である。口縁部がゆるやかに外反する土師質土器の甕(227～229)には、大中小のバリエーションがある。器壁は基本的に均一であるが、229は口縁下部がやや肥厚している。230は口縁部が下方に長く屈曲する坏蓋である。233は黒色土器の坏で、内器面はもとより外面体部からヘラ切り後の底部までミガキが施されている。231は須恵器の坏身で、底部に「中」ないし「由」と判読できる線刻がみとめられる。232は坏蓋で、長く伸びたかえりは口縁端部よりも下方へ伸びており、天井部は丸みを帯びてやや突出している。つまみはなく、体部上半にはケズリの痕跡がみとめられる。また、内器面の天井部にヘラ記号の可能性がある工具痕が残っている。234は布痕土器で、口縁断面は鋭い三角形を呈す。236は面取りされた板材で、建築部材の可能性もある。235は磨石で表面は火熱を受けて黒変している。

A－SA10（10号竪穴住居跡）　第44・50図

A－SA02・09を切る隅丸長方形もしくは長楕円形状の住居跡である。長軸約4.2m、短軸約2.6mで、床面までの深さは約0.5mを計る。プランから考える限りこの遺構も土坑の可能性をはらんでいるが、同時期の土坑の規模と比較するとかなり大型であるため、ここでは住居跡として扱った。244は両刃の磨製石斧で、側縁部は敲打され両面に擦痕がみとめられる。また、先端部は使用による刃こぼれがみられる。245は土師質土器の皿で、底部には切り離し後に施した粗い手持ちケズリがみとめられる。246はヘラ切り後に工具ナデを施した坏身である。247は体部底の厚い高台付塊で、外へ張り出した高台は断面三角形を呈している。高台内は切り離し後にナデられており、高台際は強いナデによって凹線状にくぼんでいる。



第51図　A－SA08･16(8･16号竪穴住居跡)実測図



第52図　A－SN03(3号カマド状遺構)実測図

※注記は、上の土層断面図に付記

248は須恵器の高台付坏で、体部下端に肉厚の高台がつく。高台内は247同様にナデ調整で、高台際には凹線状のくぼみがみとめられる。249は黒色土器の台付皿で、内器面は縦方向のミガキである。高台は欠損しているが、高台内は丁寧なナデが施されている。250は口縁断面がにぶい三角形を呈す布痕土器である。

A－SA14（14号竪穴住居跡） 第44・49図

A－SA02・06を切る方形プランの住居跡である。一辺は約2.6～3.0mで、床面までの深さは約0.3mほどである。遺物は柱穴内からの出土を含め、土師質土器のみを確認している。237は口縁屈曲部がやや肥厚した甕、238は口縁部が波状をなす甕である。239は体部が真っ直ぐに開き、241は底部下端が丸みを帯びた坏身である。口縁が多少いびつにねじれた240は、皿形の器形を呈すと思われる。242・243は布痕土器で、242には布がずれた痕跡がみとめられ、243は体部が内湾して丸みを帯びている。

A－SA08（8号竪穴住居跡） 第51・53図

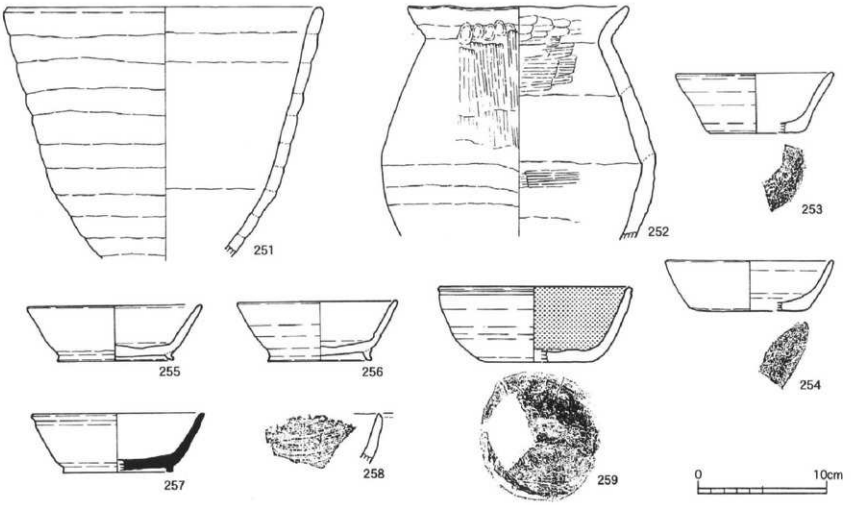
今回検出した住居跡の中で最も東側に位置しており、A－SA16を切っている。プランは隅丸方形状で、一辺は約4.4～4.6m、検出面から床面までは約0.3mほどである。プランの中央と南北の壁際で4個の柱穴を確認している。出土遺物としては、土師質土器の甕、坏身、高台付坏、須恵器の高台付坏、黒色土器の椀、布痕土器がある。251は輪積痕が明瞭に残る甕で、内・外器面ともナデ調整である。252は口縁が外反し、体部下半にかけてふくらみをもつ甕で、体部下半には251同様輪積痕が明瞭に残っている。調整は外器面上半が縦方向のケズリで、頸部には指頭痕がみとめられる。内器面は横方向のナデ及びハケ目調整である。251・252とも他の遺構及び包含層からの出土遺物の中には類似するものがないため、時期的位置付けについては判然としない。坏身は2点出土しており、253は器高が高く体部中ほどで屈曲している。254は口径・底径の差がない器高の低い坏である。255・256は口径と底径の差があまりなく、器高も低い高台付坏である。2点とも体部はやや丸みを帯びながら真っ直ぐ立ち上がり、内器面の体部下端にはにぶい稜線が入る。なお、器壁は口縁から底部までほぼ均一である。高台は低く角張ったつくりで、体部直下に貼り付けられている。高台内は255が高台際のみのナデ、256は全面丁寧なナデが施されている。257は255・256にかなり類似した須恵器の高台付坏である。口縁部下位が回線状にくぼむのは2点と異なるが、基本的な器形・調整はほとんど同一である。258は口縁断面がにぶい三角形を呈す布痕土器である。259は黒色土器の椀で、ロクロケズリの後に丁寧なミガキが施され、底部も切り離しの痕跡が丁寧にナデ消されている。薄手で均一な器壁は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁下位には浅い凹線を巡らせている。その成形・調整ともに他の出土遺物に類例を求めることができず、山本信夫氏より銅器などを模している可能性が指摘された問題資料である。

A－SA16（16号竪穴住居跡） 第51・52・54図

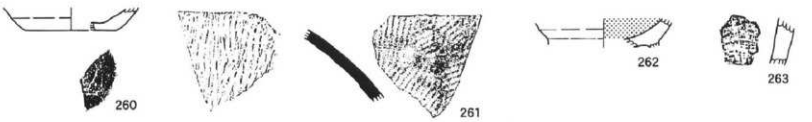
A－SA08に切られた隅丸方形状の小型住居跡である。一辺は約2.6mで、床面までの深さは約0.2mを計る。プランの中央北側寄りの位置で、床面からわずかに浮いた状態の焼土と火熱によって赤変した粘質土ブロックを検出している。出土位置に問題があるが、その形状などからカマド状遺構（A－SN03：3号カマド状遺構）の可能性を考えている。260は土師質土器の坏身で、内面見込と底部にススが付着している。261は須恵器甕の胴部で、外器面は格子目のち平行タタキ、内器面は同心円のち平行当て具痕がみとめられる。262は黒色土器の高台付塊で、高台内には丁寧なナデが施されている。258は布痕土器で、やや目の粗い布が用いられている。

A－SA13（13号竪穴住居跡） 第55・56・57図

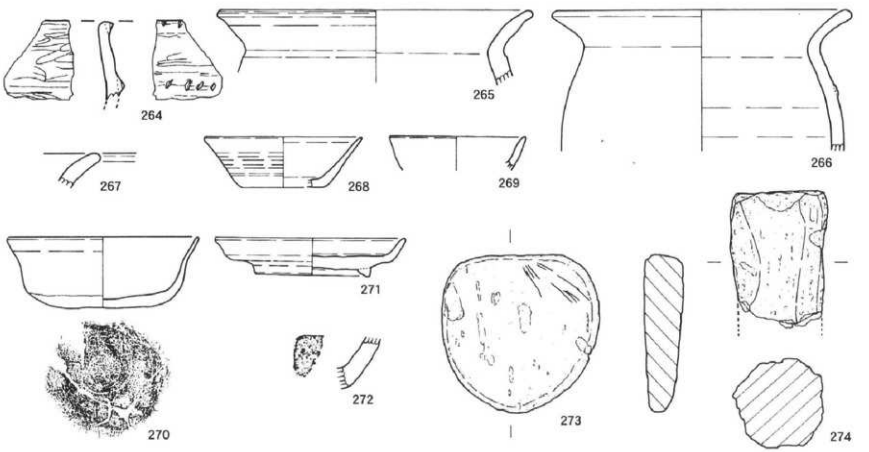
最も北側で検出した住居跡で、平面プランはやや形の崩れた隅丸方形状を呈している。一辺は約2.6～2.8mで、検出面から床面までは約0.2mほどである。この住居跡では南北壁際で3個の柱穴を検出したほか、



第53図　A－S A08(8号竪穴住居跡)内出土遺物実測図

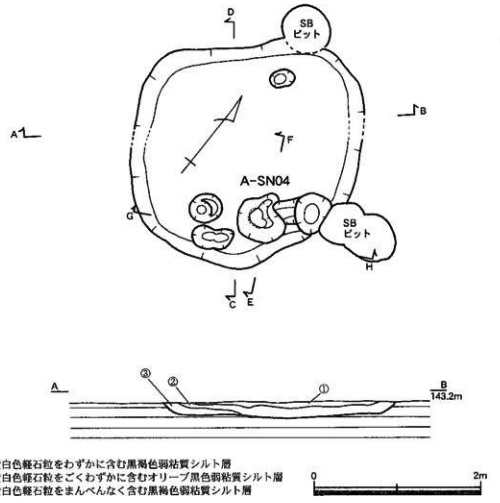


第54図　A－S A16(16号竪穴住居跡)内出土遺物実測図

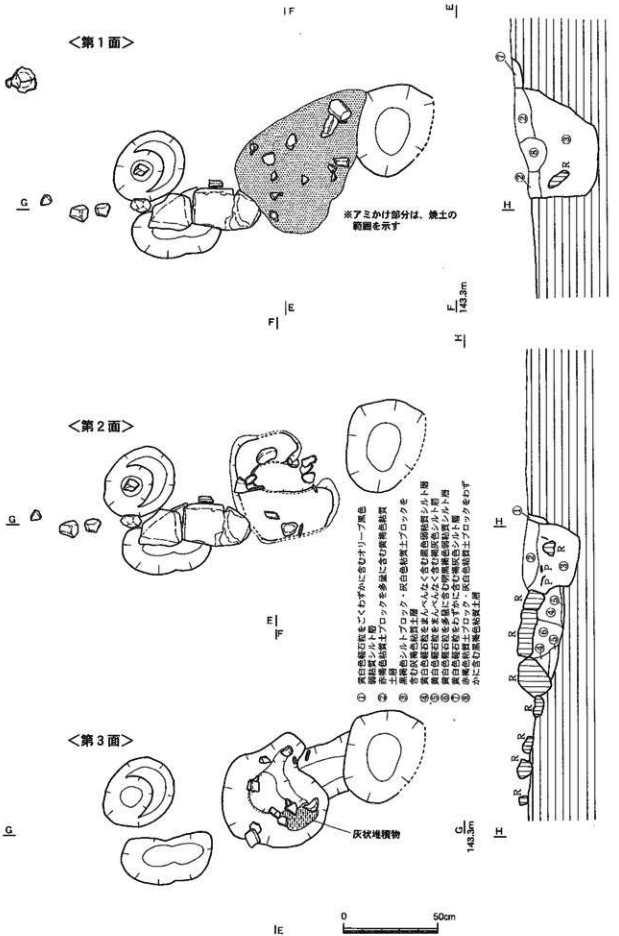


第55図　A－S A13(13号竪穴住居跡)内出土遺物実測図

南東の壁に接するように出土したA－SN04(4号カマド状遺構)を確認している。このカマド状遺構は3個のピットを縦列に配したような形状で、中央のピットの上部には粘質土を馬蹄形に固めた燃焼部とみられる粘土塊が遺存していた。また、これに連なって住居南壁に接するピットの上面には面取りした板状の軽石が直線的に並べられていたことから、煙道的な役割を想定した。さらに、燃焼部を挟んだ一方のピットは、溝状の落ち込みで燃焼部と連結しており、灰掻き口のような機能が考えられる。遺物としては、カマド状遺構に伴って土師質土器の甕(266・267)や坏身(269)が出土しているほか、住居埋土中でも土師質土器の甕、高台付皿、坏身、塊、支柱とみられる軽石製品などがみとめられた。264は口縁部と胴部に二条の刻目突帯が巡る縄文時代晩期の甕である。胴部の断面形態は「く」の字形を呈し、調整は内・外器面とも工具ナデである。突帯部の刻目は、細かくてやや深めの工具刻みである。周辺包含層からの混入物とみられる。265・266は土師質土器の甕で、ともに口縁部は強く外反しているが、265は頸部付近がわずかに肥厚しており、内器面屈曲部にはにぶい稜線が残る。268は体部がほぼストレートに立ち上がる坏身であるが、器高はやや低めである。269は体部がわずかに内湾する坏身である。270は胴部の上半に屈曲部を有する丸底の椀である。底部は切り離し後にヨコケズリし、さらにその痕跡をナデ消している。273は扁平な軽石製品で、表面に金属器の擦痕が数条みとめられる。274は面取りされた軽石製品で、火熱を受けて局部的に黄赤色に変色していることから、カマドの支柱として使用されていたと考えられる。



第56図　A－SA13(13号竪穴住居跡)実測図



第57図　A－S N04（4号カマド状遺構）実測図

[掘立柱建物跡]

今回は、竪穴住居跡群とかなり近い時期の掘立柱建物跡を９棟確認している。これらは調査区北西部を中心に分布しているが、同時期の柱穴は調査区全域で検出されており、周辺地形なども考慮すると、当該期の遺跡の広がりは、今回の調査対象区域から調査区西側にのびる低位段丘面一帯まで及ぶ可能性がある。

Ａ－ＳＢ０１（１号掘立柱建物跡）　第58・61図

調査区西端部で検出した東西棟で、主軸はＮ－80° 30′ －Ｅである。唯一の底付建物で、北・西の２面に底が付く。身舎の規模は梁間３間(約4.6m)、桁行３間(約7.0m)で、庇と身舎の間隔は北側が約1.4m、西側が約1.0mである。身舎・庇ともに柱穴は円形ないし楕円形を呈し、直径は40～60cm、深さは20～30cmである。なお、身舎の一部では柱穴の切り合いもみとめられる。遺物は身舎を構成する柱穴の埋土上層から、器壁は均一で口縁は緩やかに外反し、口唇部がわずかに玉縁状を呈す上師質土器の甕(275)と、体部下端にヨコケズリの痕跡が残る薄手の坏身(276)が出土している。

Ａ－ＳＢ０２（２号掘立柱建物跡）　第58・62図

Ａ－ＳＡ01・12を切る東西棟の建物で、主軸はＮ－87° 30′ －Ｗを指す。規模は梁間２間(約4.0m)、桁行３間(約5.6m)で柱穴はほぼ円形を呈しており、直径40～60cm、深さ15～60cmを計る。なお、この建物でも一部に柱穴の切り合いがみとめられる。主軸の向きからＡ－ＳＢ01と近い時期の建物であると思われる。柱穴埋土中からは、上師質土器や須恵器、黒色土器、布痕土器など多数の遺物が出土している。上師質の坏身には、器高が低く体部がストレートに立ち上がるもの(277)、底部が小型化し体部がラッパ状に開くもの(278)、体部下端がわずかに突き出るタイプのもの(279)などがある。また、277では体部から底部にかけて、282では体部下端に「｜」状の墨書がみとめられる。281はヘラ切り離しの皿、283は扁平なボタン状つまみが付く坏蓋で、口縁肥厚部はにぶい三角形を呈し、天井部はほぼ平らである。須恵器の坏蓋である284はつまみなしで、口縁肥厚部はしっかりとした断面三角形である。285は内・外器面とも丁寧なミガキが施された黒色土器の坏身で、小ぶりな底部から体部が内湾しながら立ち上がっている。286は高台付皿とみられる黒色土器で、内器面には光沢がある。布痕土器には口縁断面がにぶいもの(287・289)と鋭いもの(290)がある。また、布目から判断すると、細かくしっかりした織りのものが多用されているが、一部粗い布目のもの(293)もみとめられる。

Ａ－ＳＢ０３（３号掘立柱建物跡）　第59図

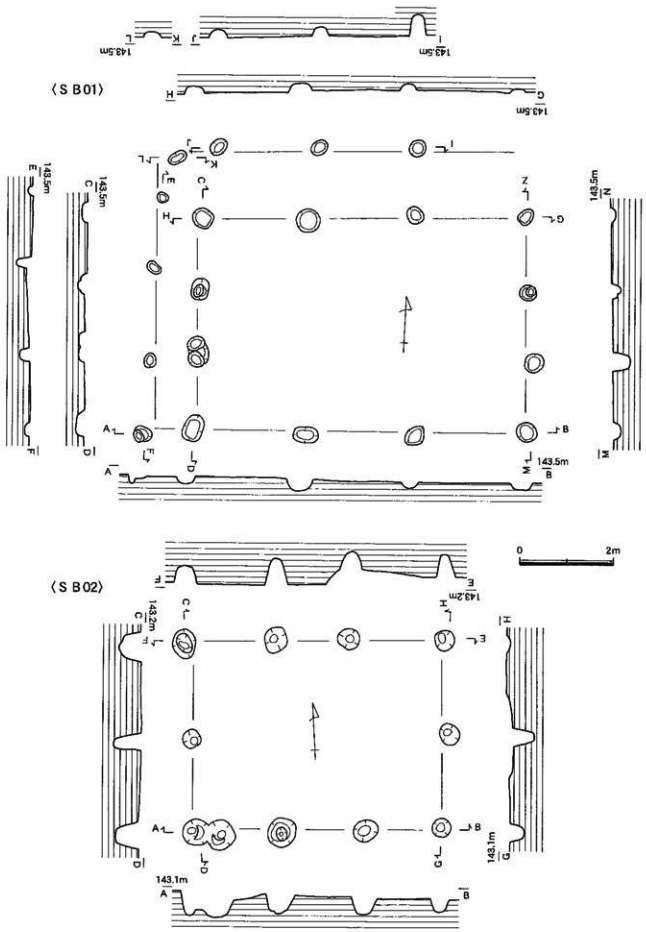
Ａ－ＳＢ01と切り合い関係にある東西棟の建物で、主軸方向はＮ－81° 30′ －Ｗである。規模は梁間２間(約3.6m)、桁行４間(約6.0m)で、直径20～30cm、深さ15～40cm程度の小ぶりな柱穴が大半を占める。柱穴中からの出土遺物がないため、Ａ－ＳＢ01との前後関係は不明である。

Ａ－ＳＢ０４（４号掘立柱建物跡）　第59図

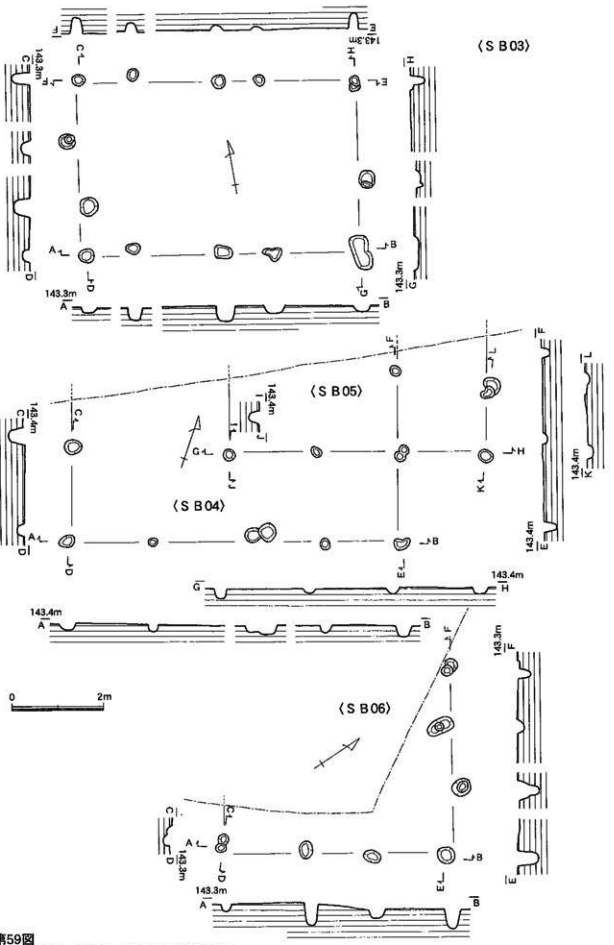
Ａ－ＳＢ01北側の調査区際で検出した東西棟の建物で、Ａ－ＳＢ05と切り合い関係にある。主軸方向はＮ－70° 30′ －Ｅである。規模は梁間２間(約3.8m)以上、桁行４間(約7.2m)で、柱穴は直径20～40cm、深さ20～30cmを計る。北側が調査区外へと続くため全容は不明である。柱穴中からの出土遺物はなかった。

Ａ－ＳＢ０５（５号掘立柱建物跡）　第59図

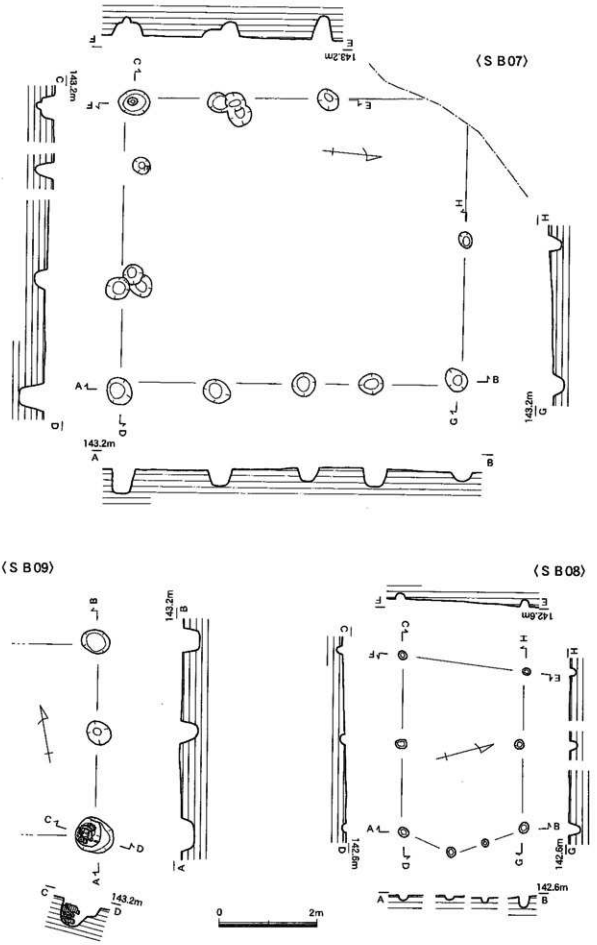
Ａ－ＳＢ05と切り合い関係にある東西棟の建物で、主軸方向はＳＢ05とほぼ同じＮ－70° －Ｅであるが、検出した範囲が限られるため、疑義がもたれる。規模は梁間１間(約1.6m)以上、桁行３間(約5.7m)で、ほぼ円形の柱穴が大半を占める。柱穴の直径は20～40cm、深さ10～30cmを計る。調査区外へと伸びるため建物としての認定も含め、全容は不明である。出土遺物はない。



第58図　A－S B01･02(1・2号掘立柱建物跡)実測図



第59図
A－S B03～06（3～6号掘立柱建物跡）
実測図



第60図　A－S B07～09(7～9号掘立柱建物跡)実測図

A－SB06（6号掘立柱建物跡）　第59・63図

調査区北西角で検出した建物で、調査区外へ広がるため南北棟・東西棟の別は不明である。東西の柱穴列でみた場合の主軸はN－33°－E、南北の場合がN－59°30′－Eを指す。規模は南北3間(約4.2m)以上、東西3間(約5.0m)で、柱穴は直径20～40cm、深さ20～50cmである。柱穴中より出土した須恵器の高台付坏(294)は、つくりの悪い高台が体部直下のやや内側に付き、坏部は箱形を呈している。高台内は高台際を中心に切り離し後のナデ調整が施されているため、浅くくぼんでいる。

A－SB07（7号掘立柱建物跡）　第60・64図

調査区北側で検出した南北棟建物で、主軸の方向はN－5°30′－Wである。規模は梁間2間(約6.0m)、桁行4間(約7.0m)で、ほぼ円形の大型柱穴が大半を占める。柱穴の直径は40～60cm、深さ20～60cmを計る。北西角の柱穴は調査区外のため未検出である。遺物は土師質土器の甕、坏身、高台付塊、布痕土器がある。297はロクロ痕が明瞭に残る高台付塊で、方形のしっかりした高台が付く。高台内は丁寧なナデが施され、最付にはヘラ状工具による刻目がみとめられる。298は波状口縁になる布痕土器で、切り取りの角度が浅いため口縁断面は三角形を呈さない。なお、内器面には布目がみられない。299・300は粗い布目が残る土器で、同一個体とみられる。また、293の布目とも非常によく似ている。

A－SB08（8号掘立柱建物跡）　第60図

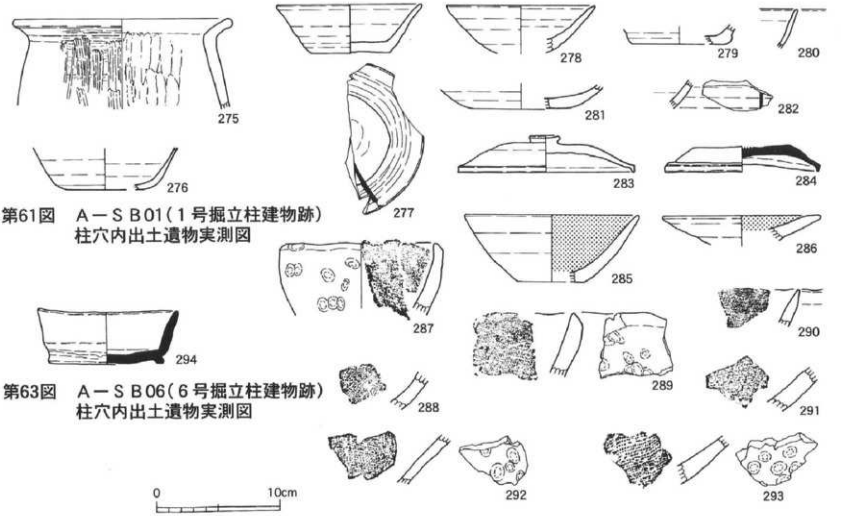
唯一調査区東側で検出した建物で、主軸がN－75°－Wを指す東西棟である。規模は梁間2間(約2.4m)、桁行2間(約3.2m)で、直径・深さともに20cm前後の小ぶりな柱穴によって構成される。なお、東側の梁間中央の柱穴は棟持ち柱状に突出している。柱穴に伴う遺物は確認されなかった。

A－SB09（9号掘立柱建物跡）　第60図

竪穴住居群西側で検出した3個の柱穴列で、建物跡として認定できるか疑わしいが、一部に根固めを意図したような白色粘土や軽石を伴う柱穴がみとめられることから、9号建物として掲載した。なお、この柱穴列の西側は、中世の遺構検出面で土層観察と地形確認を目的とする深掘りを行っており、その際に一連の柱穴を破壊した可能性もある。検出した柱穴の規模は直径50～80cm、深さ30～40を計り、これらに伴う出土遺物はない。

今回は掘立柱建物として確認できなかった柱穴からも多数の遺物が出土しているほか(第65・66図)、中世以降の遺構にも当該期の遺物(第72～76図)が多数混入していた。そこで、図化可能なものをここに掲載し、その中でも特筆すべきものを取り上げて簡単に触れておきたいと思う。

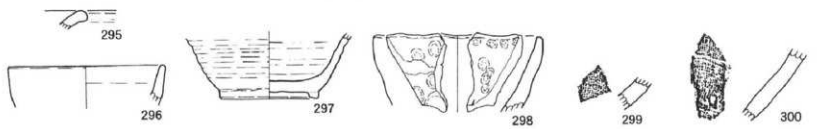
まず、柱穴内出土遺物について遺構の所在するエリアごとにみていくと、A－SA07周辺の柱穴からは、土師質土器の甕や鉢、坏身、坏蓋のほか、黒色土器、布痕土器などが出土している。土師質の甕は小片が多く、324のようにほぼ均一な器壁で口縁部が緩く外反するものが主流を占めるとみられるが、一部には口縁部が短く外反し、口唇部はナデによって浅くくぼむタイプ(304・321)が含まれるようである。今回は鉢形とした303については、傾きも含め検討の余地がある。坏身は、ある程度の器高を保ちながら体部がストレートに立ち上がるタイプ(307)と外反するタイプ(306・308・309)に分かれ、後者では口径の大小にバリエーションがみとめられる。なお、高台付坏の可能性がある306では、外器面体部に「ロ」の字の一部のような墨書がみられる。310は坏身の底部と思われるが、ヘラ切りながら断面形は高台状を呈しており、緑釉陶器の底部にも近似している。坏蓋(313・315)の天井部はともに丸みを帯びており、313には先端がやや退化したひし形のつまみが付く。また、口縁は肥厚部の三角形があまり発達せず、内器面の稜もにぶい。316は薄手で体部がストレートに開く黒色土器の塊、317は口縁端部が極端に内傾する布痕土器である。



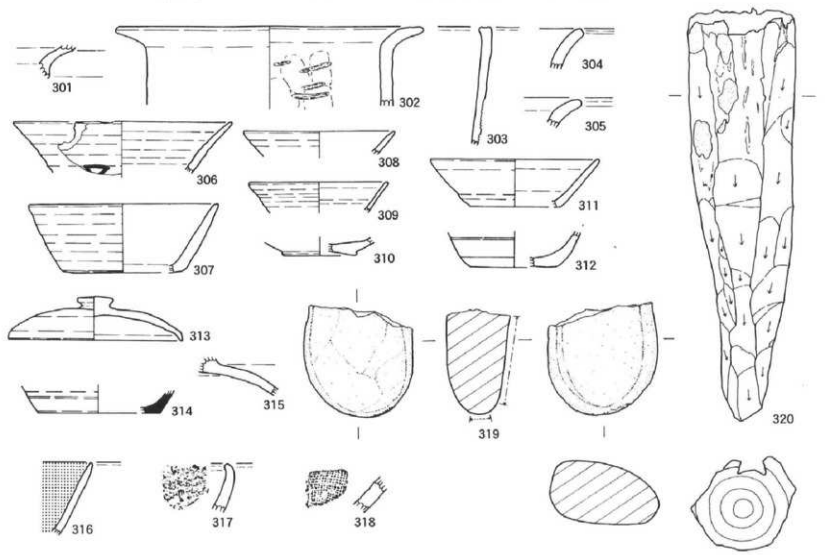
第61図　A－S B01(1号掘立柱建物跡)
柱穴内出土遺物実測図

第63図　A－S B06(6号掘立柱建物跡)
柱穴内出土遺物実測図

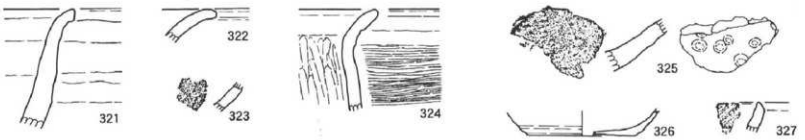
第62図　A－S B02(2号掘立柱建物跡)柱穴内出土遺物実測図



第64図　A－S B07(7号掘立柱建物跡)柱穴内出土遺物実測図

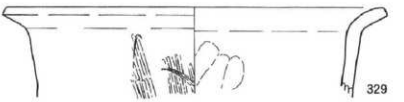


第65図　古代柱穴内出土遺物実測図①

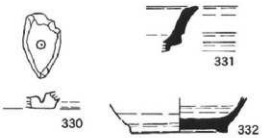


第66図　古代柱穴内出土遺物実測図②

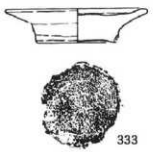
第67図　A－SC06(6号土坑)内出土遺物実測図



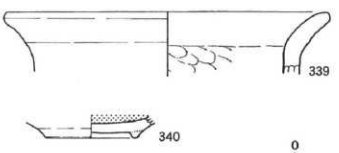
第68図　A－SC07(7号土坑)内出土遺物実測図



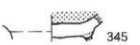
第69図　A－SW01(1号古代水田跡)
内出土遺物実測図



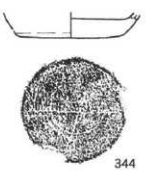
第70図　A－SW02(2号古代水田跡)
内出土遺物実測図



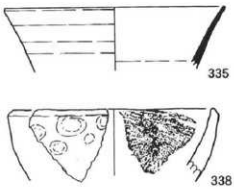
第72図　中世水田跡内出土遺物
実測図



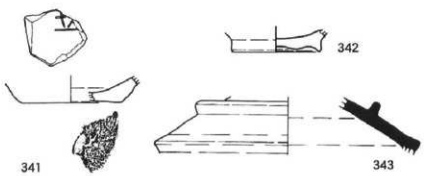
第75図　近世柱穴内出土
遺物実測図



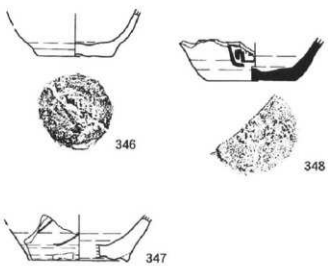
第74図　近世水田跡内
出土遺物実測図



第71図　古代水田跡内出土遺物実測図



第73図　近世道路状遺構内出土遺物実測図



第76図　近世溝状遺構内出土遺物実測図

調査区西部一帯の柱穴からは、口縁部が強く外反する土師質土器の甕(302)、底径と口径の差が小さく、低い器高で体部はストレートに立ち上がる坏身(311)、体部下端がヨコケズリによって丸みを帯びた坏身(312)などのほか、灰状の自然釉がみとめられる須恵器の坏身(314)が出土している。調査区東側の第Ⅴb層上面で確認した柱穴からは、柱根(320)が出土している。柱穴中に埋設される部分は念入りに削り込んで先端を尖らせた痕跡がうかがえる。一般的に有機質の残存しにくい火山灰土壌の中でこうした木製品が遺存しえたのは、調査区東側一帯が他の地点と比べ地下水の水位が高く、つねに高湿度の状態が保たれていたためと思われる。

中世以降の遺構から出土した遺物の中には、墨書や線刻などの文字資料がみられるものがある。341は土師質土器の坏身で、内面見込に「立」と釈読できるような線刻がみられる。344も坏身の底部で、ヘラ切り離し後にヘラ状工具で「×」と線刻されている。347は断面三角形の高台が体部直下に付く高台付塊で、外器面体部に「万」のような墨書がみとめられる。須恵器の坏身である348も外器面体部に墨書が残るが、判読はできなかった。342は小ぶりな高台が付き、高台際に強いナデによる凹線が残る高台付塊、343は型部と頸部の間に突帯が巡る壺とみられる。340・345は小さな断面三角形の高台が付く黒色土器、346は円盤高台状に肥厚した底部で、体部下端にヨコケズリがみとめられる坏身である。

[その他の遺構]

竪穴住居や掘立柱建物以外の当該期の遺構としては、炭化材を含む焼土遺構と用途不明の土坑群がある。これらは第Ⅴb層上面で検出し、埋土は基本的に掘立柱建物や柱穴群と同じ第Ⅳc・d層である。

A－SC01（1号土坑：焼土遺構）　第77図

G－7区で検出した一部不整の楕円形を呈した遺構である。長軸約1.5m、短軸約1.1m、深さ約0.2mを測る。床面中央のピットを覆うように埋土下層に炭化材がまとまって出土したほか、最上層では炭化粒・焼土粒・火熱を受けたアカホヤブロックが堆積していたことから、焼土遺構と位置付けた。用途は不明で、出土遺物もない。

A－SC02（2号土坑）　第77図

長軸両端が突出した六角形状のプランを呈した土坑で、H－8区で検出した。長軸は約0.8m、短軸は約0.6mで、深さは約0.1mと浅い。埋土は第Ⅳd層とほぼ同じである。遺物の出土はない。

A－SC03（3号土坑）　第77図

C－10区で検出したほぼ円形の土坑である。直径約0.6m、深さ約0.4mで、埋土は第Ⅳc層と第Ⅳd層の混土層である。床面は平坦で、断面形は箱型を呈す。出土遺物はない。

A－SC04（4号土坑）　第77図

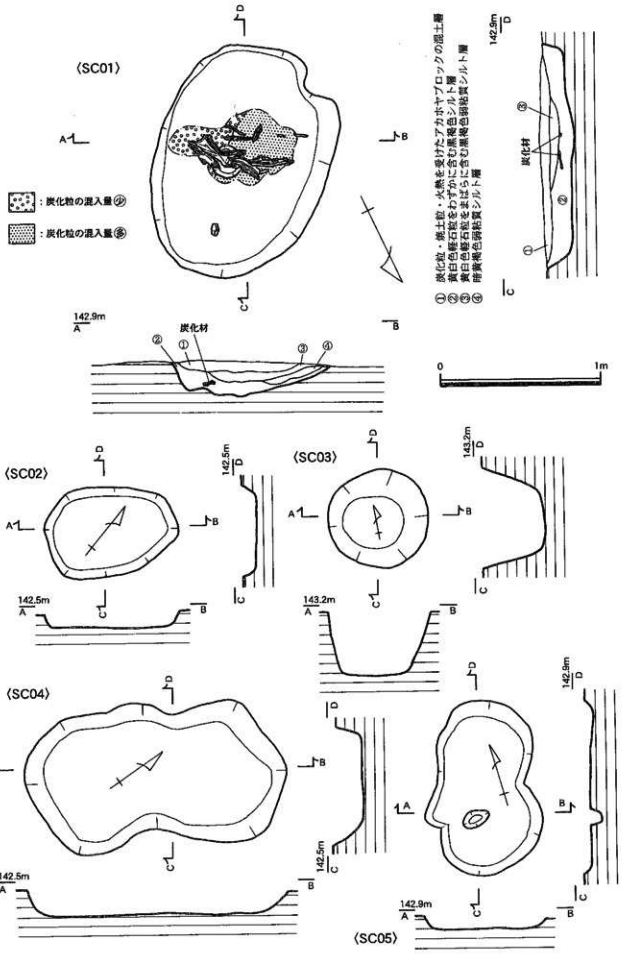
六角形の中央がくぼんだような不整形の土坑で、H－10区で検出した。長軸は約1.6m、短軸は約0.9mで、深さは約0.2m弱である。埋土は第Ⅳc層に近い。遺物の出土はない。

A－SC05（5号土坑）　第77図

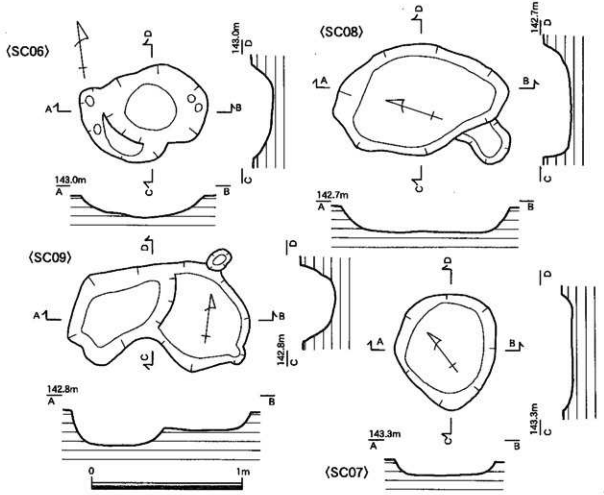
A－SC01のように床面中央に小ピットがみとめられる不整形土坑である。E－10区で検出し、長軸約1.1m、短軸約0.7m、深さ約0.1mを測る。埋土は第Ⅳc層とほぼ同じで、遺物はない。

A－SC06（6号土坑）　第67・78図

第Ⅳd層を埋土とする不整形土坑で、一部切り合いがみとめられる。長軸は約0.8m、短軸は約0.6mで、深さは約0.1mとかなり浅い。断面形はU字状を呈す。埋土中から縄文土器(328)が1点出土している。



第77図　A－S C01～05(1～5号土坑)実測図



第78図　A－SC06～09（6～9号土坑）実測図

これは外反した口縁部に刻目突帯が一条巡る甕で、調整は内・外器面ともヨコナデのち粗いミガキである。突帯部の刻目は大きく深い指頭刻みで、爪痕も残る。通常この時期の遺物を伴う土坑に比べ埋土のしまりが悪かったので、混入した遺物である可能性も考慮してとりあえずここに掲載した。E－10区で検出。

A－SC07（7号土坑）　第68・78図

D－10区で検出した不整楕円形の土坑である。長軸約0.8m、短軸約0.7m、深さ約0.1mで、埋土は第Ⅳc層である。埋土中から土師質土器の甕(329)が1点出土している。

A－SC08（8号土坑）　第78図

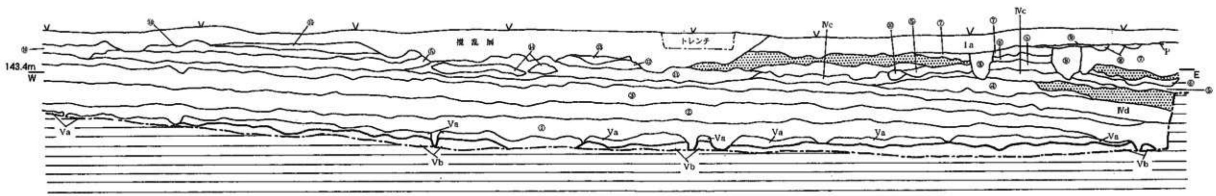
不整楕円形の土坑で、F－13区で検出した。長軸約1.2m、短軸約0.7m、深さ約0.2mで、埋土は第Ⅳd層である。出土遺物はない。

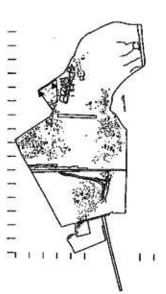
A－SC09（9号土坑）　第78図

F－14区で検出した不整形土坑で、2基の土坑が切り合っている。長軸約1.2m、短軸約0.6m、深さ約0.1～0.25mで、埋土は基本的に第Ⅳd層である。埋土からは2基の前後関係を判別することはできなかったが、かなり近い時期での切り合いだと思われる。遺物の出土はなかった。

［水田跡］　第69～71・79・80図

調査区北東部では、古代末～中世初頭に比定される水田跡を確認している。今回は砂礫層にパックされたような状態で出土した水田跡4面を確認するにとどまったが、遺構に隣接して設定した第8トレンチ

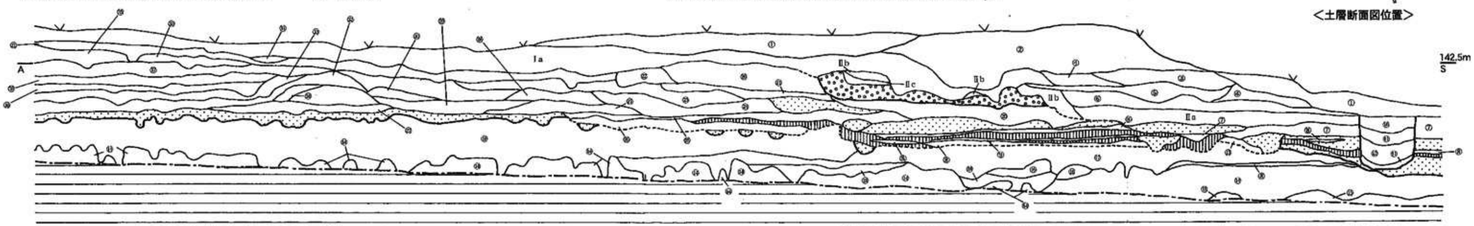


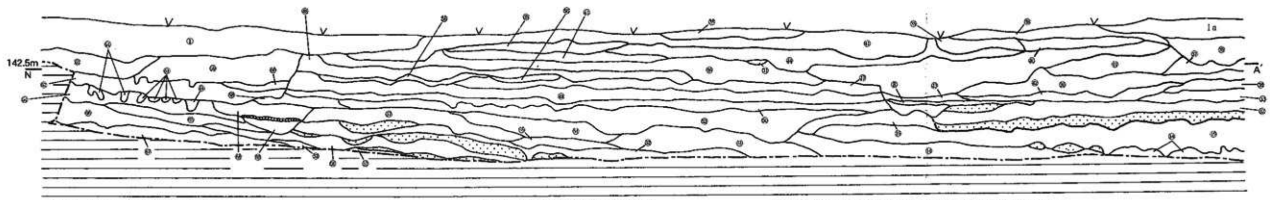


<土層断面図位置>

Ⅰa　白色軽石粒・黄橙色小礫を含む灰褐色砂質土層
Ⅳc　黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層(Kr-Ths含む)
　d　黄白色軽石粒をわずかに含むオリーブ黒色弱粘質シルト層
Ⅴa　黒色砂質土を含む黄白色軽石粒層(御池降下軽石層の漸移層)
　b　黄白色軽石粒層(御池降下軽石層：Kr-M)
①　黄白色軽石粒(中粒)を多量に含む黒色弱粘質シルト層
②　黄白色軽石粒(中粒)をまんべんなく含む黒色弱粘質シルト層
③　黄白色軽石粒(中粒)をまんべんなく含み、やや褐色がかった黒色弱粘質シルト層
④　黄白色軽石粒(中粒)を多量に含む黒色粘質シルト層
⑤　黄白色軽石粒(大粒)を多量に含む黒色弱粘質シルト層
⑥　黄白色軽石粒(細粒)をまばらに含む黒褐色シルト層
⑦　黄白色軽石粒(中粒)を多量に含む黒褐色弱粘質シルト層
⑧　灰オリーブ色砂質シルト層
⑨　赤化した⑭
⑩　砂粒を多量に含む⑨
⑪　白色軽石をまばらに、黄白色軽石粒をまんべんなく含み、やや褐色がかった黒色弱粘質シルト層
⑫　黄白色軽石粒をまんべんなく含む黒褐色弱粘質シルト層
⑬　黄白色軽石粒をごくわずかに含む黒褐色弱粘質シルト層
⑭　砂粒ブロックを所々に含む⑬
⑮　黄白色軽石粒をまばらに含む黒色弱粘質シルト層
⑯　黄白色軽石粒ブロックをまんべんなく含み、やや褐色がかった黒色弱粘質シルト層

（網点）：黄白色軽石粒・砂粒・黒色粘質ミルトの混土層





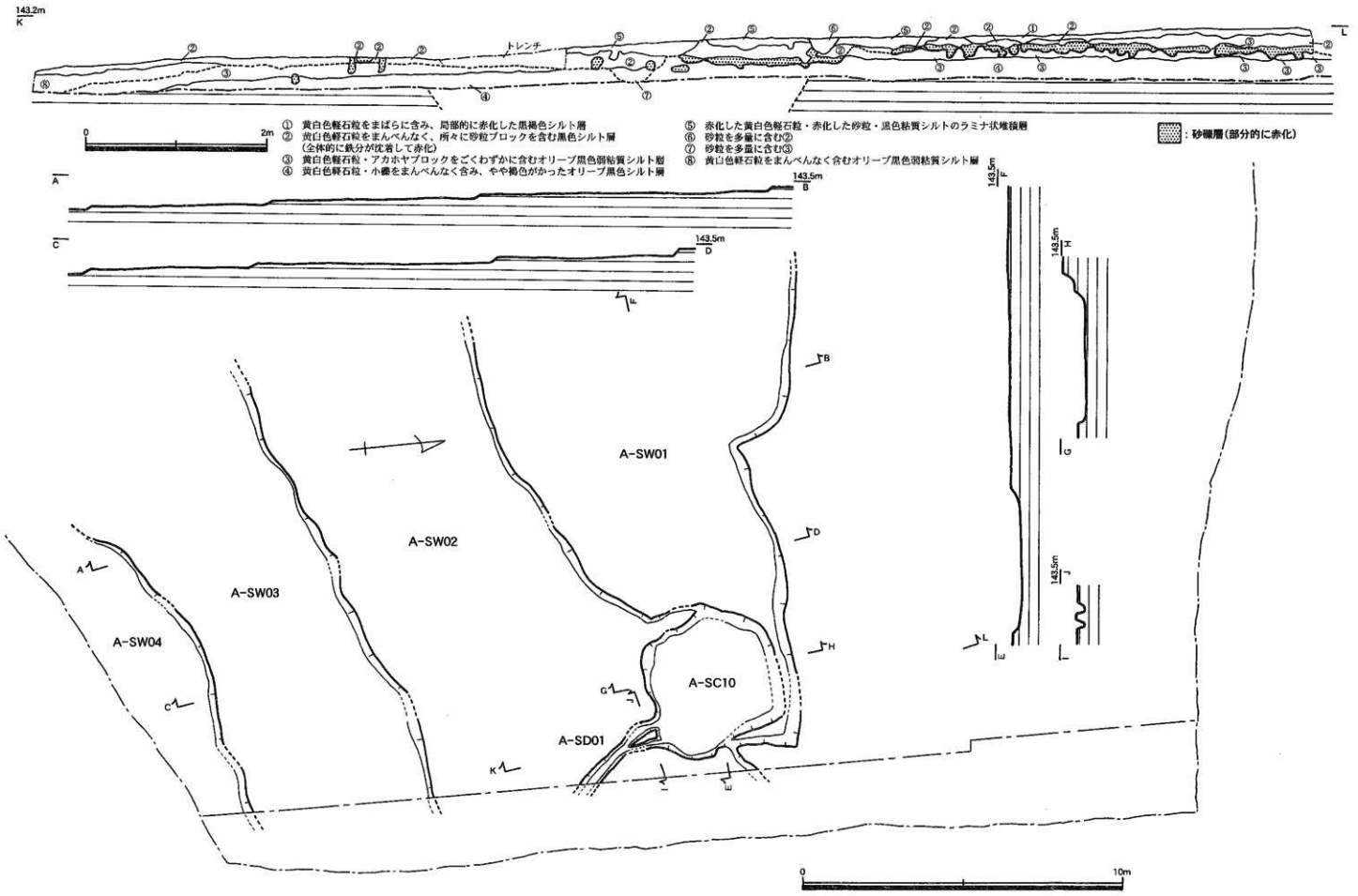
<土層断面図位置>

（白丸点）：白色軽石粒層(文明降下軽石層)
（点）：砂粒層
（縦線）：砂礫層

0　2m

Ⅰa　白色軽石粒・黄橙色小礫を含む灰褐色砂質土層
Ⅱa　白色軽石粒・小礫をまばらに含む褐灰色砂質土層
　b　白色軽石粒をまんべんなく含む灰黒色砂質土層
　c　白色粗粒火山灰ブロックを含むⅡb
①　盛土層
②　黄白色軽石粒(御池降下軽石の二次堆積層)
③　黄白色軽石粒をまばらに含み、やや黒みがかった褐灰色シルト層
④　黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色シルト層(全体的に硬化)
⑤　小礫・黄白色軽石粒をまばらに含み、やや赤化した褐灰色弱粘質シルト層
⑥　小礫・黄白色軽石粒をまばらに含む褐灰色弱粘質シルト層
⑦　小礫・黄白色軽石粒・白色軽石粒をまばらに含む灰黒色シルト層
⑧　小礫・黄白色軽石粒を含む黒色弱粘質シルト層
⑨　小礫をまばらに含む黒色弱粘質シルト層
⑩　白色軽石粒をまんべんなく含む灰オリーブ色砂質シルト層
⑪　黄橙色小礫・白色軽石粒をまんべんなく含む灰黒色シルト層
⑫　黄橙色小礫・白色軽石粒をまばらに含む灰黒色シルト層
⑬　砂礫をわずかに含む黒色弱粘質シルト層
⑭　小礫・砂粒ブロック・木本類植物遺体を所々に含む灰黒色弱粘質シルト層
⑮　小礫をまんべんなく含む黒色弱粘質シルト層
⑯　黄白色軽石粒を含む⑭
⑰　黄白色軽石粒・砂粒をまばらに含む黒色弱粘質シルト層
⑱　黄白色軽石粒・砂粒を多量に含む14
⑲　小礫・黄白色軽石粒を多量に、木本類植物遺体をわずかに含む黒色弱粘質シルト層
⑳　黄橙色小礫・黄白色軽石粒をまんべんなく含む褐灰色弱粘質シルト層
㉑　黄橙色小礫・黄白色軽石粒・アカホヤブロックを多量に含む明褐灰色シルト層
㉒　黄橙色小礫を多量に含む黒褐色シルト層
㉓　黄橙色小礫・黄白色軽石粒をまばらに含む砂粒層
㉔　黄橙色小礫・黄白色軽石粒をまんべんなく含む暗褐灰色シルト層
㉕　黄橙色小礫・黄白色軽石粒をわずかに含む暗褐灰色シルト層
㉖　黄橙色小礫・小礫をまんべんなく含む黒褐色砂質シルト層
㉗　黄白色軽石粒・砂礫・黒色粘質シルトブロックの混土層
㉘　黄白色軽石粒・砂粒を所々に含む黒色粘質シルト層
㉙　下部に小礫・砂粒を多量に含む黒褐色シルト層
㉚　黄白色軽石粒・砂粒の混土層
㉛　黒褐色シルトブロック
㉜　黄白色軽石粒をまばらに含む砂粒混黒色シルト層
㉝　黄白色軽石粒・砂粒をまばらに含む黒褐色シルト層
㉞　砂粒ブロックをまばらに含む黒褐色シルト層
㉟　黄白色軽石粒・砂粒・アカホヤの混土層
㊱　黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色シルト層
㊲　⑮と㉟の混土層
㊳　黄白色軽石粒・黒褐色シルト・アカホヤの混土層
㊴　黄白色軽石粒・白色軽石粒をわずかに含む灰黒色シルト層
㊵　黄白色軽石粒をまんべんなく含み、赤化した黒褐色弱粘質シルト層
㊶　青灰色小礫と砂粒の混土層
㊷　⑧と砂粒の混土層
㊸　下部が赤化した黄白色軽石粒・砂粒の混土層
㊹　黄白色軽石粒・砂粒を所々に含む黒褐色シルト層
㊺　黄白色軽石粒をわずかに含む黒褐色弱粘質シルト層
㊻　黄白色軽石粒・黒色弱粘質シルトブロックを多量に含む灰褐色シルト層
㊼　黄白色軽石粒・砂粒をまんべんなく含む黒色粘質シルト層
㊽　㊻と㊼の混土層
㊾　黄白色軽石粒をまんべんなく含む黒色弱粘質シルト層
㊿　黄白色軽石粒を多量に含む黒褐色弱粘質シルト層
(51)　黄白色軽石粒をまんべんなく含む黒褐色弱粘質シルト層
(52)　黄白色軽石粒・アカホヤブロックをまばらに含む黒色弱粘質シルト層
(53)　小礫・黄白色軽石粒をまばらに含み、やや灰色がかった黒色弱粘質シルト層
(54)　上部に硬化した黄白色軽石粒層を含む黒褐色シルト層
(55)　上部に砂粒層を含む㊾
(56)　黄白色軽石粒・砂粒・アカホヤ・黒褐色シルトの混土層
(57)　黄白色軽石粒をごくわずかに含む黒褐色弱粘質シルト層
(58)　黄白色軽石細粒・砂粒・黒褐色シルトの混土層
(59)　黄白色軽石粒をまばらに含む灰黒色シルト層
(60)　⑧と砂粒層のラミナ状堆積
(61)　二次シラス・黄白色軽石細粒・砂粒の混土層
(62)　二次シラス・黄白色軽石細粒・砂粒のラミナ状堆積
(63)　黄白色軽石粒・白色軽石粒をわずかに含む灰黒色シルト層
(64)　黄白色軽石粒をまばらに含む黒色弱粘質シルト層
(65)　(61)のブロックを所々に含む黒色弱粘質シルト層
(66)　二次シラスブロックを所々に含む黒色弱粘質シルト層
(67)　シラス(AT)の二次堆積層
(68)　小礫・黄白色軽石粒をまばらに含む黒褐色シルト層
(69)　(68)と小礫の混土層

第79図　古代竪穴住居跡・水田跡周辺土層断面図



第80図　A－S W01～04(1～4号古代水田跡)実測図

の断面観察とプラントオパール分析の結果を合わせて考えると、古代の早い段階から中世後半頃(文明)まで連綿と水田が営まれていたと推察される。ただし、この地点一帯では第８トレンチ東壁土層断面の北半部でみとめられるように、砂礫層はもとよりシラス(ＡＴ)、アカホヤ(Ａh)、御池降下軽石などの二次テフラ層の堆積が顕著で、遺跡北側の月野原台地から頻繁にこうした土が流入し、水田経営に影響を与えていたと考えられる。今回検出した水田も表面に赤化した砂礫層の堆積がみとめられ、当時の水田面に遺存していた足跡などにもこうした砂礫が詰まっていた。水田一区画の規模を把握するまでには至らなかったが、北側から南側へ向けて約５～10m幅の水田が約20cmの比高差で連なっている状況を確認することができた(第80図中土層断面図の破線部分)。砂礫堆積後も継続した耕作の影響を受けているため、明瞭な畦畔は検出できなかったが、断面で観察するとわずかに畦畔状に高まる箇所や水路状の落ち込みが確認できる。これらの水田に伴って、わずかに遺物の出土がみとめられる。須恵器には甕(331)や高坏の脚部(334)、壺(337)などのほか、高台断面形が三角形を呈す高台付坏(332)、体部外反しながら立ち上がる坏身(335・336)がある。土師質土器では内面見込に穿孔途中の穴が残る坏身(330)、底部が高台状に肥厚し非常に浅い受部がつく皿(333)がある。333は底部糸切り離しのため、中世段階の耕作に際して混入したと考えているが、当地点では中世初頭頃の陶磁器類もかなりまとまって出土しているので、中・近世編の中で改めてこの水田の位置付けも含めた検討を加えたいと思う。なお、この水田面の下部では、砂礫層と黒色土層が交互に堆積したＡ－ＳＣ10(10号土坑)を検出している。明確な用途は不明であるが、南端部に幅約50cmほどの小溝が連結しており、同レベルの周辺堆積土からもイネのプラントオパールが検出されていることから、水田経営に関連した遺構の可能性がある。

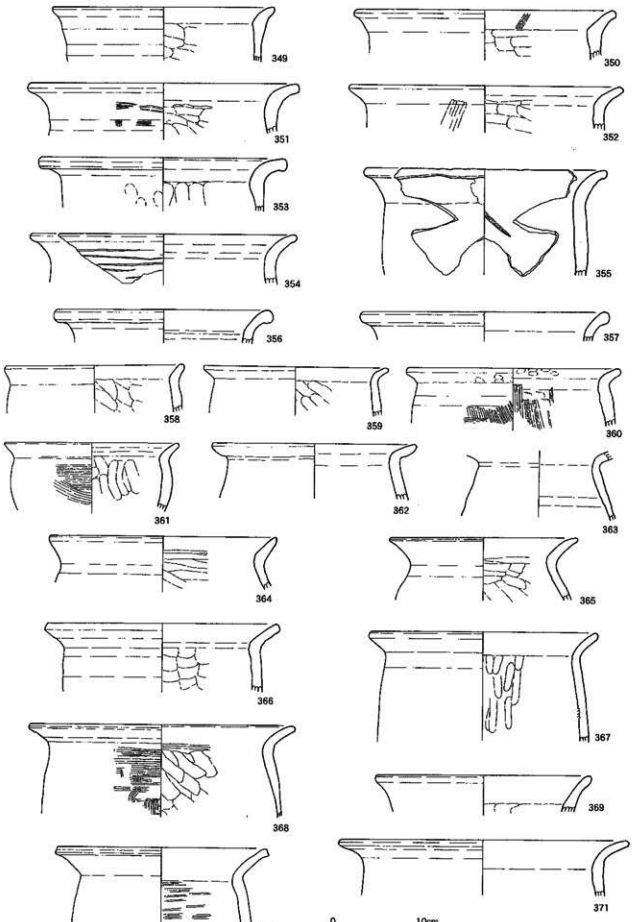
[包含層内出土遺物]

今回の調査で包含層内から出土した当該期遺物は、数量的にもバリエーション的にもかなりの数に上る。ここでは、これらの包含層内出土遺物を遺構内一括資料を中心とした編年作業を行う上での補助資料とするため、各種別ごとに説明を加え大まかなグルーピングを試みている。

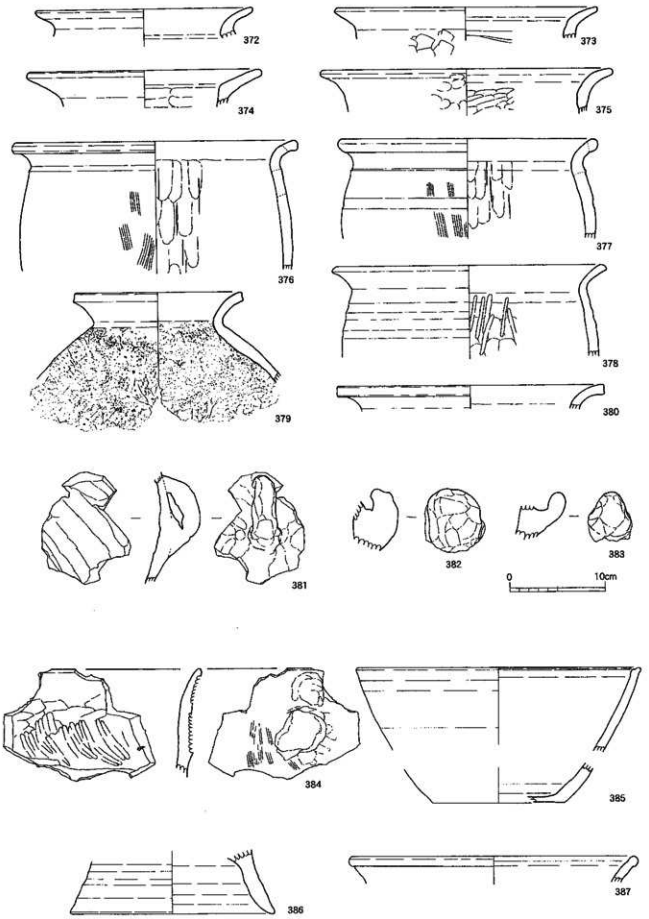
土師質土器　第81～85図

甕(349～380)は、胴部上半から口縁部にかけての破片が大半を占めているため、口径の大小に基づいて３類(Ⅰ類：口径20cm未満、Ⅱ類：口径20cm以上25cm未満、Ⅲ類：口径25cm以上)に分け、さらに器形や調整技法等により以下のように分類した。

甕Ⅰ類は口縁部から胴部にかけての形状で次のように細分されるが、器壁の厚みがほぼ均一な点や基本的な調整が内面ケズリ、外面ヨコナデである点は共通している。甕Ⅰａ類(361)の口縁部は短く、緩やかに外反する。胴部はふくらみをもつ短胴とみられ、屈曲部内面には明瞭な稜線が残る。また、外器面の調整には唯一ハケ目がみとめられる。甕Ⅰｂ類も口縁部は短く、直線的に開くタイプ(358)と外反するタイプ(359)がある。胴部はふくらみの弱い中胴を呈すと思われ、屈曲部内面の稜はかなりにぶい。甕Ⅰｃ類(363・365)は頸部がくびれ、長めの口縁は強く外反する。胴部はふくらみをもつ短胴ないし中胴を呈すと思われ、屈曲部内面の稜はほとんどみとめられない。なお、379は頸部がくびれ、口縁部は強く外反しており、口唇部にはナデによるくぼみがみとめられる。胴部は肩部を有するほど大きくふくらみ、屈曲部下位では器壁が肥厚している。外面は平行タタキ、内面には同心円の当具痕がみとめられる。須恵器の胎土と類似しており、特殊な器形として別に検討する余地がある。甕Ⅱ類には器形、器壁の厚み、器面調整の面においていくつかのバリエーションがみとめられる。甕Ⅱａ類(349)の口縁部はほとんど屈曲せず、わず



第81図　包含層内出土遺物(古代)実測図①



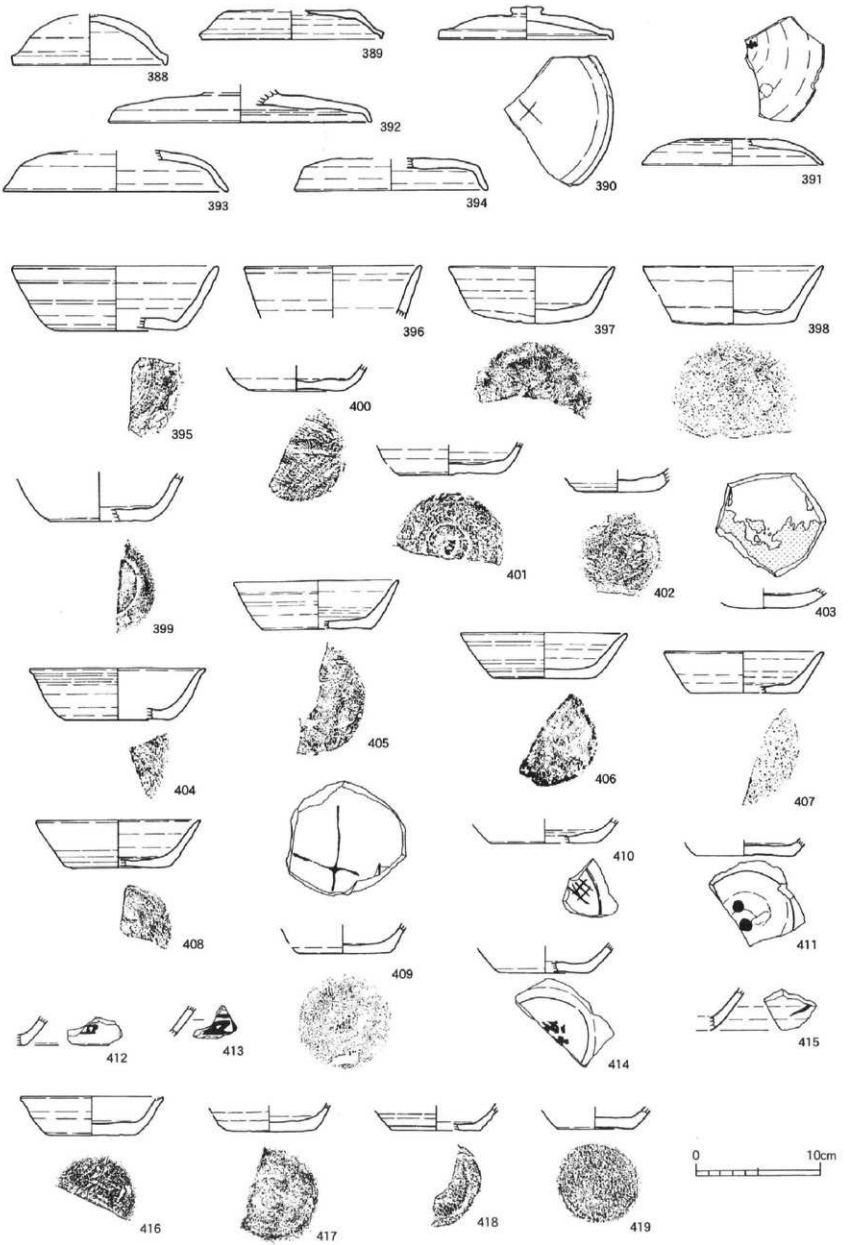
第82図　包含層内出土遺物(古代)実測図②

かに外反する。胴部はふくらみをもたない長胴とみられる。口縁は肥厚しており、内面には強い稜線が残る。調整は甕Ⅰ類と同様に内面ケズリ、外面ヨコナデである。甕Ⅱb類(356)の口縁部は短く外反し、口唇部は玉縁状を呈す。器壁は均一とみられ、屈曲部内面の稜はにぶい。調整はⅡa類と同じである。甕Ⅱc類(360)の口縁部も短く外反し、胴部はふくらみの弱い中胴を呈すと思われる。屈曲部内面の稜はかなりにぶく、器面調整は内外ともハケ目である。甕Ⅱd類は短めの口縁部が緩やかに外反し、胴部はふくらみのない長胴を呈すと思われる。屈曲部内面の稜はほとんどみとめられない。また、調整には両面ともナデのもの(362)と、ケズリを有するもの(372)がある。甕Ⅱe類(364)は口縁部がやや長くなり、直線的に開く。胴部はふくらみの少ない中胴とみられ、内面の稜は完全に消失している。調整はⅡa類と同じである。甕Ⅱf類(366・367・369)は長めの口縁部が緩やかに外反し、器壁はほぼ均一である。屈曲部内面の稜はにぶく、胴部はふくらみのない長胴を呈すと思われる。これも調整はⅡa類と同じである。なお、ハケ目調整で口唇部がくぼむもの(370)、口縁部がわずかに肥厚し、内面ににぶい稜を有するもの(374)も、このタイプに含まれる可能性がある。甕Ⅲ類は長胴形を呈するものが多く、度合に強弱があるが、基本的に外反するものが主勢を占める。甕Ⅲa類の口縁部は短く緩やかに外反し、胴部はふくらみをもたない長胴とみられる。甕Ⅱa類と同様に口縁部が肥厚し内面に強めの稜が残るもの(350)、器壁は均一で稜はにぶく、口縁もやや長くなったもの(351・352)がある。甕Ⅲb類の口縁部も外反し、口唇部は玉縁状を呈す。口縁部が肥厚し、内面屈曲部にはにぶく稜が残るもの(353)と、器壁がほぼ均一なもの(354・355・357)がある。胴部は長胴を呈すとみられる。甕Ⅲc類(376・377)の口縁部の特徴は甕Ⅲb類と類似しているが、胴部がふくらみの少ない中胴を呈し、器面調整にハケ目がみとめられる。甕Ⅲd類(368・371・375)は口縁がやや長くなり、外反の度合も強い。胴部はふくらみのない長胴を呈すと思われる。内面屈曲部の稜線はほとんどみとめられない。調整は内面ケズリ、外面ヨコナデが基本であるが、外面にもケズリを施すもの(373)、内面にミガキを有するもの(378)もある。また、口唇部が強いヨコナデによってわずかにくぼむもの(380)も、一応この範疇に含めた。

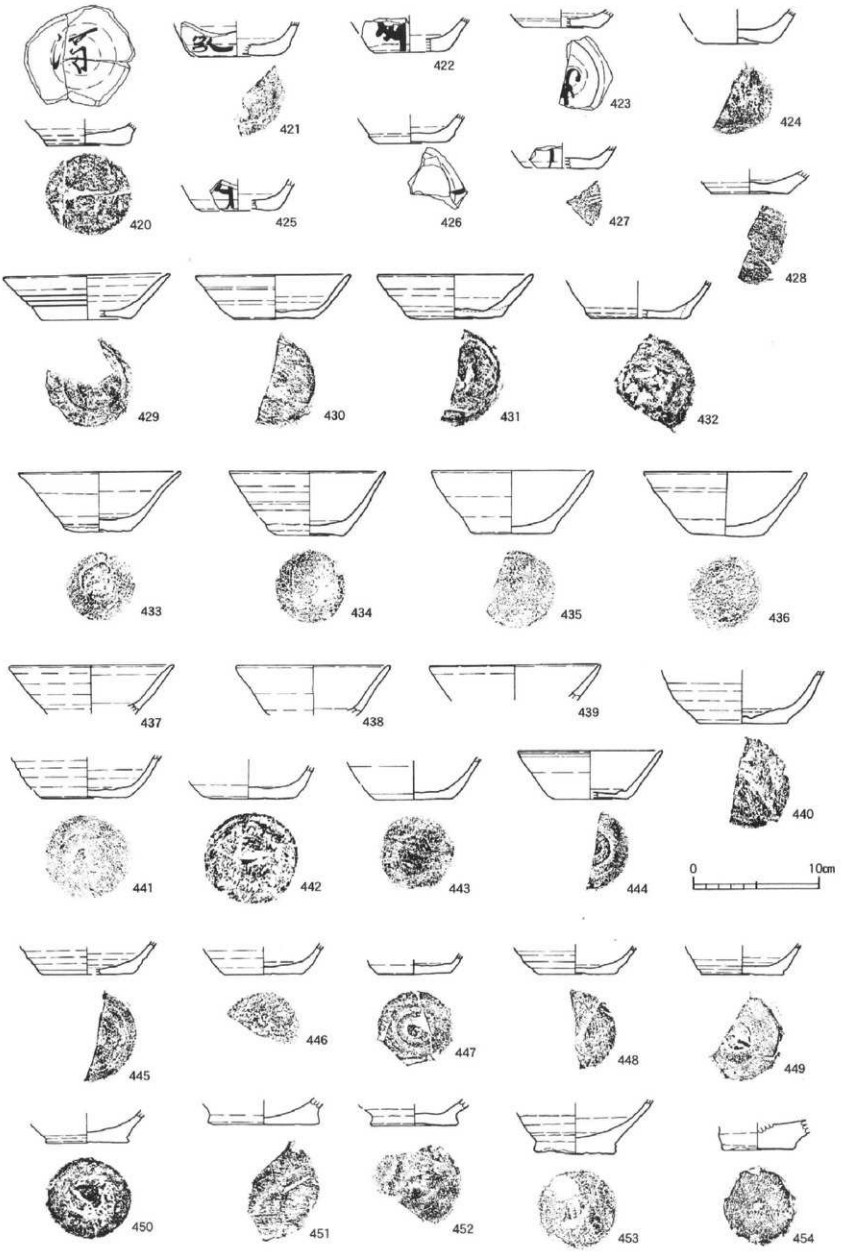
381～383は甕または瓶等の把手である。いずれも丁寧なナデによって成形されており、382は扁平につぶれたような形状を示すが、383と同様に牛角状把手の一種と考えた。

鉢(384～387)は出土数が少なく、形態的特徴に統一性もない。384は口縁直下に把手の剥離痕のみとめられるもので、瓶の可能性がある。内器面にはケズリの後にヘラ状工具で施した縦方向のナデがみとめられる。385は口唇部にくぼみを有するもので、須恵器を模倣した可能性が示唆できる。386は鉢の脚部または大型椀の高台部である。内面には赤色沈着物がみとめられる。387は口唇部が玉縁状を呈するもので、甕Ⅲb類の口縁部の可能性もある。

388～394は坏蓋ないし坩蓋である。これも出土数は少ないが、口径により3類(Ⅰ類：口径12cm未満、Ⅱ類：口径12cm以上15cm未満、Ⅲ類：口径15cm以上)に分けた。蓋Ⅰ類(388)は、天井部がドーム状に突出しており、器高も高い。口縁は端部付近で緩く屈曲し、肥厚部はやや丸みを帯びたにぶい断面形を呈す。なお、端部内面にはにぶい稜を有しており、胎土は須恵器のそれと類似している。蓋Ⅱ類(389～391・394)は口縁部の形状によって2種類に分かれる。389・390は端部付近で緩く屈曲し内面にはにぶい稜を有すが、口縁肥厚部が断面三角形を呈すもの(389)と丸みを帯びたにぶい作りのもの(390)に細分される。器高はともに低く、389はほぼ平坦な天井部を呈し、390には扁平な擬宝珠状のつまみが付く。また、390の内面天井部には、ヘラ記号とみられる「×」状の線刻がある。391・394は口縁端部が下方に長く屈折するタイプで、器高は低い。断面形は391が緩いドーム状、394は内・外器面に明瞭な稜線が残る台形状を呈している。なお、391の外面天井部には判読不能の墨書がみとめられる。蓋Ⅲ類(392・393)のうち、392はつまみが付き器高の低い蓋で、口縁端部の屈折も短い。393はやや器高が高いが、内・外器面とも明瞭な稜がみとめ



第83図　包含層内出土遺物(古代)実測図③

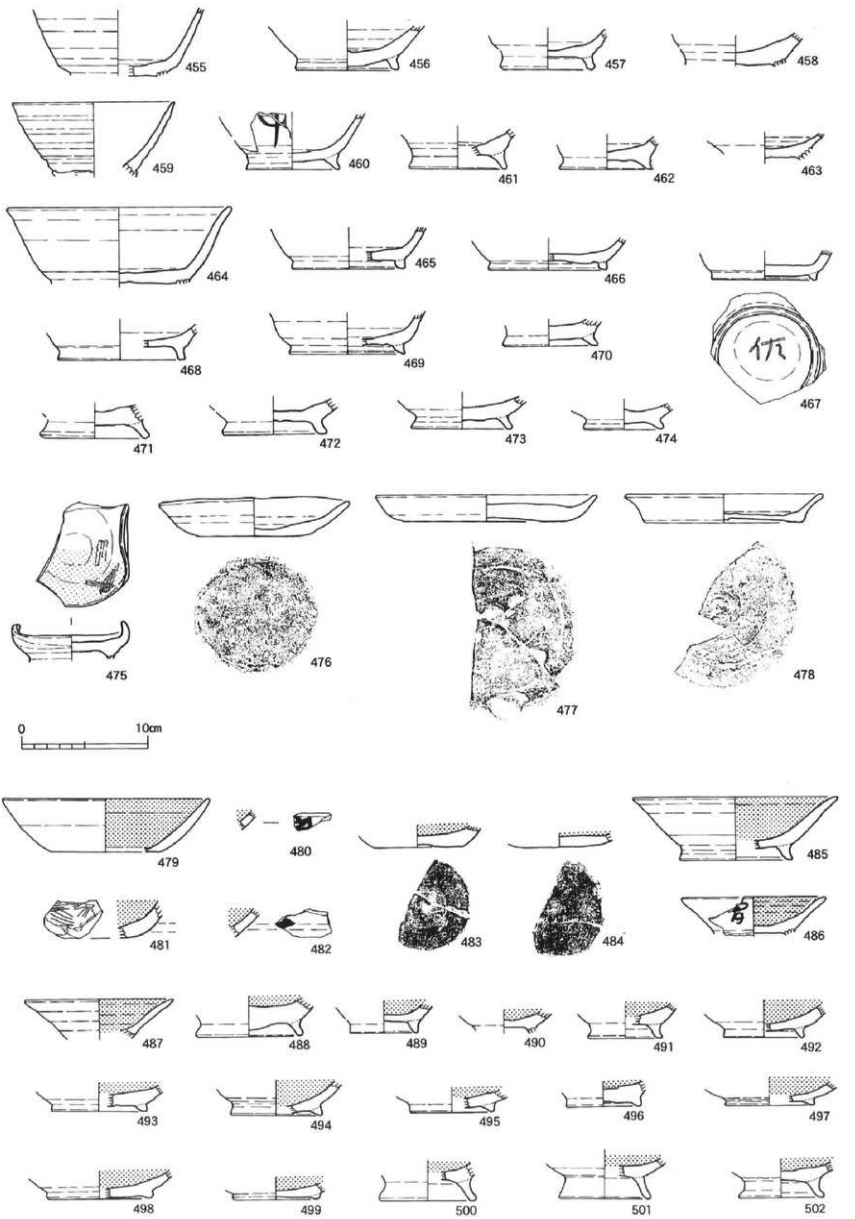


第84図　包含層内出土遺物(古代)実測図④

られないため、断面ドーム形と考えている。

高台の付かない坏身(395～454)は、器形によって6類に大別される。坏身Ⅰ類(395～417・419)は口径と底径の差が小さく、器高の低いもので、大型(395～400)、中型(401・403～415・442)、小型(402・416・417・419)に分かれる。さらに体部の遺存しているもので観察すると、体部から口縁にかけてごくわずかに内湾するもの(395・405・416)、外反するもの(397～399・404・406)、直線的に開くもの(396・407・408)に細分される。これらの中には底部の器壁が397のように厚手のもと、395や400のように薄手のものが混在しているため、さらに細々分することも可能だと思われる。なお、ススが付着しているため判別しずらいが、402は体部下端を手持ちケズリで仕上げている可能性があるほか、395・407は切り離し後に工具調整が施されている。また、407は内面見込の広い範囲に赤色沈着物がみとめられ、409でも内面見込に赤色沈着物が「×」状に膠着している。線刻・墨書の類としては、内器面にススが付着している410の底部に3本(ないし4本)×2本の条線が籠状に線刻されているほか、411の底部に記号とみられる「‥」の墨書、415体部に「ノ」、412・413の体部に判読不能の墨書がみとめられた。坏身Ⅱ類(420～427)は基本的に小型のものが主流で、底部の作りはやや小ぶりになり、器壁も厚くなる。器面調整はロクロナデの後にナデを施したものが多い。また、このタイプには墨書土器が多いのも特徴の一つである。420の内面見込の墨書は「酒」と判読できるほか、426・427では体部に「｜」状の墨書がみられる。なお、421・422・425の体部と423の底部にも墨書がみとめられたが、いずれも判読不可能であった。坏身Ⅲ類(429～432・441・443・444)は坏身Ⅰ類の中型と坏身Ⅳ類の中間形態のような器形を呈しており、底径がやや小ぶりになり、器壁も坏身Ⅰ類に比べ薄くなっている。また、429～432は坏身Ⅰ類同様器高が低いのに対して、441・443～447は坏身Ⅳ類のように器高が高くなるタイプに近づくと考えている。なお、443・444の体部下端にはケズリの痕跡がみられる。また、431と432では、底部と体部を貼り付けたような接合痕がみとめられる。坏身Ⅳ類(433～440)は底径と口径の差が大きくなり、体部は基本的にラッパ状に大きく開くタイプのものが主流を占め、一部に口縁が緩く外反するもの(433・438)や内湾するもの(440)を含むグループである。器壁は底部のみやや厚手で、体部から口縁部にかけては非常に薄く、口唇部は鋭利な雰囲気をもつ。434の底部には丁寧な工具ナデ、436の内面には渦巻状の工具痕がみとめられる。また、433・435の口縁部にはススが付着している。坏身Ⅴ類(418・428・448～452)は坏身Ⅳ類と近い形態を呈すが、外面体部下端に明瞭な段差や工具切り込み等が意識的に施されるもの(418・448・449)と、体部の立ち上がり部分がやや肉厚になり、底部と体部の間に高台状の段がつくタイプ(450～452)がみられる。なお、底部のほぼ全面に赤色顔料、内器面にススが付着している428も後者に含まれる可能性がある。418・448には底部に板状圧痕らしき痕跡がみとめられるほか、450～452では切り離し後に丁寧な工具調整が施されている。また、450は底部から体部下端にかけてススが付着している。坏身Ⅵ類(453・454)は、円盤高台状の底部形態を呈すものである。ただし、454は糸切り離しのため、他の遺物とは時期差が想定される。453はヘラ切り離しとみられるが、切り離し後に丁寧な工具調整が施されている。

464～474は高台が付く坏身である。口縁まで遺存している464は、坏身Ⅰ類に高台が付いたものと考えている。体部下端にはケズリが施されているほか、高台の剥離した部分には、高台を貼り付ける前に体部の接合部へ施した沈線状の調整痕がみとめられる。須恵器の類似形態から、高台部は方形で低めのものと推測している。他の遺物は体部上半を欠いているため、高台の形状で細分した。465・466(高台付坏Ⅰ類)は、464の高台と考えている方形で低めの高台が体部下端のほぼ直下に貼り付けられたもので、畳付の内側に浅いくぼみを有する。466の高台際には指押えした痕跡が回線状に残る。467(高台付坏Ⅱa類)、469・470(高台付坏Ⅱb類)も体部直下に低めの高台が付くが、畳付内側のくぼみが明瞭になり、高台断面形は三角形に近くなる。また、469・470は高台端部がやや外側に張り出すような形態となる。467は切り離し後に



第85図　包含層内出土遺物(古代)実測図⑤

高台内を丁寧に削り、高台見込に「佐」と判読できる線刻を施している。469・470は切り離し後にナデ調整しており、470では高台際を指押えした痕跡もみとめられる。468・471～473(高台付坏Ⅲ類)は高台端部が丸みを帯びてにぶくなり、高台自体も長くなる。ただし、貼り付け位置が体部直下よりもやや外寄りになるとともに、高台端部も外側へ張り出すような形になるため、器高はさほど高くない。いずれも切り離し後に丁寧なナデが施されているほか、472は工具押え、473は指押えした痕跡が高台際に残る。また、473は内面見込にススが付着しており、ミガキを加えたような跡もみとめられた。内面にミガキのような痕跡がみとめられた474もこの範疇に収まるものと考えているが、他に比べ高台が短く、貼り付けではなくつまみ出しのようにもみえる。

455～463は高台付塊である。高台付塊Ⅰ類(455・457)は高台の上位に屈曲部があり、段を有する器形を想像しているが、いずれも体部や高台部を欠損しているため推測の域を出ない。高台付塊Ⅱ類(456・458～463)は端部が外側に開いた高台が体部直下よりもやや外寄りに付き、体部は459のようにやや内湾しながら立ち上がるタイプと考えている。高台先端が五角形状のもの(456・457・461：高台付塊Ⅱａ類)と三角形状のもの(460：高台付塊Ⅱｂ類)に分けられる。なお、460の体部外面には判読不能な墨書がみとめられる。455～458・460・463には切り離し後のナデ調整が、455～457には高台際を工具または指押えした痕跡がみとめられた。また、455は体部下端をヨコケズリしており、462・463は内面にススが付着している。

皿(475～478)も出土数はかなり限られている。475は耳皿で、当市内においては初例である。欠損しているが、低めの輪高台が付いていたと推測される。外器面はロクロナデ後丁寧なナデ、内器面は工具ミガキで一部は黒変している。476は切り離し後に丁寧なナデ調整が加えられた皿で、体部は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁は不整形である。477は器高に比して底部の器壁が厚く、法量も小さい。底部には部分的にヘラ状工具痕がみとめられる。478は非常に薄手で堅緻な土器である。

黒色土器　第85図

479～484は高台の付かない坏身または皿とみられる黒色土器である。479は内器面に縦方向のミガキが施され、光沢を帯びている。底部は一部しか残存していないが、体部に比べかなり薄手の印象を受ける。481は内器面にミガキを加えた後に、先端が丸く尖った工具で暗文状の条線を施している。480・482は外器面体部に墨書がみとめられる。いずれも判読不能であったが、胎土・調整などから同一個体の可能性も考えられる。483・484はともにヘラ切りで、484は切り離し後のナデ調整がみとめられる。また、外器面にはススの付着がみられる。

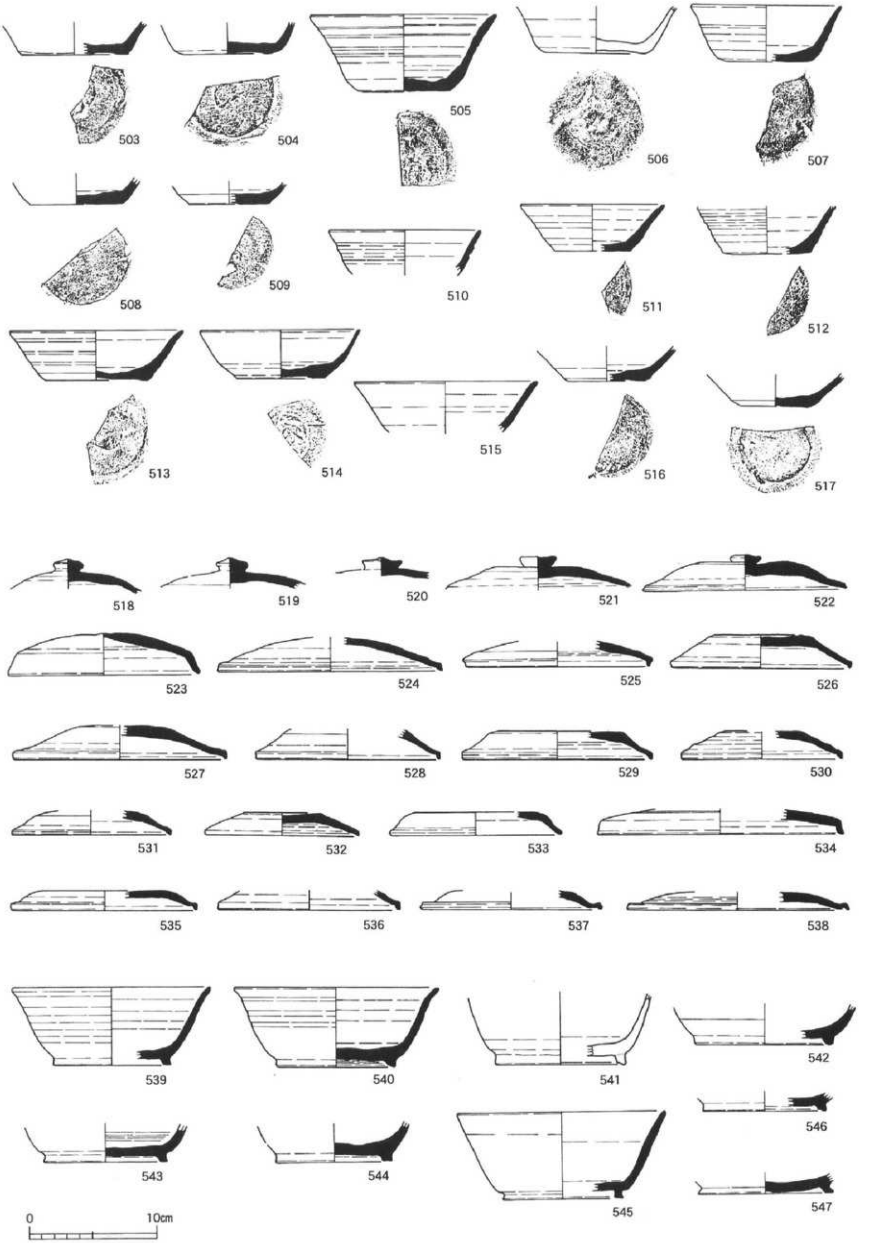
485～496は高台付の坏身、497～499は高台付皿、500～502は高台付塊と考えているが、485～487以外は高台部周辺のみの破片であるため、器種が混在している可能性もある。今回出土した高台付坏の体部は、器高が低く、口径と底径の差は小さく、やや内湾しながら立ち上がって口縁のみが外反するもの(485)と、底径はいくぶん小型化するが器高は低いままで、体部下端から緩く外反しながら立ち上がるもの(486・487)に分かれる。基本的な器形は同じなので、時期差というよりもバリエーションの差かもしれない。底部・高台部に着目すると、薄手基調の底部の中に肉厚なもの(488・496)が含まれるほか、内面見込が塊状にくぼむもの(492・494)と平坦なものに分かれるようである。高台部は、畳付内側のくぼみが明瞭になり断面三角形に近い外向きの高台が、体部のほぼ直下に付くもの(黒色・高台付坏Ⅰ類：485)、端部が丸みを帯びた低めの高台が、体部直下よりやや内側に付くもの(黒色・高台付坏Ⅱａ類：492)、基本形態は黒色・高台付坏Ⅱａ類に類似するが、高台端部が外向きにはねるもの(黒色・高台付坏Ⅱｂ類：491)、体部直下よりも外寄りに、端部先端が丸みを帯びてやや高くなり、外向きに開いた高台が付くもの(黒色・高台付坏Ⅱｃ類：488)、尖り気味の断面三角形を呈する低めの高台が、体部直下に付くもの(黒色・高台付坏Ⅲ

a類：489)、かなり低い高台が体部直下ないし外寄りにつくもので、断面形が三角形となるもの(黒色・高台付坏Ⅲb類：493～496)に分類できる。内器面の調整方向は486が縦方向、487が横方向で、他の遺物については明確なミガキの方向が不分明であった。体部下端のヨコケズリの痕跡は485にだけみとめられた。高台内は487・488を除くすべての土器において、丁寧なナデもしくはナデ調整が施されていた。また、486の体部外面には「官」とみられる墨書が遺存していた。高台部から大きく緩やかに広がる体部と推測された497～499を高台付皿としている。高台部はきわめて低く、先端のにぶい断面三角形を呈したものが、体部直下の外側に貼り付けられている。高台内はいずれも丁寧なナデ調整で、498は外器面にもスス状のものが付着している。500～502は高台付塊と考えている。器壁はどれもほぼ均一で、高台部は坏身・皿と分類したものよりも厚めである。500・501は黒色・高台付坏のⅡc類、502はⅡb類に近い形状である。なお、高台内はすべてナデ調整である。

須恵器　第86～88図

503～517は高台の付かない坏身で、器形で大きく3類に分類している。須恵・坏身Ⅰ類(503・504)は底部の破片しか出土していないが、底径が大きく、器高は低いタイプと推測され、器壁は底部から体部までほぼ均一である。体部と底部の境目は内器面において明瞭な屈曲部となる。体部がやや外反しながら立ち上がり、下端にわずかな段差がみとめられるもの(503)と、体部下端が丸みをもち、内湾するような器形を呈するもの(504)に分かれる。須恵・坏身Ⅱ類(505～508・510・512)は口径と底径の差がやや大きくなり、器高も高くなるもので、大型のもの(505・506)と小型のもの(507・508・510・512)がみられる。体部はケズリや丁寧なナデによって下端付近がにぶく屈曲し、口縁部に向けて緩やかに外反しながらラッパ状に開く。内器面の体部屈曲部もにぶくなり、大型のものでは屈曲部際に指押さえによるくぼみがみとめられる。ロクロ調整や工具ナデの痕跡が明瞭で、体部に沈線や稜線が巡るものもある。底部にも切り離し後にナデ調整を加えているほか、505・507・512には体部下端をヨコケズリした痕跡もみられる。なお、506は胎土が他と同一であることから、焼成不良のため灰黄色を呈した、いわゆる赤焼の須恵器と思われる。須恵・坏身Ⅲ類(509・513・514)は口径と底径の差が小さく器高も低いもので、体部は下端が丸みをもち、内湾するように立ち上がるものと、ほぼストレートに立ち上がり口縁部がわずかに外反するものがある。509・513には体部下端にヨコケズリの痕跡、514は底部に板状圧痕が残る。なお、514も橙色を呈すことから、赤焼の須恵器の可能性がある。須恵・坏身Ⅳ類(511・515～517)は底径と口径の差が大きくなるとともに、器高も高くなり、体部は直線的に大きく開く。ただし、511・515がⅡ類とⅢ類の中間形態的な形状を呈するのに対し、516・517はこの2点に比して体部の開きが大きいので、前者をⅣa類、後者をⅣb類に細分しておきたい。なお、511とⅣb類は切り離し後に丁寧なナデ調整が施されているほか、Ⅳb類には体部下端にヨコケズリの痕跡がみとめられる。

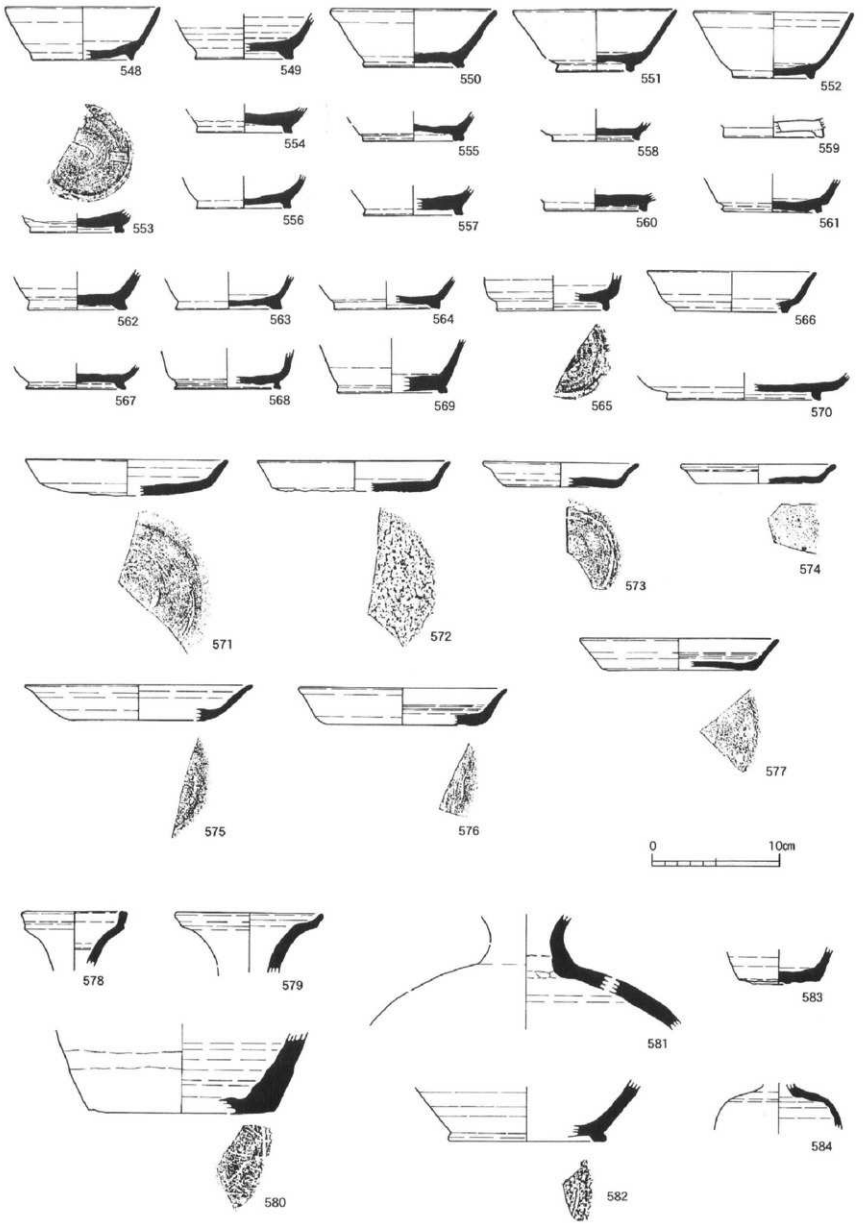
518～538は坏ないし塊の蓋である。口径によって3類(Ⅰ類：口径13cm未満、Ⅱ類：口径13cm以上15cm未満、Ⅲ類：口径15cm以上)に分けた上で、各部位の特徴に基づいて細分している。須恵・蓋Ⅰ類(530～532)はつまみの付かないほぼ平坦な天井部で、器高は低く、断面形は台形状を呈す。基本的に天井部から口縁端部まではほぼ真っ直ぐに開くが、531は口縁手前で緩く屈曲して稜を残す。口縁部の形態で細分でき、端部がにぶい断面三角形の肥厚部となるもの(Ⅰa類：530・531)と、端部がほとんど肥厚せず丸みをもったにぶい断面形になるもの(Ⅰb類：532)がある。なお、531は天井部端にヨコケズリの痕跡がみとめられる。須恵・蓋Ⅱ類(523・525・526・528・529・533・535～537)も口縁部及び天井部の形状によって3種類に分かれる。523・533は口縁端部が下方に長く屈折するタイプ(Ⅱa類)で、533は外側への開きが大きい。523は口縁屈曲部から天頂部に向けて緩やかに立ち上がるドーム状の天井部、533は屈曲部からその



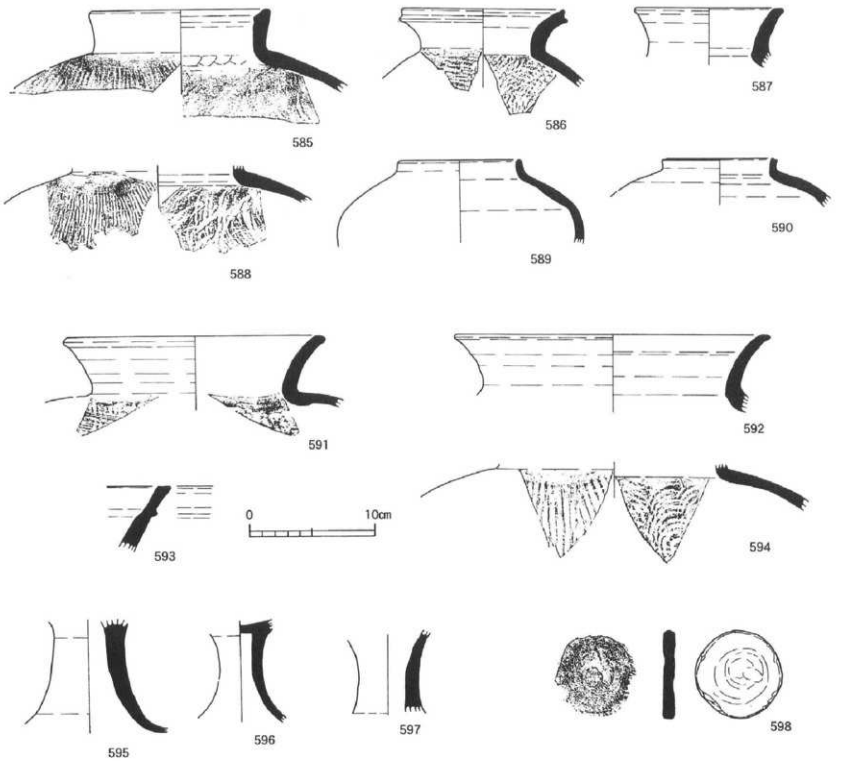
第86図　包含層内出土遺物(古代)実測図⑥

まま平坦な天井部を形成している。525は口縁肥厚部がしっかりとした断面三角形を呈すタイプ(Ⅱb類)で、器高は低く天井部はドーム状である。526・528・529・535～537(Ⅱc類)は、口縁肥厚部が断面三角形を呈すが、作りはかなりにぶくなっているものである。これらは体部や天井部の形態からさらに2類に分類できる。526・528・529は平坦な天井部からほぼストレートに口縁部にいたる器形(Ⅱc1類)で、器高もやや高めである。529は他の2点よりも器高が低く、口縁手前に屈曲の兆しが見えることから、次のⅡc2類への漸移形態かもしれない。なお、528・529はやや焼成不良で、それぞれ橙色系の色調を呈したり、瓦器的雰囲気をもつ。平坦な天井部で器高が非常に低い535～537(Ⅱc2類)は、口縁部手前で屈曲し、稜や段が残るタイプである。535は胎土が土師質土器と類似している。須恵・蓋Ⅲ類(522・524・527・534・538)も各部位の特徴から5類に分類される。522はつまみを有する蓋(Ⅲa3類)で、つまみ周辺はナデによって浅くくぼんでおり、凹みの外縁にはヨコケズリが施されている。口縁は肥厚部が退化し、にぶい丸みをもつ作りとなり、内面の稜もにぶい。今回の調査ではつまみ部分の破片が他にも出土しており、518・519は少しくずれ気味のひし形つまみが付き、天井部はドーム状になるもの(Ⅲa1類)、520は522と同様に扁平な擬宝珠状のつまみが付くもの、521は扁平なボタン状つまみが付き、天井部はフラットになるもの(Ⅲa2類)である。これらつまみを有する蓋には、範囲の広狭はあるが、普遍的に天井部へのケズリの痕跡がみとめられる。524・527(Ⅲb類)は天井部の形態が異なるものの、ある程度の器高を保っており、口縁肥厚部もかろうじて断面三角形の名残りを残すものである。天井部際にヨコケズリの痕跡がみられる527はやや焼成不良である。538(Ⅲc類)はⅡc2類と同様に器高が非常に低く、天井部はわずかに丸みを帯びている。口縁部手前で強く屈曲しており、明瞭な段が残る。なお、外器面には縦方向のケズリの痕跡がみとめられる。

539～570は高台が付く器種で、566・570を高台付皿としたほかは坏身と塊の明確な区別に検討の余地が残ったので、観察表では坏・塊の別を記載しているが、ここでは便宜上各類の表示を「須恵・高台付○類」とした。539～547は口径15cm以上、底径9.0cm前後のやや法量が大きいタイプ(須恵・高台付Ⅰ類)で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部のみがわずかに外反すると思われる。高台部の形状から4類に細分した。539(Ⅰa類)はほぼ均一の器壁をもち、方形のしっかりした作りの高台が体部直下のやや内側に付く。高台端部はやや外向きに開いており、畳付にナデによるくぼみはみとめられない。底部のみ破片である542・543もこの類に含まれると考えている。なお、539・543は高台内に丁寧なナデの痕跡がみとめられる。また、540・541(Ⅰb類)は体部に比べ底部の器壁が厚手になり、高台部は体部直下に付く。ナデ調整により畳付内側に明瞭な凹線状のくぼみが巡り、高台端部断面形は三角形に近くなる。底部片である546と作りがにぶくなっている542もこの範疇に含まれよう。541はいわゆる赤焼の須恵器で、546とともに畳付に工具刻みの跡がみとめられる。545(Ⅰc類)は均一な器壁で、内器面では底部から体部への境目が明瞭な屈曲部となり稜が残る。台形状のしっかりとした高台は体部直下よりも内側に付き、端部はやや外側に広がる。547(Ⅰd類)は体部直下よりも外側に高台が付き、底部は高台畳付のレベルまでくぼんでいる。端部の作りもにぶく、外向きに張り出しているが、畳付にはナデによるわずかなくぼみがみとめられる。塊状の器形を呈す可能性がある。548～565・567～569は口径13cm以下、底径8.0cm以下のやや法量が小さいタイプ(須恵・高台付Ⅱ類)である。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がるもの(548・552)、ラッパ状に広がりながらストレートに立ち上がるもの(550・551)、口縁はさほど開かず真っ直ぐ立ち上がるもの(569)などがあると思われるが、いずれも器高は高くない。底部片が多いため、ここでは高台の形状を中心に6類に細分した。548(Ⅱa類)は底部が丸みをもち、体部直下よりもかなり外側に断面三角形の高台が付く。内器面に指頭痕が残るほか、高台際は指押えによって浅くくぼんでいる。549・562・563(Ⅱb1類)は、体部がやや丸みを帯びて立ち上がり、体部直下に台形状で畳付中央がかすかにくぼむ高台が



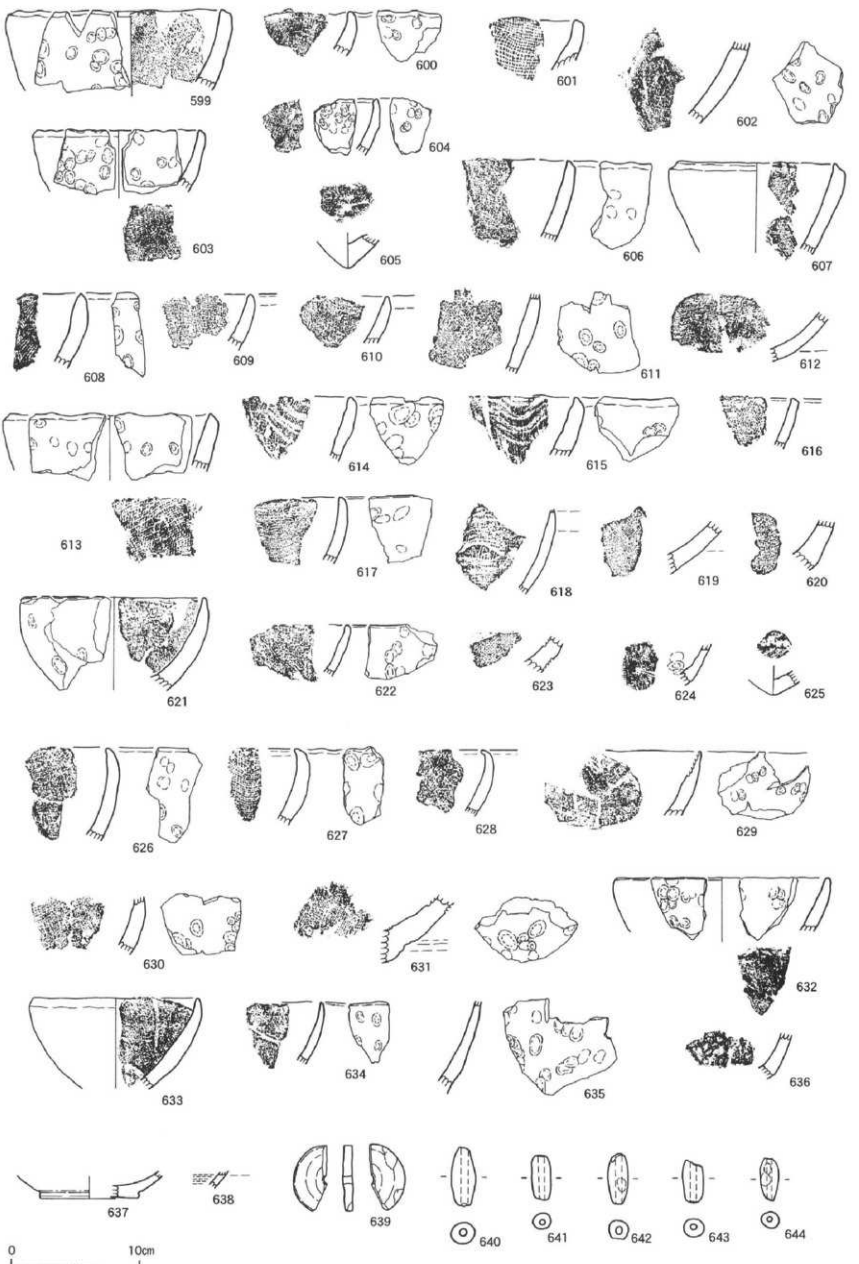
第87図　包含層内出土遺物(古代)実測図⑦



第88図　包含層内出土遺物(古代)実測図⑧

付くタイプである。562・563は高台内をナデ調整しているほか、563では畳付に工具痕がみとめられた。なお、体部や畳付の形状から考えると、断面が方形を呈する554～556・569や高台端部が外側へはねるように張り出す567・568もこのタイプの一部と考えられるため、前者をⅡｂ２類、後者をⅡｂ３類としてこれに加えた。これらも高台内にナデ調整の痕跡がみとめられ、555には砂目積痕もみられる。550・557・561(Ⅱｃ１類)は、体部がやや外反気味に真っ直ぐ立ち上がり、高台は方形で畳付中央が明瞭にくぼみ、端部が外向きに開くタイプである。558～560・564はⅠｂ類と同タイプで、ナデ調整により畳付の内輪側に明瞭な凹線状のくぼみが巡り、高台端部断面形は三角形に近くなる。体部の形状がⅡｃ１類に近いため、Ⅱｃ２類としてこの範疇におさえた。１・２類とも高台内はナデ調整が施されている。551(Ⅱｄ類)は体部が直線的に開き、内器面の体部と底部の境目が屈曲して稜をなす。高台は方形で畳付部分は尖っており、やや外向きに開いて体部直下のかなり内側に付くため、体部との間に段差を有する。552(Ⅱｅ類)の体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、底部は高台側へ膨らむ。器壁は薄手でほぼ均一である。高台はにぶい三角形状を呈しており、体部直下に付く。外器面は焼きただれていて粗い。

566・570は高台付皿、571～577は高台の付かない皿である。566には須恵・高台付Ⅰａ類、570にはⅠｂ類と同じタイプの高台が付く。なお、570は内面見込に研磨された跡があり、明瞭な墨痕はみとめられないものの、転用硯の可能性がある。高台の付かない皿は口径12cm前後のもの(須恵・皿Ⅰ類：573・574)と16



第89図　包含層内出土遺物(古代)実測図⑨

cm前後のもの(須恵・皿Ⅱ類：571・572・575～577)に分かれる。Ⅰ類は薄手の器壁で、内器面の体部屈曲部はナデによってくぼみを有する。体部は外反しながら立ち上がる。底部切り離し後の調整痕はみとめられない。Ⅱ類は、底部がやや突出気味のもの(Ⅱａ類：571)、底部は平坦で体部が外反しながら立ち上がるもの(Ⅱｂ類：572・576・577)、平坦な底部はやや小型化し、体部は丸みを帯びながら立ち上がるもの(Ⅱｃ類：575)に分けられる。571は瓦器のような軟質の雰囲気があり、572は外器面全体に目積の痕跡とみられる大粒の砂粒が付着している。

578～590は壺、591～594は甕とした遺物であるが、瓶形になるものも含め、器種の区別が曖昧なところがある。578～582は長頸壺(須恵・壺Ⅰ類)で、口縁は複合口縁状になり、底部には高台が付くものもある。582は高台内に工具刺突状の痕跡がみとめられる。583・584は小型の壺ないし瓶になると思われ、583の底部には砂目積痕が残る。585～590は短頸壺(須恵・壺Ⅱ類)で、甕としている591・592・594もこの類に入る可能性が高い。頸部が短く直立する広口壺(Ⅱａ類：586・589・590)と、口径は小さくやや長めに外反するもの(Ⅱｂ類：586・587・588・591・592・594)に分かれ、基本的に受口となる口唇部のくぼみはⅡａ類にのみ残る。Ⅱａ類のうち頸部がやや長くなる585の胴部には平行タタキがみられるが、他はロクロナデであり、Ⅱｂ類はいずれも平行タタキまたは格子目タタキがみとめられた。なお、甕とした593についても、提瓶などの口縁となる可能性がある。595～597は高杯の脚部としたが、597はその形状から長頸壺の頸部の可能性が強い。598は須恵器の坏ないし皿を二次転用したメンコまたは紡錘車の未製品である。

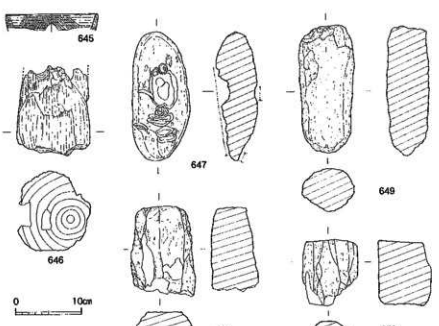
布痕土器　第89図

固形塩生産を目的とした焼塩土器である布痕土器にもいくつかのバリエーションがみとめられる。ここではⅠ口縁部の形状と体部の器形、器壁などをもとに7類に分類した。なお、今回出土したほぼすべての布痕土器が外面指押えであった。布痕Ⅰ類は体部がややふくらみを持つ逆円錐形で、器壁は基本的に厚手である。口縁断面が工具切り取りによってにぶい三角形を呈しているものをⅠａ類(599・601・606・610・613・615)、丸みを帯びてにぶく尖ったものをⅠｂ類(600・608・609・632)とし、Ⅰａ類には器壁が薄手で口径13cm前後の小型のもの(603・614・616～618・622)が伴っている。布痕Ⅱ類(604)はⅠａ類の小型のものとほとんど共通するが、内器面側にも稜を有するものである。布痕Ⅲａ類(607)は体部がややストレートになり口縁端部は突出して尖るもので、法量を画一化するために型に刻まれていた沈線部がポジティブ化した器形と指摘されているものである。[※1]626～628も体部の形状はⅣ類に類似しているが、口縁部はⅢａ類に近いので、Ⅲｂ類としてこれに加える。Ⅳ類(621)は体部が半円状にまでふくらみ先端が鋭利に尖るタイプである。Ⅴ類(633～636)は内器面に布目がみとめられないもので、器形はⅠａ類やⅣ類に類似する。なお、Ⅴ類のように布目のない土器も含まれることから、布痕土器という呼称について今後は焼塩土器あるいは製塩土器へと変更していきたい。

その他の遺物　第89・90図

637は洛北系の緑釉陶器で平底の高台部以外に施釉がみとめられる。639は土師質土器を転用した紡錘車である。640～644は土師質の土錘で、前時代の遺物である可能性もある。645は内・外器面に黒漆が塗られた椀である。646は柱根とみられる木製品で、端部は水平に面取りされている。647は用途不明の軽石製品で、表裏両面に凹みがあるほか、研磨した跡や工具痕もみとめられる。649～650はカマドの支柱とみられる軽石製品である。いずれも火熱によって赤変しており、648には工具による切込み痕がみとめられる。

※1　小田和利「製塩土器からみた律令期集落の様相」1996『九州歴史資料館研究論集21』



第90図　包含層内出土遺物(古代)実測図⑩

4．小　結

これまで述べてきたように、今回は肱穴遺跡における古代以前の資料を中心に報告を行っている。当遺跡においては、縄文時代後期から平安時代まで連綿と営まれた生活の痕跡が確認されており、その中でもとりわけ縄文時代晩期終末～弥生時代前期、弥生時代後期・終末期～古墳時代初頭頃、平安時代の三時期については、初例となる遺構や遺物を含め、今後当地域の歴史を明らかにしていく上で重要な資料が提供されたといえよう。そこで、各遺構・遺物の意義付けを含め、特筆すべき三時期の様相についてまとめていきたいと思ったが、紙面の都合と時間的制約により、今回は縄文時代晩期終末～弥生時代前期の遺構・遺物について触れるにとどめ、他の二時期の詳細や出土遺物の編年試案については、『肱穴遺跡 中・近世編』中の「遺跡の総括」で行うこととした。

今回当該期の遺構として報告した住居跡６軒は、直径４～６ｍの円形プランを呈し、主柱穴２個と周壁ライン上を巡る複数の柱穴によって構成される遺構であった。当初その平面形態や出土遺物の時期などから、いわゆる「松菊里型住居」の可能性を示唆し、記者発表や遺跡見学会でもそうした見解を提示してきたが、整理作業やその後の検討により、①撹乱を受けている点を差し引いて考えても、床面中央には明確な楕円形土坑がみとめられない、②柱穴の配置については、中央土坑の退化傾向がみとめられる「発展松菊里型住居」との類似性を指摘できるが、今回の出土遺物の時期と同住居の年代の間にはタイムラグがある、③出土遺物がこうした移入文化の存在を証明しうるほど充実した組成ではない、などの問題点が挙げられることから、今回検出した遺構について現時点では、「発展松菊里型住居」と類似した平面プラン・柱穴配置がみとめられ、晩期後半～前期にかけての遺物を伴う住居跡、という表現にとどめることとした。ちなみにこれまで都城市内で確認された縄文時代晩期～弥生時代前期に比定される住居跡は、横尾原遺跡と黒土遺跡で検出された竪穴住居２軒のみである。横尾原遺跡の住居は2.8×2.4ｍの隅丸方形を呈しており、検出面から床面までの深さは約0.3ｍで、出土した松添式の深鉢や組織痕土器などから晩期前半頃に

位置付けられている。また、前期末の遺物を伴う黒土遺跡の住居跡は直径2.1～2.2mの略円形プランで、検出面からの深さは約0.4mを計る。年代的に当遺跡の前後に位置する両遺跡出土の住居と比較すると、円形化したプランという点で貯穴遺跡の住居跡と黒土遺跡のそれは共通性がみとめられるものの、規模の面では直径4～6mに及ぶ今回の住居跡がかなり異質な印象を受けるため、その系譜の問題も含め、まだまだ検討の余地が残されている感は否めない。しかしながら、移入文化の影響の有無は別にして、稲作開始時期における住居の一形態として今回確認した遺構が存在するのはまぎれもない事実であり、今後当地域において当該期の集落等が発見されることにより、その位置付けが明確になることを期待したいと思う。なお、宮崎県内では、当遺跡の住居群と規模の面で近似した住居跡が高鍋町の持田中尾遺跡において検出されている。これは大隈系磨製石器や前期末頃の土器を伴い、床面中央に礫の入った楕円形土坑がみとめられる住居跡で、直径約4.3m、深さ0.3mを計る。同遺跡では朝鮮系無文土器も出土しており、この住居については「松菊里型住居」の可能性が指摘されている。こうした考古資料や、近年の自然科学分析の進展によりその存在が指摘されるようになった初期水稲農耕文化の痕跡などをみる限り、南九州地域における稲作文化の萌芽が先進地である北部九州地域よりはるかに後出するとは考えられず、近い将来さらに明確な資料によって遅滞したイメージからの脱却が図られることを願わずにはいられない。

この時期の遺物のうち、土器についてはいわゆる刻目突帯文土器様式に該当する土器群のほかに、底部に組織痕を有する鉢や波状口縁の浅鉢などが出土している。籾痕土器をはじめとする当該期の土器が多量に出土した黒土遺跡に比べると出土数・器種ともにかなり少なく、調整技法や細部のディテールについても若干の差異がみとめられる。遺跡の性格の違いも考慮すべきであるが、新しく移入した文化の初期段階においても、こうした同一地域内での偏差がみられる点は非常に興味深い。石器については、耕作具となる打製土堀具や伐採具としての磨製石斧や武器である磨製石鏃が複数出土したほか、市内では2例目（もう1点は黒土遺跡出土）となる擦り切り孔を有する石包丁が確認されている。この石包丁は長軸8.7cm、短軸5.25cm、最大肥厚部約1.0cmで、平面形は楕円形を呈している。緩やかに外湾する背部に沿って擦り切りの溝が両面に残っており、長さ1.35cm、幅0.3cmの細長い穴が長軸のほぼ中央、短軸の背部寄りの位置に穿孔されている。形態はいわゆる外湾背外湾刃で、背部はS字状に湾曲している。これは黒土遺跡出土の石包丁と同様に素材を円礫から取り出した横長剥片に求め、さらに当遺跡の石包丁は背部側から器壁を薄くする目的で打撃を加えた結果、こうした背部の湾曲につながったと考えられる（柴畑光博氏教示）。実際に両面とも背部S字の凹みになる部分には、敲打に伴う剥離痕が明瞭に残っており、擦り切りの溝はその上から施されている。刃部は両刃で、断面本等辺三角形を呈しており、使用痕が明瞭にみとめられる。また、他の石器のうち黒土遺跡では出土していない磨製石斧については、当時遺跡周辺の植物相が湿地林を形成していたカシ類を主とする照葉樹林から、人為的干渉を受けた二次林の可能性があるシイ類へと変移していることなどから、水稲耕作の基盤整備にこうした類の石器が用いられていた可能性は十分考えられることであろう。

<参考文献>

中間研志　「松菊里型住居－我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究－」
『東アジアの考古と歴史（中）岡崎敬先生退官記念論集』1987 同朋社出版

西谷　正　「松菊里型住居の分布とその意味」『先史日本の住居とその周辺』1998 浅川滋男編

柴畑光博　『横尾原遺跡』 都城市文化財調査報告書第16集 1992 都城市教育委員会

柴畑光博　『黒土遺跡』 都城市文化財調査報告書第28集 1994 都城市教育委員会

北郷泰道　「持田中尾遺跡」『宮崎県史　資料編考古1』 1988 宮崎県

柴畑光博　「擦り切り孔をもつ石包丁」『大河 第5号』 1994 大河同人

表1　肱穴遺跡出土遺物観察表（1）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調		胴整		胎土	焼成	備考
					外器面	内器面	外器面	内器面			
1	H-13	J-SA04	石器	石包丁	—	—	—	—	—	—	擦切り
2	〃	〃	〃	打製土製具	—	—	—	—	—	—	基部欠損
3	〃	〃	縄文土器	甕	にぶい黄橙	黄灰～黒	横KN	N	細	並	内器面黒変
4	〃	〃	〃	〃	黒	褐	N	N	並	〃	外面スス付着
5	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙	黒	N	N	粗	悪	
6	H-12	Y-PIT6	弥生土器	〃	にぶい褐	にぶい黄橙	M・N	M・横N	細	良	全面磨滅
7	H-14	Y-PIT30	弥生土器	〃	灰黄褐	〃	横N	N	〃	〃	外面スス付着
8	G-13	Y-PIT11	弥生土器	鉢?	黒褐～灰黄褐	灰黄褐	〃	〃	並	並	〃
9	G-12　H-12	Y-SD01・下	〃	甕	灰褐～暗灰褐	黒褐～灰黄褐	〃	〃	〃	〃	〃
10	G-12	〃・〃	〃	〃	褐灰～灰黄褐	褐灰～灰黄褐	〃・KN	横N	粗	〃	9と同一
11	〃	〃・〃	〃	〃	にぶい橙	灰黄褐	N	KN	〃	〃	
12	H-13	〃・下	〃	鉢	黒褐	灰黄褐	丁寧N・M	横M	並	〃	外面スス付着
13	F-12	〃・中	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横N	横N・H	粗	良	全面磨滅
14	I-12	Y-SD02・中	〃	〃	〃	灰白～浅黄橙	丁寧N	N・H?	〃	〃	13と同一個体
15	H-12　G-10	Y-SD02・03	〃	〃	浅黄橙	灰白	斜KN	斜～横H	〃	並	口縁指頭痕有
16	H-13	Y-SD01・中	〃	〃?	〃	浅黄橙	N	丁寧N	〃	良	
17	F-12	〃・下	〃	高坏	灰白	灰白～浅黄橙	横M	横M→横H	細	〃	内面スス付着
18	H-13	〃・〃	〃	〃	灰黄～灰白	にぶい橙	〃	横H→横M	〃	並	
19	F-12	〃一括	〃	壺	灰黄褐	灰白	横N・M	N?	並	良	外面スス付着
20	H-12	〃	〃	〃	にぶい橙	灰黄褐	横N	N	〃	〃	頸部沈線有
21	F-12	Y-SD01・下	〃	〃	にぶい褐	〃	丁寧M	丁寧N	〃	〃	21と同一個体
22	H-12	〃・〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横N	横N	〃	並	軟質
23	G-12	〃・〃	〃	〃	〃	灰白	M→H 指頭痕有	不定方向H	細	良	外面通弧文有
24	〃	〃・〃	〃	〃	〃	〃	KN	KN	粗	並	接合痕明瞭
25	H-12	Y-SD02・〃	〃	〃	灰白	灰白～黄灰	横～斜N	横N	〃	〃	
26	E-12	Y-SD01・上	〃	〃	〃	灰黄褐～褐灰	横N・横H	KN	〃	〃	内面指頭痕有
27	H-12	〃・〃	〃	〃	〃	灰白	横H	N?	〃	良	外面被熱
28	H-12　H-13	Y-SD01・02	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	横H	斜N	並	〃	外面黒変
29	C-11	Y-SD01・中	石器	打製土製具	—	—	—	—	—	—	基部欠損
30	H-12	Y-SD02・中	〃	打製石鏃	—	—	—	—	—	—	未製品
31	H-13	Y-SD01・下	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
32	H-12	Y-SD03・〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
33	H-13	Y-SD01・〃	〃	磨石	—	—	—	—	—	—	敲打痕・工具痕有
34	E-11	〃	木製品	木杭?	—	—	—	—	—	—	未製品?
35	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
36	D-11	〃	〃	未完製材?	—	—	—	—	—	—	
37	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
38	E-12	Y-SK01	〃	木杭?	—	—	—	—	—	—	表面黒変
39	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
40	〃	〃	〃	角材?	—	—	—	—	—	—	
41	I-2	IVd層	縄文土器	深鉢	にぶい褐	にぶい赤褐	N	N	並	良	沈線有
42	F-15　F-16	IVa層	〃	〃	褐	にぶい褐	横M	横M・横N	〃	並	外面スス付着
43	B-9	IVd層	〃	浅鉢	褐灰	にぶい黄橙	横～斜M	横～斜M	〃	〃	
44	E-10	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙	横M	横M	細	〃	
45	D-11	〃	〃	〃?	灰褐～黒褐	灰褐～黒褐	M	M	並	〃	
46	E-9	〃	〃	壺	灰黄～浅黄	灰黄～暗灰黄	ケズリ状N	ケズリ状N	細	良	
47	M-15	IVc層	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	N?	N?	細	並	全面磨滅
48	G-13	IId層	〃	〃	〃	灰白	横N	N	並	〃	〃・48と同一?
49	C-11	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	—	〃	良	
50	D-10	IVd隅	〃	〃	浅黄橙	灰黄褐	〃	N	〃	並	全面磨滅
51	B-9	〃	〃	鉢	にぶい橙	にぶい橙	横K	N・横K	粗	〃	編布圧痕有
52	C-9	〃	〃	〃	にぶい褐	灰褐	編布圧痕	N	並	悪	〃・炭化物付着
53	E-9	〃	〃	〃	明黄褐	褐灰～黒	編布圧痕	N	〃	並	〃・〃
54	H-18	IVa層	〃	浅鉢	黒褐	にぶい褐	横N・KN	横N・KN	〃	〃	外面スス付着
55	G-14	IVd層	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	N	N	〃	〃	

表２　肱穴遺跡出土遺物観察表（２）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調 外器面	色調 内器面	調整 外器面	調整 内器面	胎土	焼成	備考
56	F-16	Ⅳk層	縄文上器	浅鉢	にぶい黄橙	灰黄褐	横N	横N	細	良	
57	H-12	〃	〃	〃?	〃	にぶい黄褐	〃	〃	〃	〃	外面スス付着
58	G-16	〃	〃	〃	〃	にぶい褐	N?	N?	〃	〃	全面磨滅
59	F-9	Ⅳd層	〃	〃	〃	にぶい黄橙	N	N	並	並	
60	F-10	〃	〃	壺	にぶい褐	にぶい褐	横M	丁寧N	粗	良	礫質で薄手
61	H-10	〃	〃	〃	にぶい赤褐	にぶい橙	横N・横M	横M	並	並	外面スス付着
62	G-17	Ⅳh層	〃	〃	にぶい黄褐	にぶい黄橙	横N	横N	〃	〃	
63	E-9	Ⅳd層	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい橙	横M	〃	〃	良	軟質
64	F-4	Ⅳe層	〃	〃	〃	にぶい黄橙	横N	横M	並	並	
65	H-14	Ⅳk層	〃	壺	灰黄褐	〃	横M	KN→M	〃	良	
66	G-15	Ⅱh層	〃	鉢?	黒褐	灰黄褐	KN?	横N	〃	並	
67	F-3	Ⅳb層	〃	鉢	灰黄褐	〃	横M	横N・横M	〃	〃	礫質
68	G-3	Ⅳd層	〃	台付鉢?	にぶい橙	にぶい黄橙	〃	横M	粗	〃	外面鉄分沈着
69	F-3	〃	〃	〃	灰褐	〃	〃	〃	〃	〃	外面スス付着
70	〃	Ⅳb層	〃	浅鉢?	褐灰→灰黄褐	褐灰	N→横M	横M	並	〃	
71	F-10	Ⅳd層	〃	鉢	にぶい褐	にぶい褐	N?	N	〃	〃	全面磨滅
72	E-10	〃	〃	深鉢	にぶい黄橙	褐灰	横N	横N	〃	〃	
73	G-15	〃	弥生上器	甕	〃	にぶい褐	N	N	粗	〃	外面スス付着
74	F-3	〃	〃	〃	にぶい褐	〃	横N・横M	横→斜M	並	良	
75	〃	Ⅱd層	〃	〃	〃	橙→褐灰	縦M	N	〃	並	79と同一個体
76	H-14	Ⅳk層	〃	〃	〃	にぶい橙	縦H	〃	〃	〃	内面炭化物付着
77	〃	Ⅳd層	〃	〃	にぶい黄褐	灰黄褐	斜M	〃	〃	良	外面スス付着
78	H-5	Ⅱd層	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	横N	横→斜N	〃	〃	
79	D-8	Ⅳb層	〃	〃	にぶい褐	橙→褐灰	縦M	N	〃	並	75と同一?
80	F-4	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	横N	N	粗	良	
81	F-3	Ⅳd層	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	N→M	横→斜M	細	〃	外面スス付着
82	G-10	〃	〃	鉢?	〃	〃	斜H	N	並	並	外面指頭痕有
83	F-3	〃	〃	〃	〃	(剥落)	斜H→横M	(剥落)	〃	〃	
84	G-15	〃	〃	壺?	にぶい黄褐	にぶい黄褐	丁寧N	丁寧N	〃	良	外面スス付着
85	H-14	Ⅳk層	〃	〃	灰黄	にぶい黄橙	〃	〃	〃	並	〃・軟質
86	G-15	Ⅳd層	〃	〃	にぶい黄褐	〃	横M	横M	〃	〃	
87	I-9	Ⅳb層	〃	壺	明褐→灰黄褐	にぶい褐	横N・N	斜KN・N	〃	〃	内面鉄分沈着
88	H-12	Ⅳd層	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	N	N	〃	良	外面スス付着
89	J-10	〃	〃	〃	黒	〃	横KN(粗いM?)	横→斜KN	〃	〃	〃
90	H-8	〃	〃	〃	にぶい橙	灰黄褐	横N	N	〃	〃	内面赤色顔料付着
91	H-13	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐	—	〃	〃	〃	
92	I-9	Ⅱd層	〃	〃	にぶい黄橙	〃	横N・N	〃	〃	〃	外面スス付着
93	G-7	Ⅳd層	〃	〃	にぶい褐	にぶい褐	横N	横N・N	粗	〃	〃
94	C-9	〃	〃	〃	黒褐	灰褐	〃	N	並	並	〃
95	H-9	〃	〃	〃	褐	灰褐	〃	〃	〃	〃	軟質
96	H-13	〃	〃	〃	灰黄褐	にぶい黄橙	横N・斜KN	N	〃	良	外面スス付着
97	E-9	〃	〃	〃	灰褐	にぶい橙	〃	〃	〃	並	外面指頭痕有
98	G-13	Ⅳb層	〃	〃	にぶい赤褐	にぶい褐	横N	〃	〃	〃	軟質
99	D-12	Ⅱb層	〃	〃	灰褐→黒褐	にぶい褐	〃	〃	〃	〃	外面スス付着
100	F-12	Ⅱd層	〃	〃	明褐灰	褐灰	斜KN・N	縦N	粗	〃	底部板状KN
101	H-10	Ⅳd層	〃	壺	黒→明赤褐	にぶい赤褐	横M	横N	並	〃	89とセット関係
102	〃	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	横N→横KN	横KN	〃	良	
103	C-8	Ⅳb層	〃	甕	橙	橙	横N・縦H	N	粗	並	外面スス付着
104	E-14	Ⅱd層	〃	〃	灰黄	灰	N	N	並	〃	内面コゲ付着
105	G-12	Ⅳd層	〃	〃	にぶい橙	黄灰	縦N	N	粗	〃	〃
106	E-10	〃	〃	鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横N	横N	〃	〃	
107	〃	〃	〃	〃	浅黄橙	〃	〃	〃	〃	〃	106と同一?
108	E-6	〃	〃	〃	〃	浅黄橙	丁寧N	KN?	並	良	内面工具痕有
109	E-9	〃	〃	壺	灰白→橙	橙	N	N	粗	〃	全面磨滅
110	C-11	〃	〃	高坏	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	〃	並	〃

表3　竪穴遺跡出土遺物観察表（3）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調 外器面	色調 内器面	調整 外器面	調整 内器面	胎土	焼成	備考
111	D-13	IVd層	弥生土器	高坏	浅黄橙	浅黄橙	N	N	粗	良	全面磨滅
112	H-6	IId層	〃	〃	灰黄褐	灰黄褐	縦KN	KN?	細	並	しぼり痕有
113	B-11	IVd層	〃	〃	灰白	灰白	N	斜KN	〃	〃	
114	F-13	IId層	〃	壺	灰白～暗灰	灰白～暗灰	KN	KN	並	〃	
115	I-5	〃	〃	蓋	明褐	明褐	N	N	粗	悪	脆弱
116	F-4	IVd層	土師質	高坏	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	細	良	全面磨滅
117	一括	一括	〃	〃	〃	灰	〃	〃	並	並	〃
118	F-5	IVd層	土器	深鉢?	〃	にぶい橙	横～斜KN	横KN	粗	〃	
119	F-4	IVc層	〃	〃	〃	〃	N→斜KN	N→縦KN	並	〃	外面スス付着
120	E-5	〃	〃	甕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	N	横KN	粗	〃	底部木葉痕有
121	E-11	IVj層	木製品	未完製材?	—	—	—	—	—	—	
122	H-14	IVd層	〃	木杭	—	—	—	—	—	—	未製品
123	F-11	IVj層	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
124	G-11	〃	〃	未完製材?	—	—	—	—	—	—	
125	H-14	〃	〃	木杭?	—	—	—	—	—	—	先端部黒変
126	E-7	IVb層	石製品	管玉	—	—	—	—	—	—	
127	F-9	IVd層	石器	剥片	—	—	—	—	—	—	黒曜石
128	G-2	〃	〃	石皿	—	—	—	—	—	—	敲打痕・擦痕有
129	E-4	〃	〃	〃?	—	—	—	—	—	—	被熱赤変
130	J-15	〃	〃	〃?	—	—	—	—	—	—	敲打痕有
131	I-8	IVc層	〃	打製土遺具	—	—	—	—	—	—	先端磨滅
132	D-8	IVd層	〃	〃	—	—	—	—	—	—	基部欠損
133	一括	一括	〃	〃	—	—	—	—	—	—	
134	〃	〃	〃	〃?	—	—	—	—	—	—	基部欠損
135	B-10	IVd層	〃	〃	—	—	—	—	—	—	先端磨滅
136	E-11	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	〃
137	E-6	〃	〃	敲石	—	—	—	—	—	—	敲打・研磨痕有
138	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	〃
139	H-17	IVf層	〃	磨製石鏃	—	—	—	—	—	—	側縁切込有
140	F-11	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	先端欠損
141	D-8	IVd層	〃	砥石?	—	—	—	—	—	—	四面使用
142	I-11	〃	〃	磨製石斧	—	—	—	—	—	—	使用痕・擦痕有
143	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	先端磨滅
144	F-6	IVc層	〃	〃	—	—	—	—	—	—	未製品
145	E-5	A-SA01・中	土師質	鍋	にぶい橙	橙	N	横N	粗	並	外面指頭痕有
146	〃	〃・〃	〃	〃	〃	にぶい橙	横N→縦H	横N→縦K	〃	〃	
147	〃	〃・下	〃	坏	〃	橙	ロクロN	ロクロN	並	良	ヘラ切
148	〃	〃・中	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃・下端K	〃	〃	〃	〃
149	〃	〃・下	〃	〃	〃	にぶい橙	ロクロN	〃	細	〃	〃後工具調整
150	〃	〃・中	〃	〃	淡橙	淡橙	〃	〃	並	並	ヘラ切
151	〃	〃・〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	粗	良	〃
152	〃	〃・〃	〃	〃	橙	浅黄橙～橙	〃・全面磨耗	〃	並	並	〃
153	〃	〃・一括	〃	〃	〃	橙	ロクロN	〃	〃	〃	〃?
154	〃	〃内PIT	〃	蓋	灰白	灰白	〃	〃	細	良	後全面明瞭
155	〃	〃・下	須恵器	坏	灰	〃	〃・下端K	〃	〃	〃	ヘラ切
156	〃	〃・〃	〃	皿	〃	灰	〃・下端K	〃	〃	〃	〃
157	〃	〃・〃	〃	蓋	〃	〃	ロクロN	〃	並	〃	
158	E-5 I-5	〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃・工具痕有	〃・縦N消	〃	並	外面自然釉
159	E-5	〃内PIT	土師質	鉢	にぶい橙	にぶい橙	N	布目圧痕	粗	〃	外面指頭痕有
160	〃	〃・一括	〃	〃	橙	橙	〃	〃	〃	〃	〃
161	〃	〃・下	〃	〃	にぶい黄橙	黄橙	〃	〃	並	〃	
162	〃	〃・〃	〃	〃	橙	橙	〃	〃	〃	良	外面指頭痕有
163	〃	〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗	並	
164	〃	〃・中	石器	磨石	—	—	—	—	—	—	敲打・研磨痕有
165	〃	A-SA12・下	土師質	塊	にぶい橙	にぶい橙	斜H→N消	N?	粗	並	

表4　肱穴遺跡出土遺物観察表（4）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調		調整		胎土	焼成	備考
					外器面	内器面	外器面	内器面			
166	E-6	A-SA12・下	土師質	坏?	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ロクロN	ロクロN	細	良	ヘラ切後KN
167	E-5	〃・中	〃	盤	浅黄橙～淡橙	浅黄橙	〃	〃	〃	並	〃?
168	〃	〃・一括	須恵器	紡錘車	灰	—	N	—	〃	良	自然釉
169	E-5　E-6	〃・下	〃	高台付椀	〃	灰	ロクロN・下端K	ロクロN	〃	〃	
170	E-5	〃・中	〃	坏	灰～灰白	〃	ロクロN	〃	並	〃	ヘラ切後KN
171	〃	〃・〃	〃	〃?	灰	〃	〃	〃	緻	〃	
172	〃	〃・下	土師質	鉢	浅黄橙	にぶい黄橙	N	布目圧痕	並	〃	
173	〃	〃・中	〃	〃	にぶい黄橙	浅黄橙	〃	〃	〃	〃	外面指頭痕有
174	〃	〃・〃	軽石製品	カマド支柱	—	—	—	—	—	—	緑青付着
175	E-6	A-SA03・床	土師質	甕	淡赤橙	浅黄橙	N・横H→N消	横N・縦K	粗	並	
176	〃	〃・一括	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	横KN	横KN・縦K	〃	〃	
177	〃	〃・下	〃	〃	浅黄橙	にぶい橙	横N(KN)	横N	〃	良	
178	〃	〃・床	〃	〃	にぶい橙	灰白	横KN・縦H	横N・縦K	〃	並	
179	〃	〃・〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	横N(KN)	横KN・縦K	並	良	
180	〃	〃・下	〃	〃	〃	〃	横N・横H→N消	横N・横H→N消	粗	堅	
181	〃	〃・床	黒色土器	高台付椀	〃	〃	ロクロN	ロクロN→横H	並	良	高台内丁寧N
182	〃	〃・一括	〃	〃	灰白～浅黄橙	黒	〃	M	細	並	〃
183	〃	〃・床	〃	〃?	灰白	〃	〃	〃	並	良	高台内N
184	〃	〃・〃	〃	〃?	浅黄橙	〃	〃	〃(光沢有)	粗	〃	高台削N
185	〃	〃・一括	土師質	鉢	にぶい橙	にぶい橙	N	N・布目圧痕	〃	〃	外面指頭痕有
186	E-4	A-SA04・上	〃	甕	浅黄橙	浅黄橙～橙	〃	N	〃	並	
187	F-5	〃・一括	〃	〃	にぶい橙	明赤褐	横N	横N	〃	〃	
188	E-4	〃・床	〃	坏	浅黄橙	浅黄橙	ロクロN・下端K	ロクロN	並	良	ヘラ切
189	E-5	〃・下	〃	〃	淡橙	〃	〃・〃	〃	緻	並	底部糠刻有
190	F-5	A-SA05・括	〃	甕	にぶい橙	にぶい黄橙	横N	横N	粗	〃	
191	〃	〃・一括	〃	鉢	橙	橙	N	布目圧痕	〃	〃	
192	〃	〃・〃	〃	高台付坏	灰白～褐灰	灰白	ロクロN・下端K	ロクロN	緻	良	高台内N
193	E-6	A-SA11・括	〃	甕	浅黄橙～灰白	浅黄橙～灰白	横H	横H	〃	〃	外面スス付着
194	E-7	〃・下	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	横N	横N・斜K	粗	〃	外面指頭痕有
195	E-6	〃・〃	〃	坏	浅黄橙	浅黄橙	ロクロN・下端K	ロクロN	並	〃	体部比線有
196	〃	〃・〃	〃	〃	灰白	浅黄橙	ロクロN	ロクロN	細	〃	ヘラ切
197	〃	〃・一括	〃	〃	浅黄橙	橙	〃→N	〃	並	〃	〃・指頭痕有
198	〃	〃・〃	〃	高台付坏?	灰白	灰白	ロクロN	〃	緻	〃	
199	〃	〃・〃	黒色土器	〃?	にぶい橙	黒	〃	横M	並	〃	
200	E-6	A-SA15・括	土師質	甕	浅黄橙	浅黄橙	横N	横N	粗	〃	
201	E-7	〃・一括	〃	〃	〃	灰白	〃	〃	〃	〃	全面磨滅
202	E-6	A-SA02・中	弥生土器	〃	にぶい赤褐	にぶい赤褐	〃	丁寧N→斜H	粗	〃	口部縁回線有
203	〃	〃・下	土師質	〃	にぶい橙	橙	N・H→N消	横H・縦K	並	並	
204	〃	〃・中	〃	坏	浅黄橙	〃	ロクロN	ロクロN	〃	良	ロクロ痕明瞭
206	〃	〃・下	〃	蓋	〃	浅黄橙	〃,	〃	粗	〃	
206	〃	〃・〃	須恵器	坏	灰	灰	ロクロN・下端K	ロクロN→N	緻	〃	外面(真万)墨書
207	〃	〃・一括	〃	蓋	〃	〃	横K・ロクロN	ロクロN	〃	並	
208	〃	〃・下	〃	〃	〃	〃	ロクロN	〃	〃	〃	内外面自然釉
209	〃	〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	外面自然釉
210	〃	〃・一括	土師質	鉢	灰白～橙	橙	N	N・布目圧痕	〃	良	〃
211	F-6	A-SA06・床	〃	坏	にぶい橙	〃	ロクロN	ロクロN	粗	並	
212	E-6	〃・下	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	良	ヘラ切
213	F-6	〃・〃	〃	皿	淡橙	浅黄橙	〃	〃	緻	〃	底部工具痕有
214	〃	〃・〃	須恵器	盤	灰	灰	〃	ロクロN→N	〃	並	
215	〃	〃・一括	土師質	鉢	橙	橙	N	N・布目圧痕	並	良	外面指頭痕有
216	F-5	〃・〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	布目圧痕	緻	並	硬質
217	E-6	〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗	〃	
218	E-6	〃・〃	〃	〃	淡橙	淡橙	〃	N	並	良	外面指頭痕有
219	E-6	A-SA07・下	〃	甕	浅黄橙	浅黄橙	横N	横N	粗	〃	
220	〃	〃・床	〃	鉢?	にぶい橙	にぶい橙	横N・横N→縦H	横H・斜～横K	〃	並	

表５　肱穴遺跡出土遺物観察表（５）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調		調整		胎土	焼成	備考
					外器面	内器面	外器面	内器面			
221	F-6	A-SA07・下	土師質	甕	にぶい橙	にぶい橙	横N・横KN→縦H	横N・斜K	並	並	体部ススス付着
222	E-6	〃・〃	〃	坏	にぶい黄橙	浅黄橙～灰白	ロクロN	ロクロN	細	良	見込「福」線刻
223	F-6	〃・〃	須恵器	甕?	黒	灰	横N	横N	〃	並	波状櫛描文有
224	E-4～6	〃・〃	土師質	鉢	赤褐	橙	N	N・布目圧痕	粗	良	外面指頭痕有
225	〃	〃・〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	布目圧痕	〃	並	〃
226	〃	〃・〃	〃	〃	暗褐	赤褐	〃	〃	並	良	〃
227	〃	A-SA09・括	〃	甕	にぶい橙	にぶい黄橙	横N・縦H	横N・縦K	粗	並	外面ススス付着
228	E-5	〃・〃	〃	〃	灰白	灰白	横N	横N	並	良	
229	E-6 D-7 G-6	〃・中	〃	〃	橙	橙	N→縦K	N→H	〃	〃	内外指頭痕有
230	E-6	〃・下	〃	壷	浅黄橙～赤橙	浅黄橙	ロクロN	ロクロN	粗	〃	ヘラ切
231	〃	〃・〃	須恵器	坏	灰白	灰白	〃	〃	細	〃	底部「中」線刻
232	〃	〃・一括	〃	壷	灰褐	灰	ロクロN・横K	〃	並	並	内面ヘラ起り?
233	〃	〃・下	黒色土器	坏	にぶい黄橙	黒	ロクロN・M	M	〃	良	外面ススス付着
234	〃	〃・一括	土師質	鉢	淡橙	淡橙	N	N・布目圧痕	〃	〃	
235	〃	〃・中	石器	磨石	—	—	—	—	—	—	被熱黒変
236	〃	〃・下	木製品	板材?	—	—	—	—	—	—	
237	E-5	A-SA14・下	土師質	甕	にぶい橙	にぶい橙	横N・横～縦H	横N→縦H	粗	並	
238	〃	〃 内PIT	〃	〃	浅黄橙～橙	浅黄橙	横N	横N	細	良	
239	E-6	〃・下	〃	坏	浅黄橙	浅黄橙	ロクロN	ロクロN	〃	〃	外面やや摩滅
240	〃	〃・〃	〃	皿?	灰白～橙	にぶい橙	〃	〃	〃	〃	いびつに変形
241	〃	〃・中	〃	坏	浅黄橙	灰白	〃	〃	〃	〃	ヘラ切
242	〃	〃・下	〃	鉢	橙	橙	N	N・布目圧痕	〃	〃	外面指頭痕有
243	〃	〃・一括	〃	〃	黄橙～暗褐	黄橙	〃	〃・〃	並	〃	外面磨滅
244	E-6	A-SA10・下	石器	磨製石斧	—	—	—	—	—	—	両面研磨
245	〃	〃・〃	土師質	皿?	橙	橙	ロクロN	ロクロN	粗	並	底部粗いW
246	〃	〃・一括	〃	坏	にぶい黄橙	〃	〃	〃	並	良	ヘラ切後丁寧N
247	〃	〃・下	〃	高台付壊?	浅黄橙～橙	〃	〃	〃	〃	〃	高台剥N
248	〃	〃・一括	須恵器	高台付坏?	灰白～黄灰	灰白	〃	〃	〃	並	〃・外面白熱輪
249	〃	〃・下	黒色土器	高台付皿?	にぶい黄橙	黒	〃	縦M	細	良	高台内丁寧IN
250	〃	〃・一括	土師質	鉢	淡橙	浅黄橙	N	N・布目圧痕	〃	〃	
251	E-4 F-4 F-6	A-SA08・括	〃	甕	灰白	にぶい橙	N・輪積痕明瞭	横N	粗	並	口縁内外馬変
252	E-5 D-7	〃・下	〃	〃	浅黄橙～橙	にぶい黄橙	横N・縦K	横N→横K・横H	〃	〃	輪積痕明瞭
253	F-4	〃・一括	〃	坏	浅黄橙	浅黄橙	ロクロN	ロクロN	並	良	ヘラ切
254	〃	〃・〃	〃	〃	浅黄橙～橙	にぶい褐	〃	〃	〃	〃	〃
255	〃	〃・下	〃	高台付坏?	淺黄橙	浅黄橙	〃	〃	〃	〃	高台剥N
256	F-5	〃・上	〃	〃	浅黄橙～灰黄	〃	〃	〃	〃	並	高台内丁寧IN
257	F-4	〃・下	須恵器	〃	灰白～褐灰	灰	〃	〃	〃	〃	高台内目積痕
258	〃	〃・一括	土師質	鉢	褐灰	にぶい橙	N	N・布目圧痕	〃	〃	
259	F-5	〃・〃	黒色土器	椀	浅黄橙～褐灰	黒	ロクロN	M	細	良	切離後丁寧IN
260	〃	A-SA16・括	土師質	坏	にぶい黄橙	浅黄橙	〃	ロクロN	〃	〃	内外ススス付着
261	〃	〃・〃	須恵器	甕	褐灰	灰褐	格子目→平行T	同心円→平行AG	〃	並	
262	〃	〃・〃	黒色土器	高台付壊?	橙	黒	ロクロN	M	〃	〃	高台内丁寧IN
263	〃	〃・〃	土師質	鉢	〃	橙	N	N・布目圧痕	並	〃	
264	E-4	A-SA13・上	縄文土器	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横N→横KN	横～斜KN	〃	〃	
265	E-4 E-6	〃・下	土師質	〃	灰白	灰白	横N	横N	粗	良	
266	E-4	〃 内PIT	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	〃	並	体部粘土付着
267	〃	〃	〃	〃	灰白	灰白	〃	〃	〃	〃	
268	〃	A-SA13・下	〃	坏	橙	浅黄橙～黄橙	ロクロN	ロクロN	細	〃	ヘラ切
269	〃	〃 内PIT	〃	〃?	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	〃	良	
270	〃	〃・中	土師質	壊	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃・下縦～底K	〃	〃	並	
271	〃	〃・〃	〃	高台付皿	浅黄橙	浅黄橙	ロクロN	〃	並	良	ススス付着
272	〃	〃・下	土師質	鉢	暗褐	赤褐	N	布目圧痕	粗	並	
273	〃	〃・〃	軽石製品	—	—	—	—	—	—	—	金属器擦痕有
274	〃	〃・中	〃	カマド支柱	—	—	—	—	—	—	被熱黄赤変
275	D-9	A-SB01PIT	土師質	甕	橙	にぶい橙	KN→縦H	横N・縦K	粗	良	

表6　肱穴遺跡出土遺物観察表（6）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調		調整		胎土	焼成	備考
					外器面	内器面	外器面	内器面			
276	C-9	A-SB01PIT	土師質	坏	浅黄橙	にぶい橙	ロクロN・下端K	ロクロN	並	良	ヘラ切
277	E-5	A-SB02PIT	〃	〃	灰白～浅黄橙	浅黄橙	ロクロN→N	ロクロN→N	〃	〃	外面「｜」墨書
278	〃	〃	〃	〃	浅黄橙	黄橙	ロクロN	ロクロN	〃	〃	全面磨滅
279	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙	〃	〃	〃	〃	〃
280	〃	〃	〃	〃?	橙	にぶい橙	〃	〃	粗	並	〃
281	〃	〃	〃	皿	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	並	良	〃
282	〃	〃	〃	坏?	〃	浅黄橙～灰白	〃	〃	〃	〃	外面判読不能墨書
283	〃	〃	〃	蓋	橙	浅黄橙～橙	〃	〃	細	並	外面やや磨滅
284	〃	〃	須恵器	〃	灰～浅黄橙	灰～浅黄橙	〃	〃	〃	〃	庇内側工具痕
285	〃	〃	黒色土器	坏	にぶい橙	黒	〃→M	縦M	〃	良	ヘラ切
286	〃	〃	〃	高台付皿?	にぶい黄橙	〃	ロクロN	M	並	〃	内面光沢有
287	E-5　F-3	〃	土師質	鉢	にぶい橙	黄橙	N	布目圧痕	〃	〃	外面指頭痕有
288	E-5	〃	〃	〃	橙	橙	〃	〃	〃	並	
289	〃	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	粗	良	外面指頭痕有
290	〃	〃	〃	〃	灰褐	赤褐	〃	N・布目圧痕	〃	並	外面自然釉
291	〃	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	布目圧痕	粗	良	
292	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	〃	外面指頭痕有
293	〃	〃	〃	〃	橙	橙	〃	〃	粗	〃	〃
294	D-7	A-SB06PIT	須恵器	高台付坏	灰	灰	ロクロN	ロクロN	細	〃	高台際N
295	F-4	A-SB07PIT	土師質	甕	灰白	灰白	横N	横N	粗	〃	
296	〃	〃	〃	坏?	橙	橙	ロクロN	ロクロN	〃	悪	
297	E-4	〃	〃	高台付埦	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	〃	細	良	高台内丁寧N
298	F-4	〃	〃	鉢	〃	〃	N	N・布目圧痕	並	〃	外面指頭痕有
299	〃	〃	〃	〃	橙	橙	〃	布目圧痕	〃	〃	
300	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	
301	C-7	A-PIT11	縄文土器	浅鉢?	浅黄橙	灰黄褐	横N	横N	細	〃	
302	D-7	A-PIT37	土師質	甕	〃	にぶい黄橙	〃	〃・横N→KN	粗	〃	内面工具痕有
303	E-4　F-4	A-PIT83	〃	鉢?	にぶい橙	にぶい橙	N	N	〃	〃	外面剥落磨滅
304	F-4	A-PIT41	〃	甕	浅黄橙	浅黄橙	横N	横N	〃	良	
305	E-9	A-PIT2	〃	〃	〃	橙	〃	〃	〃	並	全面磨滅
306	F-4	A-PIT66	〃	高台付坏?	にぶい橙	にぶい橙	ロクロN	ロクロN	細	良	外面判読不能墨書
307	E-5	A-PIT54	〃	坏	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	〃	〃	ヘラ切
308	E-4	A-PIT44	〃	〃?	橙	橙	〃	〃	〃	〃	
309	〃	A-PIT69	〃	〃?	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
310	F-4	A-PIT84	〃	〃?	灰白	灰白	〃	〃	並	並	ヘラ切
311	C-11	A-PIT20	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	〃	〃	全面磨滅
312	D-8	A-PIT1	〃	〃	〃	〃	ロクロN・下端K	〃	細	良	
313	F-3	A-PIT91	〃	蓋	橙	〃	ロクロN	〃	〃	〃	
314	C-10	A-PIT22	須恵器	坏	灰黄褐	にぶい黄橙	〃	〃	〃	悪	外面自然釉
315	F-4	A-PIT42	土師質	蓋	浅黄橙	浅黄橙	〃.	〃	〃	良	内面磨滅
316	〃	A-PIT90	黒色土器	埦?	にぶい橙	黒	〃	横M	並	〃	
317	〃	A-PIT78	土師質	鉢	橙	褐灰	N	N・布目圧痕	粗	並	
318	E-5	A-PIT51	〃	〃	にぶい橙	橙	〃	布目圧痕	〃	〃	
319	F-4	A-PIT46	石器	磨石?	—	—	—	—	—	—	先端使用痕有
320	H-6	A-PIT内	木製品	柱根	—	—	—	—	—	—	
321	F-4	A-PIT89	土師質	甕	にぶい橙	にぶい橙	横N	横N	並	良	
322	〃	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	粗	〃	
323	E-4	A-PIT45	〃	鉢	橙	橙	N	布目圧痕	〃	〃	
324	〃	〃	〃	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横N・横H	横N・横N→縦K	〃	並	
325	〃	〃	〃	鉢	にぶい橙	にぶい橙	N	布目圧痕	〃	〃	外面指頭痕有
326	F-4	A-PIT67	〃	坏	橙	橙	ロクロN	ロクロN	細	良	ヘラ切・全面磨滅
327	〃	〃	〃	鉢	にぶい橙	にぶい橙	N	布目圧痕	粗	並	
328	E-10	A-SC06・上	縄文土器	甕	にぶい褐	にぶい褐	横N→粗いM	横N→粗いM	並	良	外面スス付着
329	D-10	A-SC07・中	土師質	〃	にぶい橙	灰白	横N・横N→縦H	横N・横N→縦K	〃	〃	
330	J-3	A-SW01・括	〃	坏の転用品	〃	にぶい橙	ロクロN	ロクロN	粗	並	穿孔途中の痕跡有

表7　肱穴遺跡出土遺物観察表（7）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調 外器面	色調 内器面	調整 外器面	調整 内器面	胎土	焼成	備考
331	J-3	A-SW01・括	須恵器	甕	黒褐	灰白	横N→斜KN	横N	細	並	内外面自然釉
332	〃	〃・〃	〃	高台付坏?	灰白	〃	ロクロN	ロクロN	並	良	高台内N
333	J-4	A-SW02・括	土師質	皿	〃	〃	〃	〃	細	〃	外面被熱黒変
334	〃	〃	須恵器	高坏	〃	灰	〃	〃	粗	〃	
335	G-3	A-SW？・括	〃	坏	〃	〃	〃	〃	細	〃	外面自然釉
336	〃	〃・〃	〃	〃	灰	〃	〃	〃	並	並	ヘラ切
337	G-2	〃・〃	〃	壺	灰白	〃	〃	〃	〃	〃	外面自然釉
338	G-3	〃・〃	土師質	鉢	暗褐	褐	N	N・布目圧痕	粗	〃	外面指頭痕有
339	G-2	中世SW	〃	甕	浅黄橙	浅黄橙	横N	横N・斜K	〃	〃	
340	I-5	〃	黒色土器	高台付坏?	灰白	黒	ロクロN	M	並	〃	高台内N
341	H-7	近世SP01	土師質	坏	にぶい黄橙	浅黄橙	〃	ロクロN	細	良	見込「立」線刻
342	〃	〃	〃	高台付坏?	浅黄橙	〃	〃	〃	並	並	高台内N
343	〃	〃	須恵器	甕	灰黄褐	褐灰	〃	〃	〃	〃	外面自然釉
344	J-7	近世SW02	土師質	坏	浅黄橙	灰白	〃	〃	粗	良	底部「X」ヘラ記号
345	E-8	近世PIT	黒色土器	高台付坏?	にぶい橙	黒	〃	M	〃	並	高台内N
346	G-11	近世SD44	土師質	坏	浅黄橙	灰白	〃	ロクロN	並	〃	ヘラ切
347	J-6	〃 SD02	〃	高台付鉢?	にぶい黄橙	にぶい橙	〃	〃	〃	良	外面「ヨ?」墨書
348	H-12	〃 SD54	須恵器	坏	灰黄褐	灰黄褐	〃	〃	〃	悪	外面判読不能墨書
349	E-5	IVc層	土師質	甕	浅黄橙	浅黄橙～褐灰	横N	横N・横K	〃	並	
350	D-11	IVd層	〃	〃	〃	〃	〃	〃・〃	〃	良	
351	F-4	II d層	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃・横H	〃・横→斜K	粗	並	
352	C-11	IVc層	〃	〃	〃	灰白	〃・斜H	〃・横K	〃	良	
353	E-7	〃	〃	〃	橙	橙	横N	〃・縦K	並	〃	外面指頭痕有
354	D-7	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	横N	粗	〃	外面スス付着
355	E-4	〃	〃	〃	にぶい赤褐	にぶい黄橙	〃	〃	並	並	
356	E-7	IVd層	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃・横K	粗	良	
357	〃	〃	〃	〃	橙	橙	〃	横N	〃	並	
358	C-11	〃	〃	〃	にぶい橙	〃	〃	〃・斜K	〃	〃	
359	G-3	〃	〃	〃	淡赤橙	〃	〃?	〃?・〃	〃	悪	
360	一括	一括	〃	〃	にぶい橙	灰黄橙	〃・縦H→横H	〃・縦H	〃	〃	
361	D-7	IVd層	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃・横H→斜H	〃・縦K	並	並	
362	E-5	IVc層	〃	〃	灰白～淡橙	灰白～淡橙	横N	横N	粗	〃	全面磨滅
363	D-6	IVd層	〃	〃	にぶい橙	灰黄褐	〃	〃・斜N	〃	〃	外面スス付着
364	E-8	IVc層	〃	〃	灰白～浅黄橙	灰白～浅黄橙	〃	横K	並	良	
365	G-3	IVd層	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	〃・横～斜K	〃	〃	
366	F-8	〃	〃	〃	橙	橙	〃	〃・縦K	粗	〃	
367	D-7 B-11	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃・〃	〃	並	
368	E-5	IVc層	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	KN	横N→斜K	〃	良	
369	E-10	IVd層	〃	〃	浅黄橙～淡橙	にぶい黄橙	横N	横N・縦K	〃	〃	
370	C-11 D-11	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃・丁寧N	〃・横H	〃	〃	
371	G-2	〃	〃	〃	〃	〃	横N	〃・縦K	〃	並	内面磨滅
372	C-11	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃・横K	並	良	
373	D-11	〃	〃	〃	灰白	灰白	縦K	横K	粗	〃	
374	H-11	IVc層	〃	〃	にぶい橙	浅黄橙	横N	横N・横K	並	並	
375	D-10	〃	〃	〃	浅黄橙	〃	〃	〃・〃	〃	良	
376	E-10 D-11	〃	〃	〃	〃	灰白	横N→縦H	横N→縦K	粗	〃	全面磨滅
377	D-11	IVd層	〃	〃	淡橙～灰白	浅黄橙～灰白	〃・〃	〃・〃	〃	並	内面スス付着
378	F-7	〃	〃	〃	浅黄橙～灰白	浅黄橙	横N	横N・縦K・M	並	良	
379	D-11	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃・平行N	横N・同心円AG	粗	〃	須恵器の調整
380	F-4	IVc層	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	横N	横KN	〃	〃	
381	B-11	IVd層	〃	〃?	〃	〃	縦N	斜K	〃	並	外面指頭痕有
382	F-6	〃	〃	〃	淡橙	〃	N	N	〃	〃	
383	D-11	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	〃	〃	
384	B-11	〃	〃	〃	にぶい赤橙	浅黄橙～橙	横N・縦H	横K→縦KN	並	良	
385	I-2	〃	〃	鉢	浅黄橙	浅黄橙	ロクロN	ロクロN	粗	並	ヘラ切

表8　肱穴遺跡出土遺物観察表（8）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調 外器面	色調 内器面	調整 外器面	調整 内器面	胎土	焼成	備考
386	B-11　D-11	IVb層	土師質	大形椀or鉢	浅黄橙	浅黄橙	ロクロN	ロクロN	粗	並	赤色沈着物有
387	D-7　E-8	IVd層	〃	鉢?	灰白	灰白	横N	横N	〃	〃	
388	G-7	IVc層	〃	甕	灰白～浅黄橙	灰白～浅黄橙	ロクロN	ロクロN	〃	〃	
389	E-8	IVd層	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	細	良	
390	E-5	IVc層	〃	〃	〃	〃	ロクロN・上端K	〃	粗	〃	内面「×」ヘラ記号
391	D-11	IVd層	〃	〃	浅黄橙～淡橙	浅黄橙～淡橙	ロクロN	ロクロN	並	〃	外面判読不能墨書
392	E-5	IVc層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗	並	赤焼の須恵器?
393	〃	〃	〃	〃	橙～黄橙	橙	〃	〃	並	〃	ヘラ切
394	G-4	〃	〃	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	ロクロN・上端K	〃	〃	良	底部K
396	E-7	IVd層	〃	坏	橙	橙	ロクロN・下端K	〃	粗	並	ヘラ切
396	D-11	IVc層	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	ロクロN	〃	〃	〃	
397	C-11	IVd層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良	底部工具痕有
398	E-4	〃	〃	〃	灰白～浅黄橙	〃	〃	〃	〃	並	底部に工具調整痕
399	C-11	IVc層	〃	〃	黄灰～浅黄橙	〃	〃	〃	並	〃	全面撫調
400	〃	〃	〃	〃	浅黄橙	橙	〃	〃	粗	〃	底部板状圧痕有
401	E-8	IVd層	〃	〃	浅黄橙～橙	浅黄橙	〃	〃	〃	〃	ヘラ切
402	C-11	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙～淡橙	〃・底部手持ちK	〃	細	良	底部スス付着
403	I-2	IVc層	〃	〃	にぶい黄橙	浅黄橙	〃	〃	粗	並	内面赤色顔料付着
404	D-6	IVb層	〃	〃	浅黄橙～橙	〃	ロクロN	〃	〃	〃	ヘラ切
405	E-8	IVc層	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	並	良	ヘラ切後N
406	C-11	IVb層	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	〃	並	〃
407	D-5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗	良	ヘラ切後KN
408	E-5	IVc層	〃	〃	橙	にぶい橙	〃	〃	細	〃	ヘラ切
409	C-11	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	〃	並	並	見込「十」線刻花押
410	D-11	IVd層	〃	〃	淡橙～灰白	浅黄橙	〃	〃	粗	〃	底部格子目敲痕
411	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	〃	並	良	底部「・」墨書
412	F-10	IVc層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	外面判読不能墨書
413	〃	〃	〃	〃	淡黄橙	淡黄橙	〃	〃	〃	〃	〃
414	D-11	IVd層	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	〃	〃	並	底部判読不能墨書
415	I-7	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	〃	良	外面「ノ」墨書
416	E-7	IVc層	〃	〃	灰白	灰白	〃	〃	細	〃	ヘラ切後KN
417	E-8	〃	〃	〃	にぶい橙	浅黄橙	〃	〃	並	並	ヘラ切
418	B-11	〃	〃	〃	浅黄橙～橙	橙	〃	〃	粗	良	底部に工具調整痕
419	D-11	IVd層	〃	〃	明褐灰	にぶい橙	〃	〃	〃	〃	ヘラ切
420	F-4	IVc層	〃	〃	灰白～浅黄橙	灰白～浅黄橙	〃	〃	細	〃	見込「酒」墨書
421	E-6	IVd層	〃	〃	〃	浅黄橙	〃	〃	〃	〃	外面判読不能墨書
422	F-5	IVc層	〃	〃	灰白	〃	〃	〃	並	〃	〃
423	I-2	〃	〃	〃	〃	灰白	ロクロN・下端K	〃	細	〃	底部判読不能墨書
424	C-11	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	ロクロN	〃	粗	並	体部下端工具切込
425	F-7	〃	〃	〃	灰白	灰白	ロクロN・下端K	〃・不定方向N	並	良	外面判読不能墨書
426	F-10	〃	〃	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	ロクロN	〃・〃	細	〃	外面「」墨書
427	F-6	IVd層	〃	〃	にぶい黄橙	〃	〃	〃・〃	並	〃	〃
428	G-2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ロクロN	粗	〃	底部赤色顔料付着
429	C-11	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	〃	〃	外面体部工具切込
430	E-8	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	並	〃	底部板状圧痕有
431	C-11	〃	〃	〃	〃	灰白	〃	〃	細	〃	貼付円盤状高台
432	〃	〃	〃	〃	灰白～浅黄橙	灰白～浅黄橙	〃	〃	並	並	〃
433	E-5	IVc層	〃	〃	〃	浅黄橙	〃	〃	〃	良	口縁部スス付着
434	〃	〃	〃	〃	にぶい橙	淡橙	〃	〃	粗	並	ヘラ切後「丁寧N
435	F-3	IVb層	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	〃	〃	口縁部スス付着
436	G-2	IVc層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	良	内面工具切込
437	E-5	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	粗	〃	
438	F-5	〃	〃	〃	橙	橙	〃	〃	〃	並	
439	E-9	〃	〃	〃	淡橙	浅黄橙	〃	〃	〃	良	
440	F-7	IVb層	〃	〃	浅黄橙	〃	〃	〃	並	〃	ヘラ切・外面煤跡

表9　肱穴遺跡出土遺物観察表（9）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調		調整		胎土	焼成	備考
					外器面	内器面	外器面	内器面			
441	F-4	IVd層	土師質	坏	淡橙	淡橙	ロクロN	ロクロN	粗	並	内面ロクロ痕明瞭
442	F-8	IVb層	〃	〃	灰白	灰白	〃	〃	並	良	底部板状圧痕有
443	D-11	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	ロクロN・下端K	〃	〃	並	ヘラ切
444	E-5	IVf層	〃	〃	橙	橙	〃・〃	〃	緻	良	〃
445	E-6	IVd層	〃	〃	〃	〃	〃・〃	〃	〃	〃	〃
446	B-11	IVc層	〃	〃	にぶい橙	浅黄橙	ロクロN	〃	粗	並	〃
447	E-9	〃	〃	〃	〃	にぶい橙	〃	〃	並	〃	〃
448	D-11	IVf層	〃	〃	灰白	灰白	〃	〃	緻	良	底部板状圧痕有
449	E-8	IVc層	〃	〃	橙	橙	〃	〃	並	並	ヘラ切
450	F-12	〃	〃	〃	浅黄橙	淡橙	〃	〃	〃	〃	外面スス付着
451	F-5	〃	〃	〃	淡橙	〃	〃	〃	〃	良	ヘラ切後KN
452	G-3	〃	〃	〃	橙	橙	〃	〃	〃	〃	〃
453	G-2	〃	〃	〃	〃	浅黄橙	〃	〃	緻	〃	〃
454	J-4	〃	〃	〃?	灰白	灰白	〃	〃	〃	〃	糸切？
455	G-3	〃	〃	高台付壺?	にぶい橙	にぶい橙	ロクロN・下端K	〃	粗	並	高台内N
456	F-4	IVd層	〃	〃	〃	〃	ロクロN	〃	〃	〃	高台開N
457	B-11	〃		〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	並	〃	〃
458	D-7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	高台内N
459	G-2	IVc層	〃	〃	橙	橙	〃	〃	粗	〃	高台貼付痕明瞭
460	E-8	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	並	良	外面剥離不能墨書
461	一括	一括	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	粗	並	内面スス付着
462	E-8	IVc層	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	緻	〃	高台内N
463	G-3	IVd層	〃	〃	橙	橙	〃	〃	並	〃	〃
464	D-6	〃	〃	高台付坏?	灰白～黄灰	にぶい橙	ロクロN・下端K	〃	緻	〃	〃
465	D-11	IVc層	〃	〃	灰白	灰白	ロクロN	〃	並	良	高台貼付痕明瞭
466	E-5	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	粗	並	高台内N
467	E-6	IVd層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	緻	〃	見込「佐」線刻
468	C-11	〃	〃	〃	橙	橙	〃	〃	粗	〃	高台内N
469	F-6	〃	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	〃	良	〃
470	F-5	IVc層	〃	〃	灰白	灰白	〃	〃	並	〃	高台内丁寧N
471	F-6	〃	〃	〃	〃	〃	一	〃	緻	〃	ヘラ切後KN
472	F-9	IVb層	〃	〃	浅黄橙	にぶい黄橙	ロクロN	〃	並	並	内面スス付着
473	G-7	IVd層	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	〃	良	高台内丁寧N
474	D-7	IVb層	〃	〃	〃	橙	〃	〃・部分的にM	粗	並	〃
475	D-8	IVd層	〃	耳盤	赤橙～橙	灰黄褐～橙	〃→丁寧N	M	並	〃	部分的に黒変
476	H-12	〃	〃	皿	橙	橙	ロクロN	ロクロN	粗	〃	切離後丁寧N
477	E-5～7	〃	〃	〃	浅黄橙～淡橙	浅黄橙	〃	〃	〃	〃	ヘラ状工具痕有
478	E-9	IVb層	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	〃	〃	〃	口縁スス付着
479	E-12	IVc層	黒色土器	坏	浅黄橙	黒	〃	縦M	並	良	内面光沢有
480	F-7	〃	〃	〃	灰白	〃	〃	〃	緻	〃	外面剥離不能墨書
481	E-9	IVd層	〃	〃	浅黄橙～黄灰	〃	〃	M	並	〃	内面暗文有
482	F-7	IVc層	〃	〃	灰白	〃	〃	縦M	緻	〃	外面剥離不能墨書
483	E-7	IVd層	〃	〃	〃	〃	〃	M	並	〃	内面光沢有
484	E-9	IVc層	〃	〃	にぶい黄橙	〃	〃	〃	粗	〃	ヘラ切後N
485	D-6	IVd層	〃	高台付坏	にぶい橙	橙	ロクロN・下端K	〃	並	並	高台内N
486	F-4	〃	〃	〃?	にぶい赤褐	黒	ロクロN	縦M	緻	良	外面「吉?」墨書
487	D-7	〃	〃	〃?	にぶい黄橙	〃	〃	横M	並	〃	内面光沢有
488	C-11	〃	〃	〃?	にぶい橙	〃	〃	M	粗	並	〃
489	I-9	〃	〃	〃?	にぶい黄橙	〃	〃	〃	並	良	高台内N
490	E-9	〃	〃	〃?	〃	〃	〃	〃	緻	〃	高台内丁寧N
491	E-7	〃	〃	〃?	浅黄橙～橙	〃	〃	〃	並	並	高台内N
492	J-14	〃	〃	〃?	灰黄	〃	〃	〃	〃	良	〃
493	B-11	〃	〃	〃?	にぶい橙	〃	〃	〃	〃	〃	高台内丁寧N
494	G-3	IVc層	〃	〃?	明褐	灰	〃	〃	緻	並	高台内N
495	I-5	II d層	〃	〃?	灰白	黒	〃	〃	〃	〃	高台内丁寧N

表10　肱穴遺跡出土遺物観察表（10）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調 外器面	色調 内器面	調整 外器面	調整 内器面	胎土	焼成	備考
496	F-6	IVd層	黒色土器	高台付坏	浅黄橙	黒	ロクロN	M	並	良	高台内N
497	G-5	IVc層	〃	高台付皿?	にぶい黄橙	〃	〃	横M	〃	並	高台内丁寧N
498	G-3	IVd層	〃	〃?	明褐灰	〃	〃	M	〃	〃	〃
499	H-6	IVc層	〃	〃?	浅黄橙～灰白	〃	〃	〃	細	良	〃
500	E-7	IVd層	〃	高台付椀?	浅黄橙	〃	〃	〃	並	〃	高台内N
501	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
502	〃	〃	〃	〃	灰白	〃	〃	〃	〃	〃	〃
503	H-9	IVc層	須恵器	坏	灰	灰	〃	ロクロN	〃	〃	ヘラ切
504	D-8	〃	〃	〃	灰白	灰白	〃	〃	粗	並	〃
505	C-11	IVd層	〃	〃	灰	灰オリーブ	〃 (KN?)	〃 (KN?)	並	〃	ヘラ切後N
506	〃	IVc層	〃	〃	黄灰	灰白	〃	〃	細	〃	外面自然釉
507	D-11	IVd層	〃	〃	灰～灰白	灰～灰白	ロクロN・下端K	〃	粗	〃	ヘラ切後N
508	F-7	IVc層	〃	〃	灰	灰	〃→丁寧KN	〃	並	良	ヘラ切後KN
509	C-11 D-11	IVc・IVd層	〃	〃	にぶい褐	にぶい褐	ロクロN・下端K	〃	〃	悪	〃
510	C-11	IVd層	〃	〃	灰	灰	ロクロN	〃	細	良	
511	G-6	IVc層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	〃	ヘラ切後N?
512	E-7	IVd層	〃	〃	〃	〃	ロクロN・下端K	〃	〃	〃	ヘラ切後KN
513	D-11	〃	〃	〃	〃	〃	〃・〃	〃	〃	〃	ヘラ切後N
514	G-3	IVc層	〃	〃	橙	橙	ロクロN	〃	〃	悪	赤焼の須恵器?
515	E-8	IVd層	〃	〃	灰	灰	〃	〃	細	良	外面自然釉
516	D-11	IVc層	〃	〃	にぶい褐	にぶい褐	ロクロN・下端K	〃	粗	並	切離後丁寧KN
517	C-11	〃	〃	〃	〃	にぶい橙	ロクロN	〃	〃	悪	赤焼の須恵器?
518	D-11	IVd層	〃	盤	灰	灰	横K・ロクロN	ロクロN	並	並	
519	G-7	IVf層	〃	〃	灰白	〃	横K	〃	粗	〃	
520	F-10	IVd層	〃	〃	黄灰	〃	ロクロN	〃	細	良	
521	F-3	〃	〃	〃	明褐灰	にぶい黄橙	ロクロN・横K	〃	並	悪	赤焼の須恵器?
522	F-10	〃	〃	〃	青灰	青灰	〃・〃	〃	細	良	
523	E-8	IVc層	〃	〃	灰	灰白	〃・〃	〃	〃	〃	
524	E-5	〃	〃	〃	灰白	〃	ロクロN	〃	並	〃	
525	D-6	〃	〃	〃	灰	灰オリーブ	ロクロN・横K	〃	〃	並	
526	E-8	IVd層	〃	〃	黄灰	黄灰	ロクロN	〃	細	〃	
527	〃	〃	〃	〃	灰白	にぶい黄橙	ロクロN・横K	〃	並	悪	赤焼の須恵器?
528	E-5	IVc層	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	〃・〃	〃	粗	〃	〃
529	C-11	IVb層	〃	〃	灰白	灰白	ロクロN	〃	〃	並	瓦器的
530	〃	IVc層	〃	〃	灰	灰	〃	〃	並	〃	
531	F-10	IVd層	〃	〃	〃	〃	ロクロN・横K	〃	〃	〃	
532	F-11	〃	〃	〃	〃	〃	N・ロクロN	〃	〃	〃	
533	C-11	IVb層	〃	〃	〃	〃	ロクロN	〃	〃	良	
534	E-5	IVc層	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	ロクロN→N	〃	〃	悪	赤焼の須恵器?
535	〃	〃	〃	〃	灰白	灰白	ロクロN	〃	粗	並	
536	C-11	IVb・IVd層	〃	〃	灰黄	黄灰	〃	〃	並	悪	赤焼の須恵器?
537	G-6	IVc層	〃	〃	灰	灰	〃	〃	〃	良	
538	H-6	IVd層	〃	〃	〃	黄灰	〃・横K	〃	細	〃	
539	C-11	〃	〃	高台付坏	灰～灰白	灰白	ロクロN	〃	〃	〃	内外ロクロ痕明瞭
540	G-3	〃	〃	〃	にぶい赤褐	にぶい赤褐	〃	〃	並	悪	赤焼の須恵器?
541	C-11	IVb層	〃	高台付椀?	橙	橙	〃	〃	〃	〃	〃・ヘラ切後N
542	E-7	IVc層	〃	高台付杯?	灰	灰	ロクロN・下端K	〃	〃	良	ヘラ切
543	D-10	IVd層	〃	〃?	灰黄	灰褐	ロクロN	〃	細	並	高台内丁寧N
544	C-9	IVb層	〃	〃?	灰白～灰褐	〃	〃	〃	粗	悪	赤焼?・高台欠N
545	H-7	〃	〃	〃	にぶい赤褐	にぶい赤褐	〃	〃	並	〃	赤焼?・高台内N
546	D-8	〃	〃	〃?	灰白	灰	〃	〃	〃	並	高台内N
547	D-11	IVd層	〃	〃?	灰	〃	〃	〃	細	良	高台内丁寧N
548	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃・N	並	〃	高台欠N
549	D-8	IVb層	〃	〃	〃	〃	〃	ロクロN	粗	並	内外ロクロ痕明瞭
550	D-11	IVc層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	細	良	高台欠N

表11　肱穴遺跡出土遺物観察表（11）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調 外器面	色調 内器面	調整 外器面	調整 内器面	胎土	焼成	備考
551	C-11	IVc層	須恵器	高台付坏	灰～灰白	灰	ロクロN	ロクロN	並	良	外面自然釉
552	E-5	〃	〃	〃	灰	〃	〃	〃	緻	〃	高台内丁寧N
553	I-5	II d層	〃	〃	灰～灰白	灰白	—	〃・KN?	並	〃	高台内N
554	C-11	IVd層	〃	〃	褐灰	灰赤	ロクロN	ロクロN	緻	並	高台欠損N
555	〃	IVc層	〃	〃	灰	灰	〃	〃	〃	〃	裏付に砂目圧痕有
556	F-6	〃	〃	〃	黄灰	にぶい橙	〃	〃	〃	〃	外面自然釉
557	C-8	IVb層	〃	〃	灰	灰褐	〃	〃	粗	悪	高台内N
558	C-10	II d層	〃	〃	〃	灰	〃	〃	緻	良	外面自然釉
559	E-8	IVc層	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	—	〃	並	〃	高台内丁寧N
560	D-7	IVb層	〃	〃	暗灰	青灰	ロクロN	〃	緻	〃	〃
561	C-11	IVd層	〃	〃	黄灰	灰褐	〃	〃	並	並	高台欠損N
562	F-6	IVc層	〃	〃	灰	灰白	〃	〃	粗	良	〃
563	F-7	〃	〃	〃	〃	灰	〃	〃	緻	〃	外面自然釉
564	D-6	IVb層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	高台内N
565	C-11	IVd層	〃	〃	灰白	〃	〃	〃	〃	〃	高台内「×」線刻
566	H-6	IVc層	〃	高台付皿?	暗灰～灰	〃	〃	〃	〃	並	外面自然釉
567	D-11	IVd層	〃	高台付坏?	灰	〃	〃	〃	〃	良	高台欠損N
568	E-7	IVb層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	〃	外面自然釉
569	F-8	IVd層	〃	高台付椀?	灰白	灰褐	〃	〃・N	粗	悪	高台内丁寧N
570	E-4	IVc層	〃	高台付皿?	〃	灰白	〃	〃・M(見込)	〃	良	転用硯?
571	F-4	IVd層	〃	皿	灰	〃	〃	ロクロN	並	並	瓦器的
572	D-11	IVc層	〃	〃	灰～灰白	灰	〃	〃	緻	〃	外面に砂目圧痕有
573	E-8	IVd層	〃	〃	灰	〃	〃	〃	並	良	ヘラ切
574	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	口唇部自然釉
575	C-11	IVb・IVc層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	並	ヘラ切後N
576	F-4	IVc層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	ヘラ切
577	C-10	II d層	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	良	〃
578	E-5	〃	〃	壷	〃	〃	〃	〃	緻	〃	口縁自然釉
579	I-11	IVd層	〃	〃	暗灰	灰白～褐	〃	〃	緻	〃	〃
580	D-11	IVc層	〃	〃	灰黄褐	褐灰	〃	〃	並	〃	外面自然釉
581	C-11 D-11	〃	〃	〃	灰～灰白	灰	〃	〃	〃	良	〃
582	F-4	IVb層	〃	〃	灰白	灰白	〃	横N	〃	並	高台内墨花状押圧
583	C-9	IVd層	〃	〃	オリーブ黒	灰	〃	ロクロN	〃	〃	底部目積痕有
584	D-11	〃	〃	〃	灰	〃	〃・横KN	〃	粗	良	板合痕明瞭
585	E-8	〃	〃	〃	灰白～青灰	暗青灰	〃・平行T	〃・AG	並	並	肩以下自然釉
586	F-7	IVc層	〃	〃	褐灰～灰褐	灰～灰白	〃・格子目T	〃・〃	〃	〃	口縁部自然釉
587	H-14	〃	〃	〃	灰	灰白	ロクロN	ロクロN	粗	良	〃
588	I-8	IVd層	〃	〃	〃	灰	〃→平行T	同心円AG	緻	〃	
589	C-11	IVc・IVd層	〃	〃	灰～灰白	〃	ロクロN	ロクロN	並	並	外面自然釉
590	〃	IVc層	〃	〃	灰白	〃	〃	〃	〃	良	口縁部自然釉
591	G-8	〃	〃	甕?	灰	〃	〃→格子目T	〃・肩以下AG	〃	〃	
592	E-9	〃	〃	〃	〃	〃	ロクロN	ロクロN	細	並	器部厚着物有
593	E-8	〃	〃	〃	暗灰	灰～灰白	〃・斜N	〃	粗	〃	内外面自然釉
594	H-6	〃	〃	〃	灰	灰	〃・平行T	〃・同心円AG	並	良	外面自然釉
595	F-5	〃	〃	高坏	灰～灰白	灰白	ロクロN	ロクロN	粗	〃	坏外面自然釉
596	D-10	〃	〃	〃	灰	灰	〃	〃	並	〃	
597	F-6	IVb層	〃	〃	オリーブ黒	〃	〃	〃	〃	並	外面磨滅・自然釉
598	F-7	IVc層	〃	坏の転用品	灰白	灰白	〃→研磨	〃→研磨	〃	良	メンコ?
599	〃	IVd層	土師質	鉢	褐	褐	N	N・布目圧痕	粗	〃	外面指頭痕有
600	E-4	II d層	〃	〃	〃	〃	〃	〃・〃	並	並	〃
601	E-5	IVd層	〃	〃	〃	〃	〃	〃・〃	〃	〃	外面磨滅
602	F-4	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	〃・〃	〃	〃	〃・616と同一?
603	E-8	〃	〃	〃	灰褐～褐	褐	〃	〃・〃	〃	〃	外面指頭痕有
604	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	〃・〃	〃	良	〃
605	E-7	〃	〃	〃	暗褐	赤褐	〃	N	〃	並	全面磨滅

表12　肱穴遺跡出土遺物観察表（12）

挿図番号	出土区	遺構・層	種別	器種	色調		調整		胎土	焼成	備考
					外器面	内器面	外器面	内器面			
606	E-7	IVd層	土師質	鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	N	N・布目圧痕	並	並	全面磨滅
607	E-6　F-5	IVc層	〃	〃	〃	〃	〃	〃・〃	粗	良	外面自然釉?
608	C-11	IVd層	〃	〃	褐	〃	〃	〃・〃	〃	並	外面指頭痕有
609	F-4	IVc層	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃・〃	〃	〃	
610	C-8	〃	〃	〃	橙	橙	〃	〃・〃	並	良	
611	E-4	IVd層	〃	〃	にぶい橙	〃	〃	〃・〃	粗	〃	外面指頭痕有
612	D-11	〃	〃	〃	橙	橙	〃	布目圧痕	並	並	
613	D-1	〃	〃	〃	暗褐～褐	にぶい黄橙	〃	N・布目圧痕	粗	〃	内外指頭痕有
614	J-1	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	布目圧痕	並	良	
615	F-5	〃	〃	〃	暗黄橙	にぶい黄橙	〃	N・布目圧痕	〃	並	外面指頭痕有
616	D-9	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃・〃	〃	〃	〃
617	E-5	〃	〃	〃	褐	褐	〃	〃・〃	〃	良	〃
618	E-8	〃	〃	〃	にぶい橙	橙	〃	布目圧痕	粗	並	
619	G-3	〃	〃	〃	〃	にぶい橙	〃	〃	細	〃	
620	B-11	〃	〃	〃	褐	褐	〃	N・布目圧痕	粗	〃	621と同一?
621	C-11	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙	〃	〃・〃	〃	〃	外面指頭痕有
622	E-11	〃	〃	〃	〃	褐	〃	〃・〃	並	〃	〃
623	E-9	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃・〃	〃	〃	
624	E-8	〃	〃	〃	褐	褐	〃	〃・〃	粗	〃	
625	D-6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃・〃	並	良	
626	C-11　D-11	〃	〃	〃	黄橙	にぶい黄橙	〃	〃・〃	粗	〃	外面指頭痕有
627	B-11	〃	〃	〃	橙	橙	〃	布目圧痕	並	〃	〃
628	D-11	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	粗	並	
629	D-5　F-6	IVc層	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	N・布目圧痕	並	〃	外面指頭痕有
630	D-11	〃	〃	〃	橙	にぶい橙	〃	〃・〃	〃	〃	〃
631	E-9	IVd層	〃	〃	〃	〃	〃	布目圧痕	粗	〃	〃・縄文
632	D-8	II d層	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	N・布目圧痕	並	〃	外面指頭痕有
633	C-11	IVd層	〃	〃	褐	褐	〃	N・〃なし?	粗	〃	
634	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃・〃	〃	〃	外面指頭痕有
635	D-6	〃	〃	〃	〃	にぶい黄橙	〃	〃・〃	並	〃	〃
636	D-10	〃	〃	〃	にぶい黄橙	黄橙	〃	〃・〃	〃	〃	全面磨滅
637	G-5	〃	緑釉陶器	皿?	浅黄	明黄褐	ロクロN	ロクロN	〃	〃	洛北系?
638	I-6	IVb層	土師質	—	灰白	灰白	〃	〃	粗	〃	内面赤色顔料付着
639	E-8	IVc層	〃	紡錘車	浅黄橙	浅黄橙	〃	〃	〃	良	土師坏転用品
640	E-5	IVb層	〃	土錘	灰白	—	—	—	細	〃	
641	D-11	IVc層	〃	〃	〃	—	—	—	〃	並	
642	〃	IVd層	〃	〃	〃	—	—	—	〃	良	
643	F-10	II d層	〃	〃	にぶい黄橙	—	—	—	〃	〃	
644	F-7	IVc層	〃	〃	橙～灰白	—	—	—	〃	並	外面指頭痕有
645	H-6	〃	木製品	椀	黒	黒	—.	—	—	—	内外面黒漆塗
646	D-6	IVd層	〃	柱根	—	—	—	—	—	—	
647	F-7	〃	祭石製品	—	—	—	—	—	—	—	研磨痕・工具痕有
648	F-6	〃	〃	カマド支柱?	—	—	—	—	—	—	全面赤変
649	H-2	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	上端部赤変
650	F-6	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	全面赤変

（出土遺物観察表　凡例）

1　色調名は『新版標準土色帖』を参考にした。

2　遺構・層で示した「上」「中」「下」「床」「括」は、それぞれ「上層」「中層」「下層」「床面」「一括」の略である。

3　器面調整については次の略号を用い、調整方向は「縦・横・斜」で示した。
N＝ナデ　H＝ハケメ　KN＝工具ナデ　K＝ケズリ　T＝タタキ　AG＝当具痕

4　胎土については、混和材の含有率及び粒子の大きさから次のように分類した。
細＝0.5㎜以下のもの、または混和材をほとんど含まないもの　　並＝0.5㎜～２㎜のもの
粗＝２㎜以上のもの、または３種類以上の混和材を含むもの

IMA BOU

今房遺跡

＜概報＞

遺跡略号：ＩＭＢ

所 在 地：宮崎県都城市横市町字今房

1．調査の概要

今房遺跡の発掘調査は、ほ場整備事業に伴う面工事で削平される範囲及び排水路・農道の敷設部分である約7,610㎡を対象に実施した。発掘は10m×10mを１単位とするグリッド法を用いて行い、調査対象区域には公共座標軸系のＳ・Ｎ座標線に一致したメッシュを設定した。グリッド番号については、東西方向を算用数字で、南北方向をアルファベットで表記し、その組み合わせで各グリッドを呼称している。なお、今回は調査地点が点在しているため便宜上各調査区をＡ～Ｄ地区とし、出土遺構についても調査区ごとに通し番号で表記した。

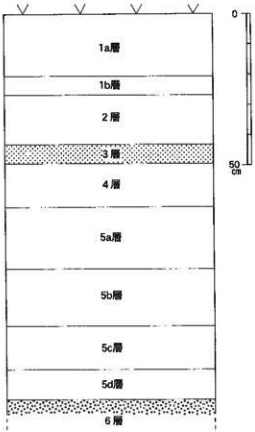
調査は、ほ場整備後に復する現水田耕作土層の剥ぎ取りを行った後、中世水田跡の出土が予想された第３層（桜島文明降下軽石層）上面までの掘り下げに着手した。しかし、Ｂ地区北半部以外の地点では、中世水田の覆土である第３層が近世以降の耕作によってかなり攪乱されており、水田を面的に把握することが困難であったため、急遽第４層まで重機で掘り下げ、それ以下の層について手作業で調査を行った。その結果、Ａ・Ｃ地区及び工法変更によって追加調査となったＤ地区において、縄文時代後期後半～晩期頃の土坑群や弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の集落跡、中世後半頃（桜島文明軽石降下前後）の掘立柱建物群などを検出することができた。また、Ｂ地区においては、古代末～中世前半頃の遺構・遺物や中世後半頃の水田跡を確認することができた。

現場における作業は平成11年５月11日から12月３日まで行い、その後都城市埋蔵文化財整理収蔵室において遺物の整理と概要報告書の作成を行った。

2．遺跡の基本層序

今房遺跡の層序は、Ｂ地区がやや異なった様相を示しているものの、基本的には次のとおりである。

第1a層：表土（現耕作土）、第1b層：現耕作土の基盤層、第２層：文明降下軽石粒をまんべんなく含む黒色シルト層、第３層：桜島文明降下軽石層（15世紀後半頃に噴出した桜島起源の軽石層）、第４層：黒色弱粘質シルト層、第5a層：御池降下軽石粒をわずかに含む黒色弱粘質シルト層、第5b層：御池降下軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層、第5c層：御池降下軽石粒をまんべんなく含む黒褐色弱粘質シルト層、第5d層：御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色弱粘質シルト層（御池降下軽石層への漸移層）、第6層：霧島御池降下軽石層（約4,200年前に霧島御池火口より噴出した軽石層）、第７層：漆黒色粘質シルト層、第８層：鬼界アカホヤ火山灰層（約6,300年前に鬼界カルデラより噴出した火山灰層）…と続く。このうち今回調査を実施したのは、第６層上面までである。各時期の遺構検出面は第６層上面であるが、中世の遺構の一部は第４層下部で確認した。また、第３・４層が中世、第４～5c層が縄文時代後期後半から古墳時代初頭頃の遺物包含層である。



第１図　今房遺跡基本土層図

第２図　今房遺跡調査区域図

３．遺構と遺物

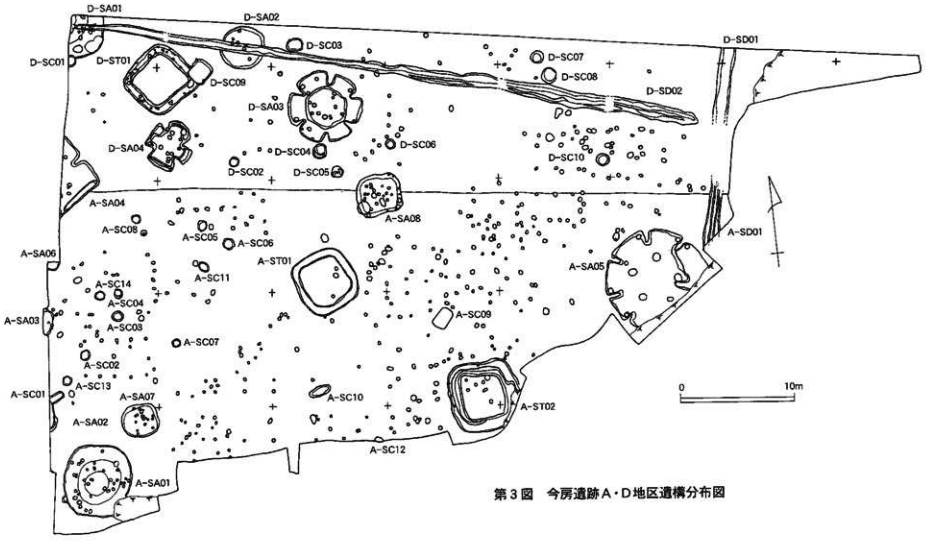
今回の調査で検出した遺構・遺物は、中世後半、古代～中世前半、弥生時代後期後半～古墳時代初頭、縄文時代後・晩期の４時期に分けられる。中世の遺構は調査対象区のほぼ全域で検出されたが、密度的にはかなり低かった。掘立柱建物跡６棟、溝状遺構９条、土坑10基、柱穴群のほか、文明降下軽石層に覆われた水田や畝状遺構（畑跡？）を確認している。古代末～中世前半頃の遺構は基本的にＢ地区で検出されたもので、溝状遺構５条と土坑４基を確認しているが、共伴遺物が少ないため時期を絞り込むことはできなかった。弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の遺構については、竪穴住居跡18軒、周溝状遺構３基、土坑３基、柱穴群に加え、数カ所の土器集中地点がみとめられる。共伴遺物からみると、弥生時代後期後半～終末期頃の遺構群は遺跡の立地する低位河岸段丘面の東側に、終末期～古墳時代初頭頃の遺構は西側に偏在していることから、当時の集落域の変遷を追うことができる。縄文時代後・晩期に比定している遺構は、土坑９基のみである。これらの大半は用途不明であるが、石器が意図的に配置されたような状態（デポ？）で出土した土坑や、リン・カルシウム分析によって床面付近から高濃度のリン酸が検出され、リン酸を多く含む生物遺体が存在していた可能性が指摘された土坑などを確認している。

各時期の出土遺物についてみると、中世の舶載磁器や土師器、古代の洛西系緑釉陶器、須恵器、土師器などの出土数はかなり少ない。弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の遺物は、各遺構に伴って多量の土器や石器が出土している。これらの土器の中には、免田式の長頸壺や安国寺式の複合口縁壺といった移入系土器のほか、線刻を有する土器や小型精製土器などが含まれている。また、花弁状住居跡（A-SA05）内からは朱玉も出土している。縄文時代後・晩期の遺物は土坑内を中心に、御領式・三万田式～黒川式併行期の土器とともに、磨石、磨製石斧などの石器が出土している。

以下、各調査区ごとの概要について記し、詳細については本報告で行うこととした。

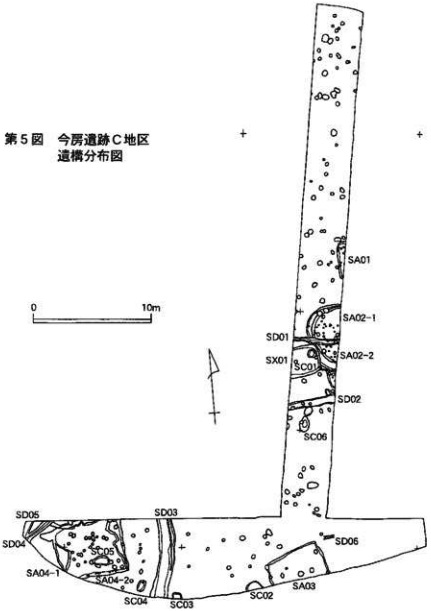
１）Ａ地区　（調査面積：約1,260㎡）

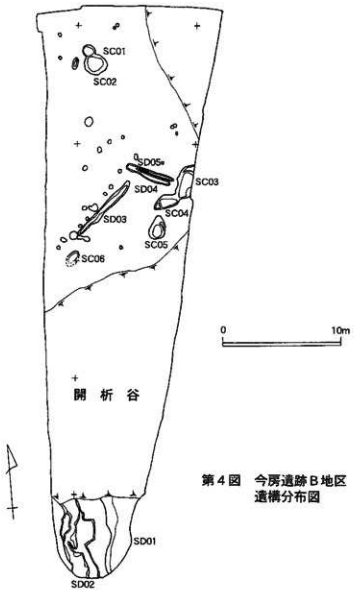
ほ場整備の一環として、横市川周辺に広がる低地面（旧氾濫原面）の高さまで切土工事が行われるＡ地区では、第４層下部で中世後半の掘立柱建物跡６棟を検出したほか、第６層上面で中世の溝状遺構１条、土坑３基、柱穴群、第６層上面で弥生時代後期後半～終末期の竪穴住居跡８軒、周溝状遺構２基、土坑１基、



第３図　今房遺跡Ａ・Ｄ地区遺構分布図

第５図　今房遺跡Ｃ地区
遺構分布図





第４図　今房遺跡Ｂ地区
遺構分布図

掘り込みを伴わない土器集中地点数カ所を確認している。また、同じ検出面上で縄文時代後期後半～晩期頃の遺構として土坑４基を検出しているほか、時期不明の土坑も６基確認している。

遺構検出面である第６層上面の状況から当地区の旧地形を推察すると、全体的には南側の横市川に向って緩やかに傾斜する平坦面であるが、調査区南西隅から北東方向に向けて浅い谷地形がみとめられ、その基底部では現在でも湧水がみとめられる。今回検出した遺構のうち、縄文時代の土坑はこの谷の落ち際に沿って点在していることから、その時期までは谷地形が残っていた可能性があるが、徐々に埋没が進み、弥生時代の遺構が築かれる頃には、現況に近い平坦地になっていたと想像される。なお、段丘端部（遺跡南端）は、遺構の検出状態などから後世の水路開削等によって崩落し、弥生時代の段階よりも北側へ後退している様子がうかがえる。

中世の遺構については、出土遺物がかなり少ないことから舶載磁器類の時期で推測すると、概ね14世紀後半から15世紀後半頃までの年代幅に収まるようである。このうち掘立柱建物跡や土坑の多くは文明軽石の降下前後の時期（15世紀後半頃）に集中しており、また建物の棟軸とほぼ平行に延びる同時期の溝状遺構（A-SD01、D-SD01・02）も検出されていることから、この時期には溝によって区画された集落が段丘端部一帯に展開していた可能性が考えられる。弥生時代後期後半～終末期に比定した竪穴住居跡は、隅丸方形プランで大型（６ｍ四方）の竪穴住居（A-SA01）、小型（３～４ｍ四方）の竪穴住居（A-SA02・3・7・8）、いわゆる「花弁状住居」（A-SA04・05）の３タイプに分けられる。また花弁状住居については、円形プランを基調とし複数の突出壁を有する住居（A-SA05）と、方形プランがベースになった「日字形」の住居（A-SA04）の２種類が検出されている。現在出土遺物の整理作業中であるため、ここでこれらの並存関係について言及することは控えるが、隣接するＣ・Ｄ地区で検出した竪穴住居跡や周溝状遺構とともに、同時期の遺構をある程度まとまった単位で捉えられるものと考えている。なお、各住居跡に伴って多量の遺物が出土しているが、全体的な印象として遺物の量は大型隅丸方形プラン、小型隅丸方形プラン、花弁状住居の順に少なくなっている。また、隅丸方形プランの住居からは甕や壺などがほぼ完形で出土しているのに対して、花弁状住居内の土器は破片が主流を占めている。半面、朱玉のように特殊な遺物の出土は花弁状住居に限られており、特異的な傾向を示しているといえよう。周溝状遺構内からは、重弧文が施された免田式の長頸壺や大型の高坏などが多量に廃棄された状態で出土したほか、床面からやや浮いた位置で泥炭化した炭化粒層を確認することができた。局所的に分布するこうした炭化物は、周溝状遺構の機能を考える上で興味深い資料である。縄文時代後期後半～晩期頃の遺構としては、土坑４基を確認している。出土遺物はかなり少なく、大半が土器片をわずかに伴うのみであったが、後期後半頃の土器が出土した土坑（A-SC03）では、ほぼ同じレベルに磨製石斧１点と磨石２点が意図的に配置されたような状態で検出されており、デポ（埋納）の可能性も示唆できる。

２）Ｂ地区　（調査面積：約570㎡）

農道新設等に伴い切土工事が行われるＢ地区においては、第３層下部で中世後半の水田面を、第６層上面で古代末～中世前半の溝状遺構５条、土坑４基、柱穴群、縄文時代後・晩期頃の土坑２基を検出している。遺構検出面である霧島御池降下軽石層（第６層）の堆積は、調査区北西隅をピークに南・東方向へ緩やかに傾斜しているが、調査区中央部付近に谷地形が入っているため、南北方向は馬ノ背状の地形を呈している。また、谷地形の部分と調査区北東部の傾斜地では湧水が激しかった。

中世の水田や畝状遺構（畑跡？）は本来調査区全域に広がっていたと推察されるが、表土から第６層までの層厚が比較的薄い調査区北西部は後世の耕作などによって削平を受けており、こうした生産遺構の確認

はできなかった。今回の調査では、文明降下軽石層（第３層）が残存していた北東部一帯で面的に水田と畝状遺構を検出したほか、谷地形部分の断面で棚田状に造成された水田層を確認している。とくに北東部の水田面では、火山災害からの復旧を目的として天地返しを行った痕跡や当時の人々の足跡、また一時的に畑地として利用した可能性を示す畝状遺構などがみとめられた。

３）Ｃ地区　（調査面積：約440㎡）

Ａ地区に西接しているＣ地区では、排水路敷設部分と切土工事が実施される部分について調査を実施している。当地区も南側へ緩やかに傾斜する平坦面であるが、A-SC06の南側に段差があるため、調査区が東西に広がる部分とは若干の比高差をみる。遺構としては、中世後半頃の溝状遺構６条、土坑６基、用途不明の竪穴状遺構１基、柱穴群などがある。これらはいずれも埋土中に文明軽石の堆積がみとめられないため、Ａ地区で検出した建物群とほぼ同時期か、やや先行するものと考えている。弥生時代後期後半～古墳時代初頭頃の遺構としては、竪穴住居跡６軒と柱穴群が挙げられる。このうち２箇所(C-SA02・C-SA04)で住居跡の切り合いがみとめられるが、いずれも先行する住居のほとんど真上で建て替えが行われていたため、当初は花弁状住居の突出部と考えて調査を進めていた。しかし、張床状の床面が各々の掘形に沿って上下別々に形成されていたことや、各住居の床面直上から出土した土器に時期差がみられることなどから、先行する住居がかなり埋没した段階でその窪みを利用して後出する住居が構築された、と判断するに至った。また、当地区ではＡ・Ｄ地区で検出した遺構よりもやや時期が下がる住居跡が検出されており、集落域が徐々に東から西へと移動していた可能性が考えられる。

４）Ｄ地区　（調査面積：約840㎡）

Ｄ地区はＡ地区に南接しており、工法変更により追加で調査を実施した地点である。地形的にはＡ・Ｃ区同様南側へ緩く傾斜する平坦面であるが、調査区北東部は急激に東側へと落ち込んでおり、南北方向に谷地形が形成されている可能性がある。本来的にはＡ地区の一部であり、確認した遺構・遺物の構成は同じである。中世の遺構としては、掘立柱建物跡、土坑、柱穴群のほか、A-SD01とともに中世建物群の周囲を方形に巡る溝状遺構(D-SD01・02)がある。D-SD01はA-SD01と同一の溝であると考えられ、東側急斜面に沿うように北走している。D-SD02は浅い断面Ｕ字形を呈し、弥生時代の竪穴住居を切りながら調査区西北端から東走し、D-SD01の手前で立ち上がる。これらの溝は比較的浅く、D-SD01とA-SD01の一部では床面が硬化・赤変していることから、道路的な役割を兼ねた区画溝の可能性が高い。弥生時代後期後半～終末期の遺構は、竪穴住居跡４軒、周溝状遺構１基、土坑２基、柱穴群を確認している。また、Ａ地区で検出したA-SA04・08の北半部も当地区に含まれる。これらを含め、Ｄ地区では形状の異なる花弁状住居跡が３軒連なった状態で出土している。なお、周溝状遺構(D-ST01)の基底部付近からは大量の土器片とともに灰状の堆積物が検出されている。今回の調査では、Ａ地区の周溝状遺構でも炭化物の堆積が確認されており、周辺で火を用いた行為が行われていたことはほぼ確実視できよう。明確な機能が判然としない周溝状遺構の位置付けを今後検討していく上でも、有用な資料であると思われる。縄文時代晩期に比定される遺構として、土坑３基がある。これらは当該期の土器・石器をまばらに含んでいるが、用途は不明である。ただし、規模の大きいD-SC07・08については土坑墓の可能性も考えられるため、㈱古環境研究所に委託してD-SC07埋土のリン・カルシウム分析を行っている。その結果、溶解性の高いカルシウムについては特に際立ったデータは得られなかったが、床面付近で高濃度のリン酸が検出されたことから、遺構内にリン酸を多く含む生物遺体が存在していた可能性を示唆することができよう。

MA WATARI

馬渡遺跡(第1次調査)

＜概報＞

遺跡略号：MWTR

所在地：宮崎県都城市祝原町字馬渡

1．調査の概要

馬渡遺跡の発掘調査は、ほ場整備事業に伴う面工事で削平される範囲及び排水路設置部分約9,900㎡が調査対象で、今年度（第１次調査）はその内の約4,500㎡について発掘を実施している。調査は他の遺跡と同様に10m×10mを１単位とするグリッド法を用いて行い、調査対象区域には公共座標軸系のＳ・Ｎ座標線に一致したメッシュを設定した。グリッド番号は東西方向を算用数字で、南北方向をアルファベットで表記し、その組み合わせで各グリッドを呼称している。なお、今回の調査区域は２地点に分かれるため、便宜上西側の調査区をＡ地区、東側をＢ地区とし、遺構については対象区全体での通し番号とした。

調査は、ほ場整備後に復する現耕作土層の剥ぎ取りを行った後、第３層（桜島文明降下軽石層）上面まで漸次掘り下げながら、文明降下軽石層直下に遺存している中世水田面を検出するところから着手した。ところが、Ｂ地区においては調査区の東・西部にみとめられる谷地形部分で良好な遺存状態の中世水田面を確認することができたが、Ａ地区では盛土である第３層が近世以降の耕作に伴う撹乱や旧地形の起伏によってブロック化しており、その直下で中世水田面を把握するのは困難な状況であったため、第４層から第５層の一部まで重機で掘り下げ、それ以下の層について手作業で調査を行った。その結果、Ａ地区では縄文時代と古代、中世の遺構・遺物を、Ｂ地区では縄文時代、弥生時代、中世の遺構・遺物を確認した。

現場における作業は平成11年11月25日から平成12年３月31日まで行い、平成12年４月以降第２次調査と出土遺物の整理作業を行っていく予定である。

2．遺跡の基本層序

馬渡遺跡の層序は、谷状地形がみとめられたＢ地区の一部を除くと、基本的には両地区ともほぼ共通しており、第1a層：表土（現耕作土層）、第1b層：現耕作土の基盤層、第2a層：文明降下軽石粒をまんべんなく御池降下軽石粒をわずかに含む明褐灰色シルト層、第2b層：文明降下軽石粒を多量に御池降下軽石粒をわずかに含む赤褐色シルト層、第３層：桜島文明降下軽石層（15世紀後半頃に噴出した桜島起源の軽石層）、第４層：御池降下軽石の中・細粒をまんべんなく含む暗茶褐色弱粘質シルト層、第５層：御池降下軽石細粒をまばらに中粒をわずかに含む明茶褐色弱粘質シルト層、第6a層：御池降下軽石中・細粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層、第6b層：御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色弱粘質シルト層（御池降下軽石層への漸移層）、第７層：霧島御池降下軽石層（約4,200年前に霧島御池火口より噴出した軽石層）…と続く。このうち遺構検出面となるのは第７層上面で、第４層～第6a層が縄文時代後期から中世にかけての遺物包含層である。なお、Ｂ地区北側の谷地形部分ではこれらと若干様相が異なるため、層番号は付記せずに大まかな流れのみを記しておきたい。基本的に第３層までの堆積は他の地点と共通するが、それ以下は植物遺体を多く含む黒色粘質シルト層、暗オリーブシルト層、灰オリーブシルト層が順次堆積し、さらにその下部には木質類を多量に含む暗赤褐色シルト層がみとめられる。また、通常この下位に遺存している霧島御池降下軽石層がこの地点では検出されず、かわりに砂層と粘質土層が互層になって堆積し、その下部では二次堆積のアカホヤらしき層が確認されている。土層中に含まれる多量の植物遺体は、上位がヨシ・アシなどの草本類、下位が木本類に分かれることが明らかになっており（古環境研究所・杉山真一氏教示）、土層の堆積状況から推察する限り、この谷地形部分では肱穴遺跡で確認された照葉樹の湿地林のような植物相からヨシ・アシ等の草本類主体の植生へ変移し、それらが泥炭化した土壌を耕作土とする水田経営の開始へ、という流れが推測される。詳細な自然科学分析の結果を待たねばならないが、谷地形に囲まれた微高地部分で検出した縄文から弥生時代の遺構・遺物の位置付けを考える上で、こうした植生の変化は重要な意味をもつと考えている。

3．遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構・遺物は、中世後半、古代、弥生時代後期頃、縄文時代後・晩期の４期に大別される。中世の遺構には、Ｂ地区を中心に確認した文明降下軽石層に覆われた水田面と溝状遺構、柱穴群がある。古代の遺物はＡ・Ｂ両地区で出土しているが、全体的にはＡ地区に偏在する傾向がある。また、当該期の遺構もＡ地区のみで確認しており、かなり高い密度で分布している柱穴群の中から検出された掘立柱建物跡や土坑などがある。弥生時代後期頃の遺構については、Ｂ地区で検出した該期の土器・石器を共伴する竪穴住居跡や柱穴群がある。縄文時代後・晩期に比定している遺構は土坑のみで、遺物の量も多くはない。以下、各調査区ごとの概要について記し、詳細については本報告で行うこととした。

1）Ａ地区

今回の調査対象区域の西側に位置しているのがＡ地区で、さらにその中央を現代の用排水路が分断していることから、便宜上東ブロックと西ブロックに分けて呼称している。当地区では、中世、古代、縄文時代後期後半頃の遺構・遺物を確認している。

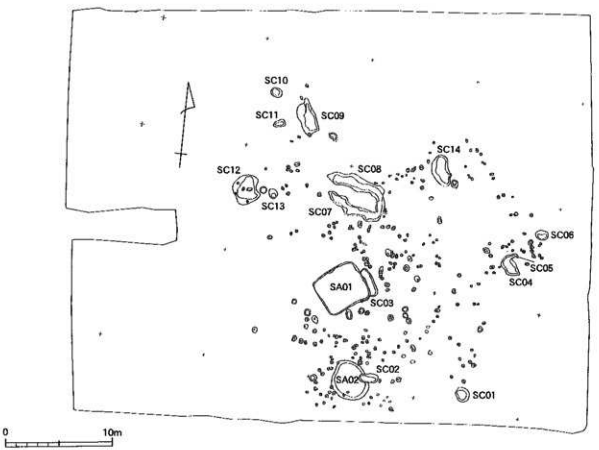
まず、中世については、水田面の検出はできなかったものの13世紀後半～14世紀前半頃の舶載磁器や国産陶器類がかなりみとめられることから、今回検出した溝状遺構や柱穴の中のいくつかはこれらとほぼ同時期であると想定している。具体的には、旧地形として残存していた微丘陵上に分布している土坑、柱穴群の一部と、これらを取り囲むように丘陵辺縁部を巡っている溝状遺構の一部、調査区西北部から南東方向に走行するSD01などが当該期の所産の可能性がある。柱穴の時期精査が遅れているため、どの程度の密度で中世遺構が分布しているかは不明であるが、集落が存在していた可能性も否定できない。なお、これらは横市川を挟んだ対岸に立地している鵜喰遺跡とほぼ同時期の遺構群であることから、横市川一帯の中世前半の様相を考える上で両遺跡の意味合いは大きい。

古代については、当遺跡のすぐ東側に位置している中尾山・馬渡遺跡との関係を念頭において調査を進めている。緑釉陶器や越州窯系青磁といった一般集落跡とは断じにくい遺物の出土で知られる同遺跡に比べると、今回の調査で出土した遺物は若干見劣りするため、特殊な性格を有していた中尾山・馬渡

第１図　馬渡遺跡（第１次）調査区域図

第２図　馬渡遺跡（第１次）Ａ地区遺構分布図

〈凡例〉
ＳＡ：竪穴住居跡
ＳＢ：掘立柱建物跡
ＳＣ：土坑
ＳＤ：溝状遺構



第３図　馬渡遺跡(第１次)Ｂ地区遺構分布図

遺跡に付随する集落的印象は否めない。ただし、中尾山・馬渡遺跡の遺構の様子が不明瞭なため単純に比較することはできないが、当遺跡では総柱建物をはじめ複数の掘立柱建物跡が検出されており、さらに建物として確認することはできなかったが、西側ブロックにおいて非常に高い密度で検出されている柱穴群の中にはかなり大型の柱穴も含まれていることから、一般集落の場合でもかなりの規模を有していたと想像している。いずれにせよ、旧地形からみて次年度調査を予定している箇所が遺跡の主体部である可能性が高いことから、遺跡の全貌が明らかになった上でその位置付けを含めた検討を行っていきたいと思う。

当地区における縄文時代後期後半頃の資料については遺物の散布としてしか確認していないが、それまでのシラス台地上を中心とした生活エリアが水稲農耕開始期前夜において低地面へ拡大している様子を物語る資料として大変興味深い。肱穴遺跡等で確認された事例ともあわせ、こうした生活エリアの問題は今後検討していく必要があろう。なお、明確な時期は不明であるが、東側ブロックでは多数の風倒木痕が検出されている。低地面での調査事例が少ないため、これだけの密度で風倒木痕が確認されるのは奇異な印象を受けるが、前述したようにＢ地区北側の土層観察では木本類の植物遺体が多量に含まれる堆積層が確認されていることから、こうした植生と今回の風倒木痕との関連性についても考慮する必要がある。また、さきに触れた縄文時代後期以降の人的移動との関係(低地面において採集活動の対象となる照葉樹林等が形成されていた痕跡としての風倒木痕)も想定できないだろうか。

2）B地区

当地区は、遺跡南側の蓑原台地の端部から低地面（旧氾濫原面）に向って段を形成しながら傾斜してくる沖積段丘の最下位面に位置しており、東西に谷地形がみとめられることから、本来は舌状地形を呈していたと推察される。遺構はその谷地形部分を中心に中世の水田面を検出したほか、舌状の微高地面上で弥生時代後期と縄文時代晩期頃の遺構・遺物を確認している。まず、中世については、旧地形の傾斜に合わせて南から北へと棚田状に形成された水田面を検出している。その中には鵯喰遺跡で指摘されている天地返し等の痕跡がほとんどみとめられない水田も含まれており、災害復旧のプロセスや文明軽石の降下季節を推測する上で有効な資料といえよう。弥生時代後期頃の遺構としては、竪穴住居跡と柱穴群がある。とくに竪穴住居跡からは円形の孔が穿たれた石包丁や砥石などの石器が複数出土したほか、器台や線刻を有する短頸壺などが出土しており、当時の生活の一端をうかがい知ることができる。なお、当地区では湧水が激しく、微高地面上で確認した同住居跡も含め、多くの遺構が掘り下げ段階から水没した状態であった。地下水脈の変化は考慮できるものの当時もかなり劣悪な環境であったことが想像され、いかなる要因によって当該地のような低地面に集落が営まれていったのか、今後検討していく必要があろう。縄文時代晩期の遺構・遺物としては、土坑と刻目突帯文土器や黒色磨研土器片がみとめられる。

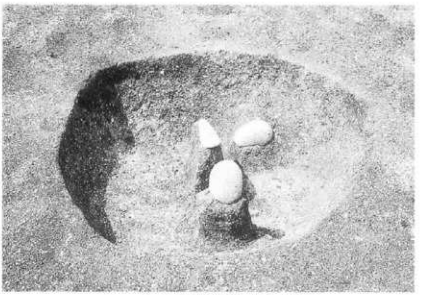
報告書抄録

書名	横市地区遺跡群　肱穴遺跡（1）　今房遺跡　馬渡遺跡（第1次）
副書名	県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第50集
編著者名	横山哲英
編集機関	宮崎県都城市教育委員会
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号
発行年月日	2000年3月31日

所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
肱穴遺跡（ひじあな） （縄文～古代縄）	宮崎県（みやざきけん） 都城市（みやこのじょうし） 横市町（よこいちちょう） 字山水（あざやまみず）	31° 44′ 55″	131° 01′ 55″	1998. 4. 22 ～ 1998. 12. 15	15,000㎡	農業基盤整備事業 （県営ほ場整備事業）
今房遺跡（いまぼう）	宮崎県（みやざきけん） 都城市（みやこのじょうし） 横市町（よこいちちょう） 字今房（あざいまぼう）	31° 44′ 52″	131° 02′ 25″	1999. 5. 11 ～ 1999. 12. 3	3,110㎡	
馬渡遺跡（まおたり） （第1次調査）	宮崎県（みやざきけん） 都城市（みやこのじょうし） 蓑原町（みのはらちょう） 字馬渡（あざまわたり）	31° 44′ 11″	131° 01′ 10″	1999. 11. 25 ～ 2000. 3. 31	4,500㎡	

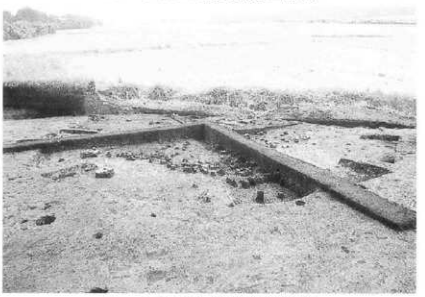
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
肱穴遺跡	集落跡・生産遺跡	縄文時代晩期～弥生時代前期 弥生時代後期～古墳時代前期 平安時代	円形住居跡・水田層 水路跡・木組状遺構 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・柱穴群	土器 石器 土器　石器 木製品 土師器　須恵器 墨書土器　緑釉陶器　製塩土器	縄文時代晩期～弥生時代前期頃の土器・石器を伴う集落跡と水田層を検出。
今房遺跡	集落跡・水田跡	縄文時代晩期 弥生時代後期～古墳時代初頭 平安時代 中世	土坑 竪穴住居跡・土坑・周溝状遺構 溝状遺構・柱穴群 水田遺構・掘立柱建物跡・溝状遺構	土器　石器 土器　石器 土師器　須恵器 緑釉陶器 施釉陶磁器	弥生時代後期～古墳時代初頭頃まで連綿と営まれた集落跡を検出。
馬渡遺跡（第1次）	集落跡・水田跡	縄文時代晩期 弥生時代後期 平安時代 中世	土坑 竪穴住居跡・土坑 掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑 水田遺構	土器 土器　石器 土師器 器台土器	区画溝が巡る可能性のある平安期の建物跡、谷地形に囲まれた舌状平坦部に営まれた弥生時代後期頃の竪穴住居跡を検出。

A地区遺構完掘状況


A－S C03内遺物出土状況

A－S A01内遺物出土状況

A－S A01完掘状況

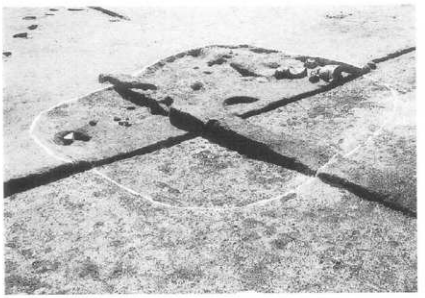

A－S A05内遺物出土状況

A－S A05内柱穴検出状況

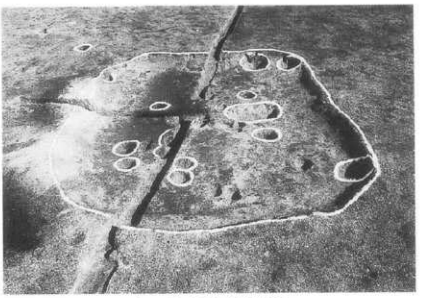
A－S A05完掘状況

A－S A07完掘状況

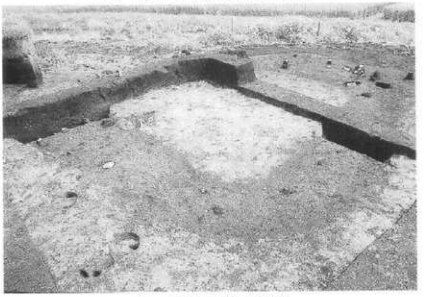
図版２



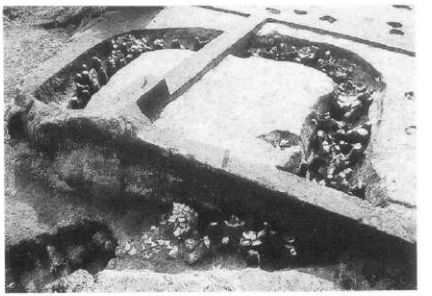
A－S A08内遺物出土状況



A－S A08完掘状況

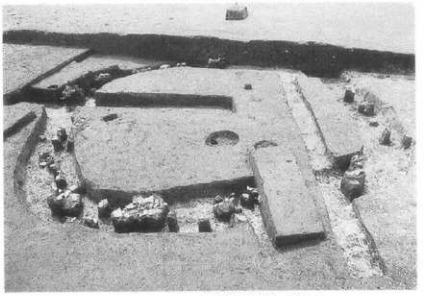


A－S T02検出状況

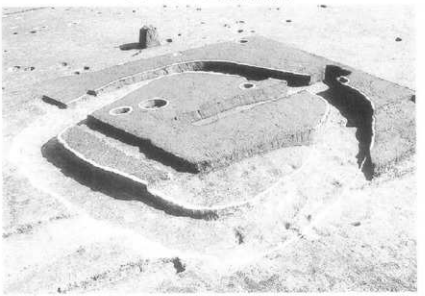


A－S T02内遺物出土状況

A－S T02完掘状況

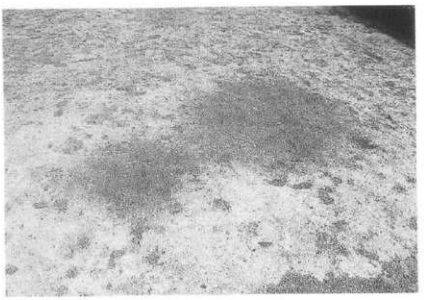


A－S T01内遺物出土状況



A－S T01完掘状況

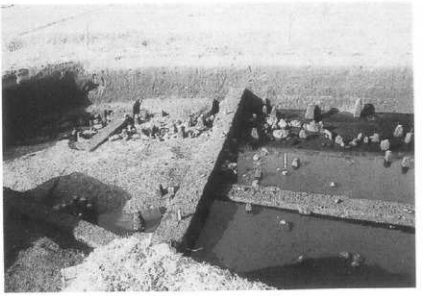
A地区中世遺構群検出状況



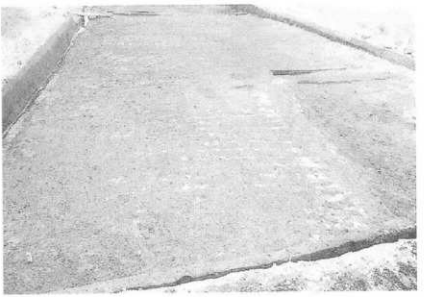
B－S C01・02検出状況

B－S D03～05検出状況

B－S D01・02検出状況

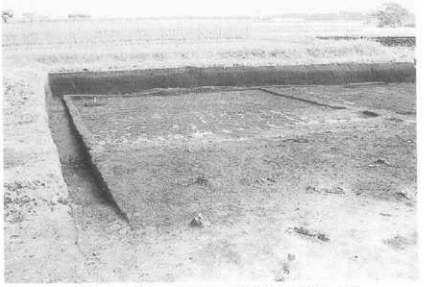


B－S D01・02完掘状況

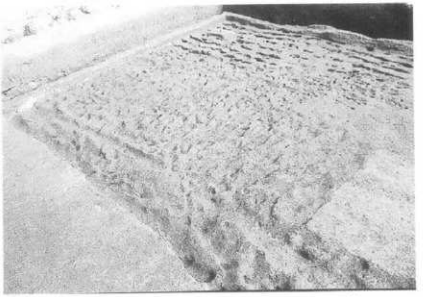


B地区中世水田跡検出状況（北側より）

B地区中世水田跡完掘状況（北側より）



B地区中世水田跡検出状況（西側より）



B地区中世水田跡完掘状況（南西より）